

Research on the residence of town center in Kanazawa City: From the point of view of the elderly, children and women

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yamagishi, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00034782

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



金沢市中心市街地における居住に関する研究

－高齢者・子ども・女性の視点による－

課題番号 12680100

平成12～15年度 科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））
研究成果報告書

平成17年3月

金沢大学 教育学部

山 岸 雅 子

研究組織

研究代表者 山岸雅子（金沢大学教育学部・教授）

研究経費

平成12年度	800千円
平成13年度	600千円
平成14年度	600千円
平成15年度	600千円
計	2,600千円

I. 高齢者とコミュニティバス

1. はじめに	3
2. 「金沢ふらっとバス」について	4
(1) 導入の背景・経緯	4
(2) 導入目的・対象者	4
(3) 「金沢ふらっとバス」の基本システム	5
3. 調査概要	6
4. 調査対象者の属性	7
(1) 性別・年齢	7
(2) 就業状況	8
5. 身体機能と外出の状況	9
(1) 階段の昇降	9
(2) 外出時の補助の状態	10
(3) 外出の頻度	11
(4) 外出の目的	11
(5) 外出時の交通手段	12
6. 「金沢ふらっとバス」の知名度・利用状況	14
(1) 知名度	14
(2) バス停からの距離	14
(3) 利用頻度	15
(4) 利用目的	17
(5) 外出機会の増加	18
7. 「金沢ふらっとバス」に対する日常利用者の評価 —満足度の概要— ...	20
8. 「金沢ふらっとバス」に対する日常利用者の評価 —車体および設備— ...	23
(1) 乗りやすさ	23
(2) 座席	24
(3) 降車ボタンの使いやすさ	24
(4) 電光掲示板の見やすさ	24
(5) 案内放送の聞きやすさ	25
(6) その他	25

9. 「金沢ふらっとバス」に対する日常利用者の評価　－システム－	26
(1) 運行時間帯	26
(2) 運行ルート	27
(3) 運行本数	28
(4) 料金	28
10. 「金沢ふらっとバス」に対する日常的利用者の要求　－バス待ち環境－	29
11. 「金沢ふらっとバス」に対する非日常利用者の要求	30
(1) 利用頻度の低い理由	30
(2) 利用促進の方策	31
12. 今後のふらっとバスの課題	34

II. 子どもの外遊び環境

1. はじめに	38
2. 調査概要	39
(1) 夏季の公園における外遊び実態調査　－予備調査－	39
(2) 春季の外遊び実態調査	39
3. 夏季における外遊びの実態	40
(1) 玉川町周辺	40
(2) 材木・横山町周辺	41
(3) 天神町	42
(4) 課題	43
4. 調査対象者の属性	44
(1) 性別・年齢	44
(2) 学校	44
5. 自動車による危険感	45
(1) 公園・遊び場	45
(2) 細街路	46
(3) 自宅付近	47
(4) 学校付近	49
6. 不審者などによる危険感	51
(1) 公園内の不審者	51
(2) 公園の不安を感じさせる高校生など	52

(3) 路上の人通り	5 3
7. その他の不安感の経験	5 5
8. 安全への方策	5 7
9. 希望する場所・施設	5 9
(1) 緑や水など自然の多い場所	5 9
(2) 遊具のたくさんある場所	6 0
(3) 屋内スポーツ施設	6 2
(4) 屋外スポーツ施設	6 3
(5) 自由な屋内遊び場	6 4
(6) おしゃべりできる場所	6 6
(7) 友だちと宿題などができる場所	6 8
(8) 勉強できる場所	6 9
(9) ひとりになれる場所	7 0
(10) 楽器演奏などできる場所	7 1
(11) 読みたい本がたくさんある図書館	7 3
(12) コンピュータを自由に使える場所	7 4
(13) 飲食店	7 5
(14) その他の店舗	7 6
(15) 最も設置希望する場所・施設	7 8
(16) その他設置希望場所・施設	8 0

Ⅲ. 既婚女性の求める住宅平面構成

1. はじめに	8 2
2. 調査概要	8 4
3. 調査対象者の属性<同室就寝夫婦>	8 5
(1) 年齢	8 5
(2) 職業	8 6
(3) 家族構成	8 7
(4) 住宅形態	8 8
(5) 延べ床面積	8 8
4. 寝室の状況<同室就寝夫婦>	8 9
5. 日常生活における意識<同室就寝夫婦>	9 2

(1) 平日自宅で過ごす時間	9 2
(2) 大切にしたい時間	9 3
(3) 夫婦寝室に対する考え方	9 5
(4) 家事は女性の仕事か	9 6
(5) プライバシーの必要性	9 8
6. 夫婦寝室の実態<同室就寝夫婦>	9 9
(1) スペースの使い方	9 9
(2) 夫婦寝室の使用目的	1 0 0
7. 夫婦寝室の理想の形態<同室就寝夫婦>	1 0 3
(1) 夫婦同室の理想の形態	1 0 3
(2) 夫婦別寝室の理想の形態	1 0 5
(3) 今後の夫婦寝室の希望	1 0 7
8. 調査対象者の属性<別室就寝夫婦>	1 0 9
(1) 年齢	1 0 9
(2) 職業	1 1 0
(3) 家族構成	1 1 1
(4) 住宅形態および延べ床面積	1 1 2
9. 寝室の実態および意識<別室就寝夫婦>	1 1 3
(1) 個室	1 1 3
(2) 平日自宅で過ごす時間	1 1 4
(3) 大切にしたい時間	1 1 4
(4) 家事は女性の仕事か	1 1 6
(5) プライバシーの必要性	1 1 6
(6) 別就寝にした理由	1 1 7
(7) 別寝室に対する意識	1 1 8
(8) 別寝室の満足度	1 2 0
10. 今後の夫婦寝室の行方	1 2 2
(1) 個室の使用目的	1 2 2
(2) 夫婦寝室と個室のあり方	1 2 4
結	1 2 6

緒 言

現在、全国の都市で中心市街地の空洞化が大きな問題となっている。金沢市も中心市街地人口の減少、高齢化の進行、空き地や空き家の増加、小売商店の衰退、事業所数および従業員数の減少など、例外ではない。その要因として宅地の郊外化、車社会の進展、郊外型大型店舗の進出などが挙げられる。

金沢市では中心市街地活性化法を受け、平成10年に金沢市中心市街地活性化基本計画を策定し、中心市街地の活性化事業に取り組んでいる。市ではその取り組みの基本方針として以下の5項目の柱を立てている。①歴史・文化・自然を活かした歩くまちづくり ②伝統環境と調和した住環境づくり ③商店街の特性を活かした魅力ある商業環境の形成 ④総合的な交通体系の確立によるアクセスの向上 ⑤基盤整備の推進によるにぎわいの創出である。

いずれも相互に大きく関連し合い、総合的な背策が求められるものである。中でも特に住環境づくりには重点を置かれねばならないだろう。中心市街地の空洞化は、中心市街地が居住の場として成り立たなくなったことが始まりである。したがって、定住の場として魅力ある中心市街地の住環境をつくっていくことが必要である。

金沢市には、中心市街地の定住促進事業として「まちなか住宅建築奨励金制度」がある。これは中心市街地の定住化を促進し、金沢らしいまちなみの保全・形成と、職人技術の継承のために、いくつかの条件に適合した住宅の建築に対して、奨励金を交付する制度である。条件とは中心市街地（近代的都市創出区域を除く）に新築する戸建て住宅であること以外に、延べ床面積、バリアフリーなどの居住性の基準を満たし、瓦や外観の色彩、材料など伝統的な景観に配慮する基準を満たしていることが条件になる。今後も、さまざまな側面から住宅建築に対する奨励金制度を進める必要があるだろう。

一方で、中心市街地が定住できる質をもった住環境であることが求められる。しかしこの点について、まちなか居住の住まい方、求められるライフスタイル、居住層、生活上の問題点の把握が不十分であるのが現状である。これらの課題については詳細に検討する必要があるだろう。

そこで本研究では、より詳細に中心市街地居住の問題点を把握し、中心市街地が定住できる住環境となるための示唆を得るために、高齢者・子ども・女性にとっての問題点や課題について検討しようとしている。高齢者・子ども・女性は、多くの時間を住宅内や地域の中で過ごしており、市が積極的に推し進める人口増加促進、まちなかのにぎわい創出、商業の活性化、観光地としての景観整備などの施策とは異なる日常生活上のニーズを持っていると思われる。たとえば、高齢者は自動車交通からの阻害やコミュニティの衰退などから生活上の不安を抱えており、就学前児や小学生は自然環境の減少や交通量の増大で遊び空間が減少し、生活空間が危険にさらされていることなどである。本研究では、高齢者・子ども・女性それぞれの視点から、きめ細かくニーズを把握し、今後の住環境づくりへの課題について検討する。

I. 高齢者とコミュニティバス

1. はじめに

マイカーが主要な交通手段として確立した現代において、人々の日常生活は徒歩だけではすまない領域に拡大している。これまでは中心市街地には小売店舗が多数あり、日常生活に不便はなかったが、郊外立地の大型店舗の増加や郊外移転、中心市街地の小売店舗の相次ぐ閉店など、中心市街地に居住する者にとって日常生活が便利なものではなくなってきた。特にマイカーを利用できない高齢者は外出が著しく阻害され、交通の問題は深刻である。しかし、中心市街地には多くの商業施設や生活施設、文化施設などがある。利用しやすいアクセスの手段が確保されていれば、特に高齢者にとって外出は容易になるだろう。

金沢市において、金沢市中心市街地活性化の基本計画の中に、「総合的な交通体系の確立によるアクセスの向上」が挙げられ、「マイカー依存型の交通体系からの脱却をめざし、公共交通の拡充による都心アプローチの向上、コミュニティバスや歩行空間の整備による都心の回遊性の向上など、総合的な交通体系を確立する必要がある。（「金沢市中心市街地活性化基本計画」P.31）」と記されている。これは主にマイカーが都心に入り込み渋滞を引き起こしていることから、公共交通体系を見直し、公共交通による都心へのアクセスをはかろうとするものである。また、高齢者の日常の足としての役割をもつコミュニティバスを計画すること、市街地の中の移動として徒歩を推進するために、歩行空間を充実することを意図している。

このように、近年路線バスの運行のない地域における高齢者や主婦を対象にした移動手段として、コミュニティバスシステムを導入する地域が出てきた。コミュニティバスは、交通不便な地域のモビリティ確保、公共施設循環、高齢者・障害者への配慮など、さまざまな目的で運行されている。

そこで本研究では、中心市街地における高齢者の日常的な外出を支援する交通として、コミュニティバスが重要な位置を占めると考え、外出可能な高齢者を対象にアンケート調査を実施し、高齢者からみたコミュニティバスの評価について検討を行う。

2. 「金沢ふらっとバス」について

(1) 導入の背景・経緯

「金沢ふらっとバス」の導入には、以下の背景がある。

- ① 藩政期に形づくられた不整形な細街路や坂道が多く、市内中心部にも交通空白部地域が存在する。
- ② 交通渋滞や駐車場の問題などに伴う、都心アクセスの悪化と中心市街地の空洞化
- ③ 高齢社会・福祉社会の進展

また、導入の簡単な経緯は以下のようである。

平成5～7年 「金沢市における高齢者・障害者のためのモデル交通計画」策定調査
→鉄道、バス、タクシー、ST（スペシャルトランスポート：主として高齢者・障害者等に優先権のあるバス等の交通機関）の各交通手段別整備計画を立案

平成8年 「高齢者・障害者のためのモデル交通計画」実施推進調査

平成9年 金沢市におけるコミュニティバス導入可能性調査

→平成9年度中にルート、サービス内容、事業計画等を計画、平成10年度に試行

平成10年10月 金沢市におけるコミュニティバスの愛称を「金沢ふらっとバス」とする。

平成11年3月28日 第1号路線（此花ルート）運行開始

平成12年3月25日 第2号路線（菊川ルート）運行開始

平成14年 第3号路線（材木ルート）運行開始

参考文献「新金沢市総合交通計画」（平成13年4月 金沢市交通政策課編集発行）

「金沢市におけるコミュニティバス導入効果-金沢ふらっとバスを事例として-」（中島正人、安江雪菜、高山純一、2000年度日本都市計画学会学術研究論文集）

(2) 導入目的・対象者

「金沢ふらっとバス」の導入目的は大きく以下5つである。

- ① 交通空白部地域におけるモビリティの向上
- ② 高齢者の日常的な足としての地域内移動の支援
- ③ 中心市街地へのアクセス改善と活性化
- ④ 人々の交流の活性化と地域コミュニティの形成支援
- ⑤ マイカー依存型の都市内移動からの脱却

主な利用対象には、高齢者および主婦層の日常的な買い物、所用、通院、その他多様な社会活動を目的とする利用を想定している。

(3)「金沢ふらっとバス」の基本システム

・ 運行ルート

路線バスが運行しない細街路を運行する循環一方通行。1周 25～40分程度である。ルートは、以下の条件をすべて満たすように設定されている。

- ① 中心市街地周辺の交通空白（不便）地域である。
- ② 中心市街地、交通結節点にアクセスできる。
- ③ 人口密度が高い。
- ④ 高齢化率が高く一定の高齢者が居住している。

平成13年現在此花ルート、菊川ルートの2ルートに加え、平成14年から運行開始した材木ルートを含め3ルートある。此花ルートでは歩行者専用道路である横安江町商店街を通行することが特徴的である。

・ バス停

バス停間隔は高齢者が無理なく歩ける200mを目安として設置している。バスと同じく加賀友禅の図柄を配したわかりやすいデザインである。此花ルートでは17箇所、菊川ルートでは22箇所、材木ルートでは21箇所。

・ 運行ダイヤ

運行ダイヤは1時間に4便。15分間隔。運行時間帯は此花ルート 8:29～18:24(終着駅到着)、菊川ルート 8:45～18:55(終着駅到着)、材木ルート 8:45～18:39(終着駅到着)。

・ 料金

100円（先払い）大人・子ども同額。未就学児は2人目から有料。

・ 車両

フォルクスワーゲンのベースシャーシにオーストリアのクセニッツ社がシティバス仕様のボディ仮装を行った小型ノンステップバス。27人乗、普通座席16（内、跳ね上げ式5）立席10、乗務員席1。

・ 運営主体と運営方法

事業主体である金沢市が北陸鉄道株式会社に運行を依頼。初期投資（車両購入費・バス整備費等）は市が負担。運賃収入で貯えない部分を市が負担。

3. 調査概要

高齢者の「金沢ふらっとバス」に対する認知度や利用の程度、要望などを把握するために、アンケート調査を実施した。

調査概要は以下のようである。

- ① 調査対象者 : 金沢市在住で、「金沢ふらっとバス」を利用する機会が多いと思われる、「金沢ふらっとバス」路線沿線に所在する公民館に通う 60 才以上のもの。
- ② 調査場所 : 菊川公民館、新堅町公民館、小立野公民館、中央公民館彦三館、馬場公民館、森山公民館、瓢箪町公民館
- ③ 調査期間 : 平成 13 年 11 月 17 日～平成 13 年 12 月 5 日
- ④ 調査方法 : 概ね 60 才以上と推定される対象者を無作為に選定し公民館職員に配布回収を依頼した。
- ⑤ 配布及び回収 : 390 部配布し 338 部回収(86.7%)した。そのうち 60 才以上の年齢条件に適合しない票を無効としたため、有効回答は 323 票である。有効回収率は 82.8%である。
- ⑥ 調査場所別回収率 : 菊川公民館 (88 票・27.2%)、新堅町公民館 (29 票・9.0%)、小立野公民館 (26 票・8.0%)、中央公民館彦三館 (117 票・36.2%)、馬場公民館 (30 票・9.2%)、森山公民館 (23 票・7.1%)、瓢箪町公民館 (10 票・3.1%)

4. 調査対象者の属性

(1) 性別・年齢

調査対象者の性別は、男性 91 人(28.4%)、女性 229 人(71.6%)である。

調査対象者の年齢構成は、60～64 才が 38 人(11.8%)、65～69 才が 110 人(34.1%)、70～74 才が 92 人(28.5%)、75～79 才が 43 人(13.3%)、80～84 才が 28 人(8.7%)、85 才以上が 12 人(3.7%)である。

性別で年齢構成(図1)をみると、男女とも 65～69 才の割合が高く、男性 30.8%、女性 35.8%である。次いで多い年齢層はいずれも 70～74 才で、男性 29.7%、女性 27.1%である。後期高齢者の占める割合は、男性では 31.9%、女性では 23.6%である。

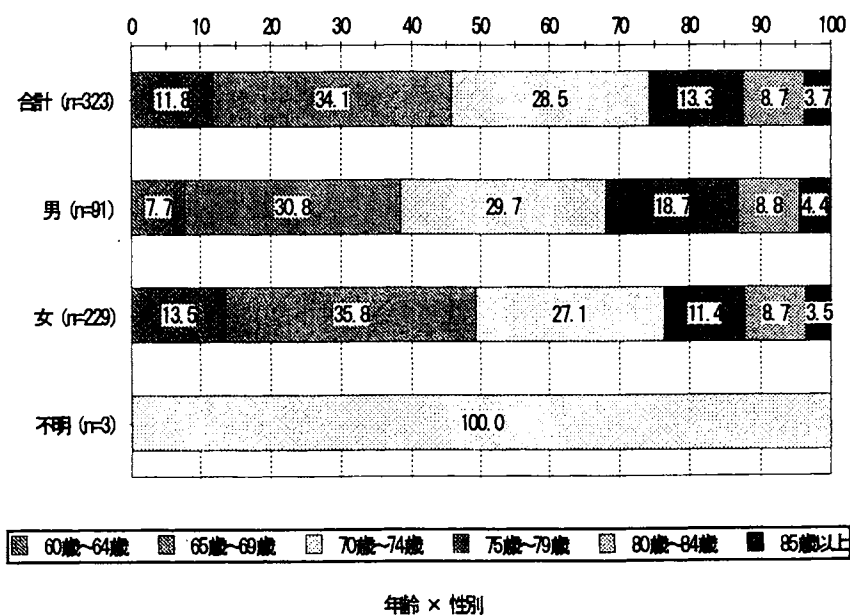


図1 性別年齢構成

最高齢者は 99 才の女性である。平均年齢は全体では 71.2 才、男性の平均年齢は 70.8 才、女性は 72.1 才となった。

菊川公民館、森山公民館では比較的若い層が多く、新堅町公民館、小立野公民館では高齢層が多い。

(2) 就業状況

調査対象者の就業状況は、316 人中有職者は 70 人(18.9%)である。職業をもつ者のうち、自営業・自由業は 33 人(10.4%)と最も多く、次に会社員・公務員が 17 人(5.4%)、パート・アルバイト 8 人(2.5%)、内職 2 人(0.6%)である。性別で就業状況を見ると、就業率は男性では 33.0%、女性は 13.7%であり、男女とも自営業・自由業の割合が高い。年齢層別にみると、就業率は 60～64 才が最も高く 32.4%、次いで 65～69 才が 19.5%、70～74 才が 16.5%となる。

5. 身体機能と外出の状況

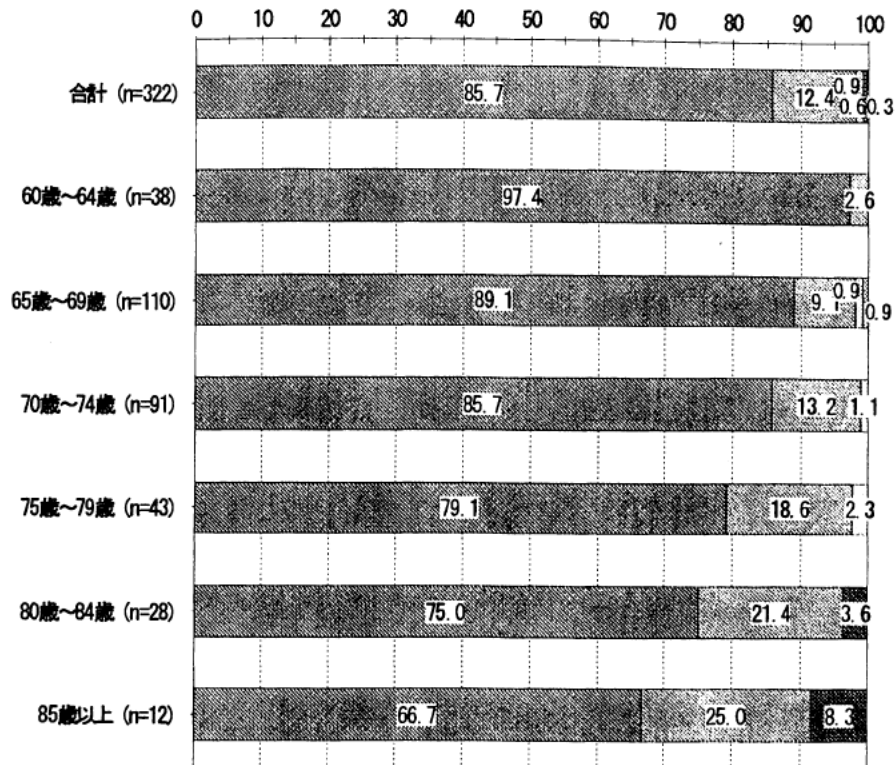
(1) 階段の昇降

身体機能を把握するために、階段の昇降がどの程度可能かを「楽にできる」「無理すればできる」「介助具や補助具があればできる」「できない」「その他」の5つの選択肢からの選択によって調査を行った。

「楽にできる」と回答したのは322人の85.7%にあたる276人で、男性では92.3%、女性では83.3%である。ほとんどの者、特に男性は階段の昇降に支障はない状況であることがわかる。

「無理すればできる」は40人(12.4%)、「介助具や補助具があればできる」が2人(0.6%)「できない」が3人(0.9%)である。

年齢層別(図2)にみると、「楽にできる」と回答した割合は、60～64才では97.4%であるが、年齢層が高くなるに従いその割合は減少し、85才以上では66.7%となる。逆に「無理すればできる」は60～64才では2.6%であるが、年齢層が上がるに従い増加し、85才以上では25.0%となる。加齢に伴って階段の昇降に対する支障が明白に増加することがわかる。



階段の昇り降りにはできますか? × 年齢

図2 年齢層別階段昇降

(2) 外出時の補助の状態

外出時の補助の状態について調査したところ、318人中312人(98.1%)が「一人で出かけられる」と回答し、5人(1.6人)は「介助具や補助具があれば出かけられる」、1人(0.6%)は「その他」と回答した。「介助具や補助具があれば出かけられる」5人は、1人を除きすべて75歳以上であった。

図2に示すように、80歳以上で階段昇降に杖などの介助具や補助具を必要とする者があらわれる。階段昇降を「できない」と回答した者は、65歳以上でもみられる。このように外出そのものはさほど問題がなくても、階段の昇降には困難を伴う者が少なからずいることがわかる。

(3) 外出の頻度

外出の頻度について、「ほぼ毎日」「1週間に3～5回」「1ヶ月に2～3回」「1ヶ月に1回以下」「その他」の選択肢で回答を求めた。

「ほぼ毎日」と回答した者は320人のうち144人(45.3%)で、男性の61.1%(56人)、女性の38.5%(87人)である。次いで「1週間に3～5回」が全体の32.2%(103人)、男性は24.2%、女性35.8%である。男性の方が外出頻度が高いという結果となった。

年齢層による外出頻度をみたところ、85才以上の年齢層以外のどの年齢層においても、「ほぼ毎日」外出する者の割合が40～50%、「1週間に3～5回」外出する者の割合が25～40%みられ、この両者を合わせると80%前後を占め、外出頻度は高いとみられる。これは調査対象者が公民館の講座の参加者であることが大きく影響しているものと思われる。85才以上では他の年齢層と比較し「ほぼ毎日」外出する者が25%と少ないが、「1週間に3～5回」外出の者が60%弱と多く、両者の合計は80%を超えることから、85才以上の高齢者であっても外出頻度が減少する状況はみられない。従って年齢層による外出頻度に明確な相違はみられなかった。

しかし、階段の昇降について「楽にできる」と回答した275人と、「無理すればできる」「できない」「介助具や補助具があればできる」と回答した43人について外出頻度をみたところ、やや違いがみられた。支障のまったくない(「楽にできる」と回答)者の方が、支障のある(「無理すればできる」「できない」「介助具や補助具があればできる」と回答)者より外出頻度が高い傾向があり、「ほぼ毎日」「1週間に3～5回」と回答した者の合計の割合が、前者では80%あるのに対し、後者は62.3%である。外出頻度は、身体状況、特に階段の昇降が可能かどうかの影響を受けることがわかる。

(4) 外出の目的

外出の目的(図3)について調査した。選択肢は以下に示す11項目中3項目までを選択する方法で回答を求めたところ、242人から回答が得られた。

非常に多くの者が「買い物」目的で外出している。また「娯楽・趣味」「気分転換・散歩」などの余暇活動のための外出も比較的多い。

性別にやや特徴がみられ、「買い物」は女性に(男性の53.3%、女性の86.9%)、「散歩・気分転換」(男性50.0%、女性33.0%)、「通勤」(男性15.6%、女性4.1%)は男性に多い傾向がある。通勤は男性の就業率が高いためである。

年齢層が高くなるに従い「買い物」「通勤」の割合は減少し、「散歩・気分転換」「病院・訓練施設へ」の割合が増加する傾向がみられる。「買い物」は60～64才では84.2%であるが、以降年齢層が上がるに従いほぼ減少傾向である。「散歩・気分転換」は、80才までは30～40%であるが、80～84才では53.6%、85才以上では80%となり、80歳以上になると非常に割合が高くなる。「通勤」は60～64才では21.1%、65～70才が9.1%、70～74才が3.4%、75～79才が2.6%、80～84才が0%、85才以上が10.0%となり、65才以上になると激減する。「病院・訓練施設へ」は60～64才では18.4%、65～70才が30.9%、70～74才が37.1%、75～79才が28.2%、80～84才が39.3%、85才以上が60.0%となり、ほぼ年齢層が上がるに従いその割合が増加する。公民館活動に積極的に参加している者であっても、加齢に伴い病院等への通院の機会が多くなることがわかる。

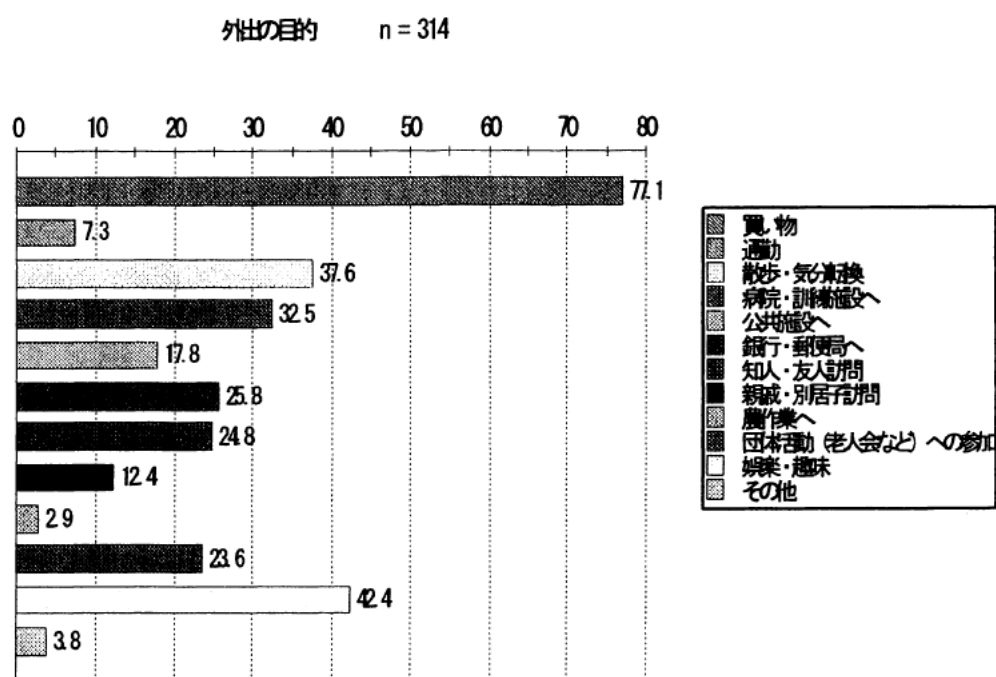


図3 外出目的

(5) 外出時の交通手段

外出時の主な交通手段について回答を求めた(複数回答)。交通手段の選択肢は以下の10項目である。

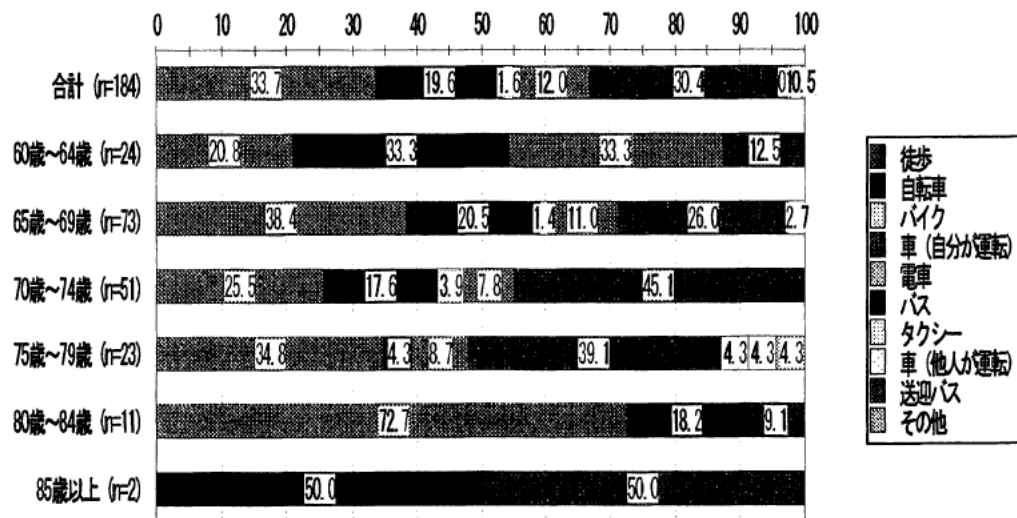
多い順に、「徒歩」227件、「バス」177件、「自転車」108件、「車(自分が運転)」89件、「車(他人が運転)」8件、「バイク」「タクシー」ともに7件、「送迎バス」3件、「電車」2

件となり、「徒歩」「バス」「自転車」「車(自分が運転)」による移動がほとんどを占めている。

外出目的により交通手段が異なると考えられ、目的別に聞いたところ、以下のような結果となった。

「徒歩」の割合が高いのは「買い物」「散歩・気分転換」「銀行・郵便局へ」「知人・友人訪問」である。特に「散歩・気分転換」に外出する者の69.1%が徒歩によると回答している。「バス」の割合が高いのは「買い物」「病院・訓練施設へ」「公共施設へ」「知人・友人訪問」「親戚・別居子訪問」「団体活動への参加」「娯楽・趣味」である。

80歳までの年齢層では自分で車を運転、他人が車を運転、バイク、タクシーなど多様な手段によって外出している。しかし80歳を過ぎるとその多様性が急激になくなり、徒歩、自転車、バスによる外出に限られる傾向がある(図4)。



年齢×買い物

図4 年齢層別買い物の外出手段

高齢期になると身体機能が弱体化しており、徒歩圏で多くの生活が営まれることは必要であろう。特に高齢期では徒歩やバスによる移動を中心に考えていく必要がある。

6. 「金沢ふらっとバス」の知名度・利用状況

(1) 知名度

「金沢ふらっとバス」について知っているかを尋ねたところ、311人のうち281人(90.4%)が「よく知っている」と回答し、「見たことはある」は4.8%、「聞いたことはある」は3.9%で、何らかの形で知っている者は99.1%を占めた。金沢市に住む高齢者の意識には、「金沢ふらっとバス」の存在が浸透しているといえる。年齢層別にみると、特に年齢が高い世代の認知度は非常に高いといえる。

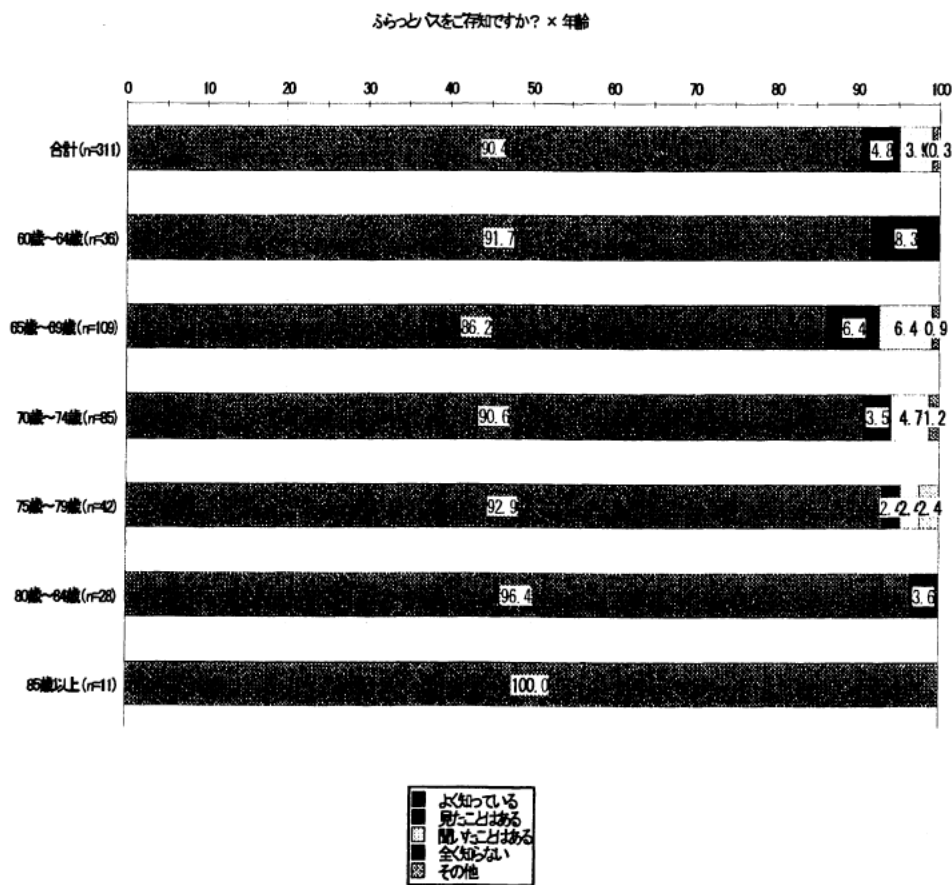


図5 年齢層別「金沢ふらっとバス」の認知度

(2) バス停からの距離

「金沢ふらっとバス」の利用には、自宅周辺が「金沢ふらっとバス」の運行ルートに近いか否かで異なると考えられる。そこで、自宅から最も近い「金沢ふらっとバス」のバ

バス停までの距離及び徒歩での時間を尋ねた。

バス停までの距離の質問に対して、不明回答は 335 人の 54.0%を占める 181 人である。距離感がつかめずメートルでの回答に困難があったためと思われる。距離への回答があった者では、100 メートル以内、100～199 メートルがやや多い。

バス停までの徒歩による時間の質問に対しては、不明回答は 110 人(32.8%)であった。距離と比較し回答しやすかったのであろう。この不明者には、「金沢ふらっとバス」の運行ルートからはずれているためバス停の位置を知らない者が多いものと思われる。

バス停までの距離を徒歩時間で回答のあったのは 225 人である。回答者の中で最も多い時間は 5 分未満で、44.4%(100 人)を占めた。次いで 5 分～10 分未満で 26.2%(59 人)である。多くの調査対象者の自宅は比較的「金沢ふらっとバス」のバス停から近い場所にあることが推測される。

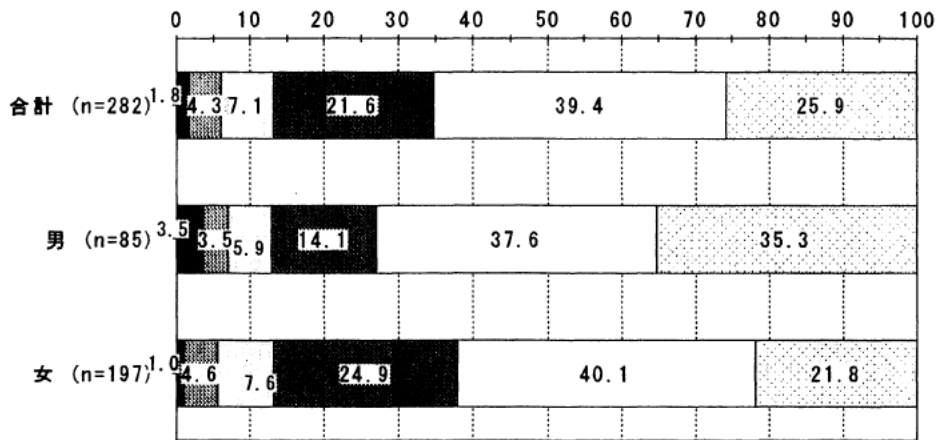
(3) 利用頻度

「金沢ふらっとバス」の利用頻度について、「ほぼ毎日」「1 週間に 3～5 回」「1 週間に 2～3 回」「1 週間に 1～2 回」「1 ヶ月に 1 回以下」「まったく乗ったことがない」の 6 つの選択肢から回答を求めた (図 4、図 5)。

1 週間に 1 回以上の利用者を日常的に利用していると、これを日常的利用者とする、日常的利用者は 285 人のうち 100 人(35.1%)となり、調査対象者の三分の一以上を占める。「1 ヶ月 1 回以下」は 112 人(39.3%)、「まったく乗ったことがない」は 73 人(25.6%)である。

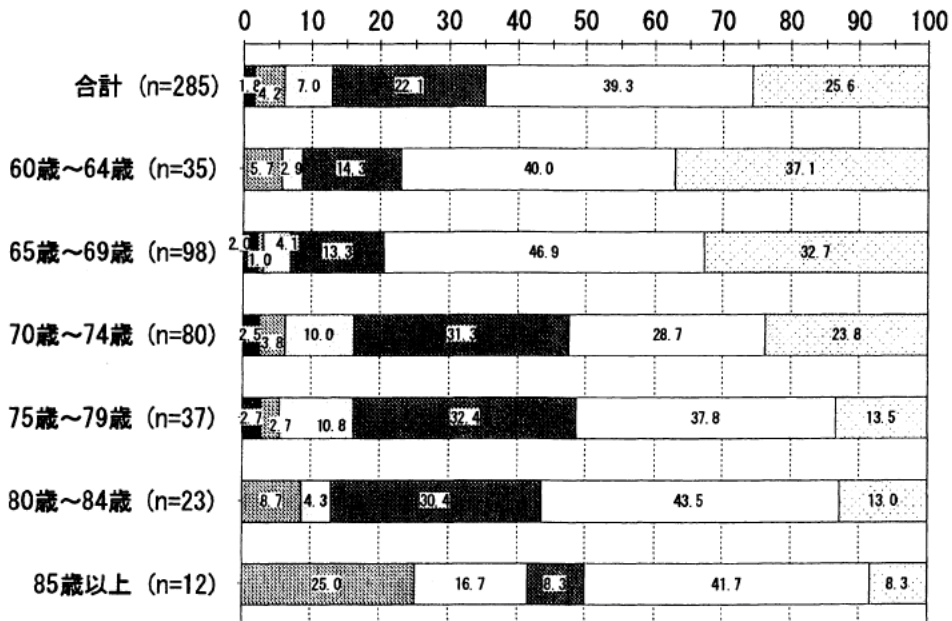
性別による利用頻度 (図 6) をみると、日常的利用者の割合は男性 27.0%、女性 38.1%と、女性の方が高い。まったく乗ったことがない者は、男性 35.3%、女性で 21.8%である。男性より女性の方に利用頻度が高いといえる。

年齢別に利用頻度 (図 7) を見ると、日常的利用者の割合は 60 代では約 20%程度であるが、70 歳以上で急に増え約 45%になる。加齢に伴い利用頻度が減少するわけではなく、むしろ加齢に伴って利用頻度が増えていることが分かる。このことから、高齢者の中でも特に 70 歳以上の高齢者の「金沢ふらっとバス」に対する依存度あるいは、必要性が高いということが言える。



ふらっとバスの利用頻度 × 性別

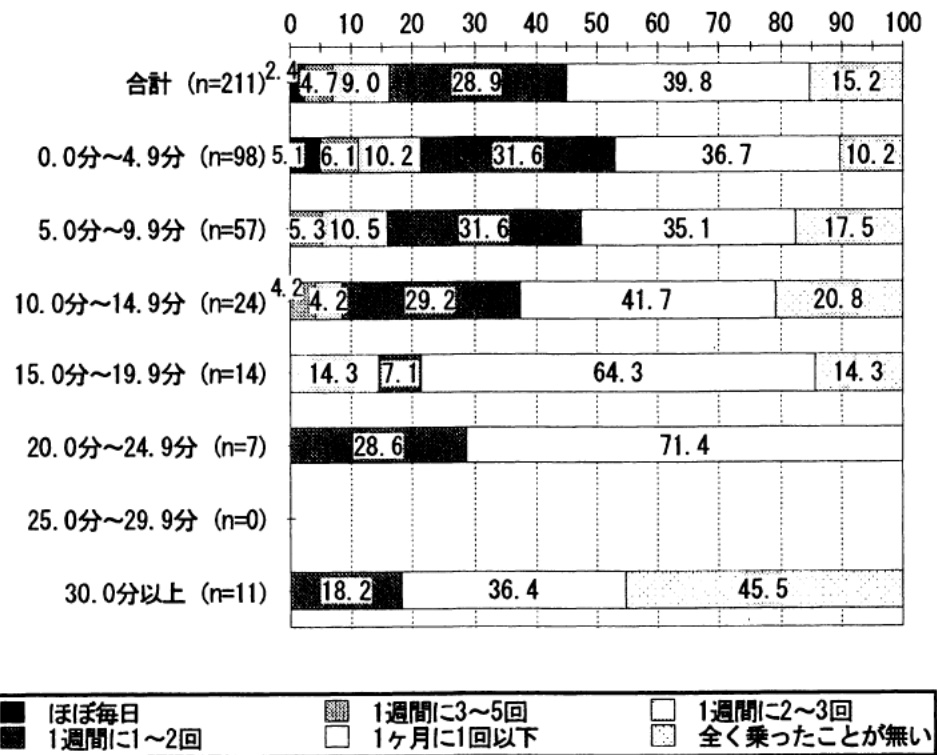
図6 性別の利用頻度



ふらっとバスの利用頻度 × 年齢

図7 年齢層別利用頻度

自宅からバス停までの距離（徒歩何分）別に利用頻度を見てみると、「0.0分～4.9分」における日常的利用者の割合は最高で53.0%に達する。「15.0分～19.9分」では21.4%となり、その間減り続けている。アンケートの自由記述にも「自宅の近くにバス停があつてほしい」という要求が多く、これを裏付けるものであるといえる。



ふらっとバスの利用頻度 × バス停までの距離（歩いて約口分）

図8 バス停までの距離別の利用頻度

身体が利用頻度にどう影響するかを階段の昇降の程度から見た。「楽にできる」のうち日常的利用者の割合は33.1%であり、「無理すればできる」では51.4%である。身体的な機能が落ちて利用頻度が減少することはなく、むしろ増加している。

(4) 利用目的

日常的利用者に対して(100人)、「金沢ふらっとバス」の利用目的を以下の12項目から3項目までの選択による方法で調査を行った。

最も多いのは「買い物」57人(57.0%)、次いで「病院・訓練施設」36人(36.0%)、「娯楽・趣味」31人(31.0%)、「公共施設へ」22人(22.0%)、「散歩・気分転換」21人(21.0%)、「知人・友人訪問」19人(19.0%)、「団体活動への参加」12人(12.0%)、「他の交通機関への乗り換え」10人(10.0%)、「親戚・別居子訪問」3人(3.0%)、「銀行・郵便局へ」2人(2.0%)、「通勤」1人(1.0%)、「農作業へ」0人(0%)である。

前述の「金沢ふらっとバス」の利用に関わらない外出目的と比較しても、大きな相違は見られなかった。

性別による利用目的をみると、「買い物」は女性61.3%、男性は45.8%と、女性の方が高い。また、「気分転換・散歩」「知人・友人訪問」「娯楽・趣味」でも女性の方が高く、女性の方が余暇活動で「金沢ふらっとバス」の利用が多い。男性は「病院・訓練施設へ」「公共施設へ」の利用で、女性より割合が高くなる。

(5) 外出機会の増加

「金沢ふらっとバス」の日常利用者に対し、「ふらっとバスを利用することによって、外出が便利になったり、よく外出するようになったか」という質問をすることにより、「金沢ふらっとバス」の導入時に考えられていた、高齢者の外出機会の増大があったかを知ろうとした。選択肢は「便利になり外出が増えた」「便利になったが、外出は増えていない」「以前と変わらない」「その他」である。

その結果89名から回答が得られた。最も多いのは「便利になり外出が増えた」で45人(50.6%)である。次いで「以前と変わらない」で23人(25.6%)、「便利になったが、外出は増えていない」が21人(23.6%)である。図9に示すように、年齢層で特に顕著な積古傾向はみられず、「金沢ふらっとバス」の運行は高齢者の多くに便利であると評価されている。

外出が便利になったり、よく外出するようになったか × 年齢

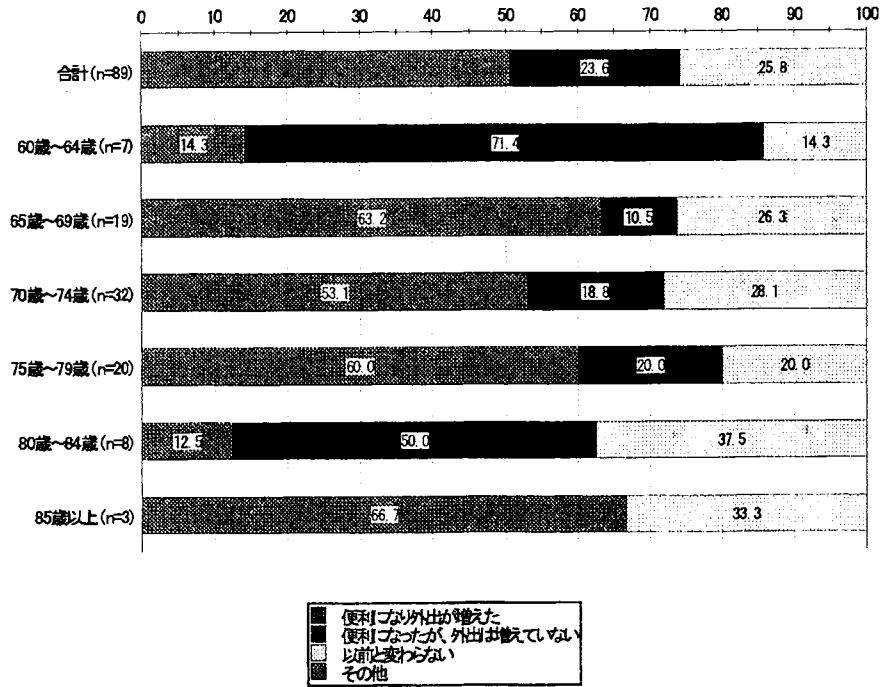


図9 年齢層別 外出機会の増加

7. 「金沢ふらっとバス」に対する日常利用者の評価 —満足度の概要—

「金沢ふらっとバス」の車体、設備、システムについて、日常利用者の満足度を調査した。

車体および設備については、①乗りやすさ ②降りやすさ ③座席 ④降車ボタンの使いやすさ ⑤電光掲示板の見やすさ（行き先、料金表示） ⑥案内放送の聞きやすさ の6項目である。システムについては、⑦運行時間帯 ⑧運行本数 ⑨運行ルート ⑩料金の4項目である。その他、⑪バス待ち環境 ⑫バス停のデザインの評価についても調査を行った。

評価は「満足」「普通」「不満」の3段階とした。

「金沢ふらっとバス」の車体・設備・システムの概要については前述のとおりであるが、以下に少し補足する。

車内には段差は全くない。床面の高さが地上 28.0 cmで、縁石のあるバス停に乗り付ければほとんど段差がなくなる。手動式スロープが設置されており、車いすでも乗車可能である。座席は最高で 16 人が乗車でき、車いすが固定できるよう跳ね上げ式の座席も設けられている。座席の間にはクッションのついた握り棒があり、握り棒 1 本に上下 2 つの降車ボタンが設置されている。1 つは着席したままで押せるように低い位置にある。電光掲示板では日本語、英語の表示により、次のバス停などの案内がなされる。

現在の運行ルートは此花ルートと菊川ルート、材木ルートがあり、それぞれ中心市街地周辺の交通が不便で、人口密度と高齢化率が高い地域から、駅、繁華街、商店街などの中心市街地や交通結節点にアクセスできるように設定されている。

此花ルートは 1 周 25 分で、住宅地と中心市街地の武蔵ヶ辻や近江町市場、交通結節点の金沢駅を結ぶルートとなっている。このルートでは横安江町商店街を走行し全国で初めて歩行者専用のアーケードに路線バスが走行した点で特徴的である。また、金沢駅では 5 分間停車する。

菊川ルートは 1 周 40 分で、住宅地と香林坊、片町、堅町といった繁華街、及び兼六園、厚生年金会館、大学病院、市役所などの施設の周辺を循環するルートとなっている。また、香林坊では 5 分間停車する。

このように中心市街地と住宅密集地を 25～40 分という短時間で循環するルートが選定された背景には、金沢市が戦災に合わなかったなどの経緯から、藩政期に形づくられた不形成な細街路や坂道が現在でも多く存在し、市内中心部でも、大型バスなどが通れない交通空白地域が残されていたことがある。

料金は1回100円である。「金沢ふらっとバス」は確実な採算性が見込めない点やバス車両その他の初期投資が必要であることから、構想主体である金沢市が民間事業者に依頼し、運賃収入で賄えない部分を市が負担する方式が採用された。運行については、道路運送法第4条に定める一般乗合旅客自動車運行事業の免許を有している北陸鉄道株式会社が行っている。金沢市交通政策課の担当職員によると、負担金は平成13年度でおよそ4,380万円を予定しているという。運賃収入は乗車人数などから計算すると、およそ5,150万円だと推測される。導入にかかる費用は、車両が1台およそ2,500万円で、バス停の整備費等を含めて、1ルートおよそ1億円かかりこれも金沢市が負担している。

表1は、満足度を示している。満足度は、それぞれの項目において「満足」と回答した者を1点、「普通」と回答した者を0点、「不満」と回答した者を-1点とした場合の、各項目の平均点数である。

表1 設備・システムの日常利用者による満足度

設備・システム	満足度	回答数
料金	0.73	90
乗りやすさ	0.67	97
降りやすさ	0.66	92
降車ボタンの使いやすさ	0.65	91
運行本数	0.52	93
電光掲示板の見やすさ	0.49	93
案内放送の聞きやすさ	0.47	93
座席	0.38	90
バス停のデザイン	0.32	88
運行ルート	0.22	91
運行時間帯	0.11	93
バス待ち環境	0.09	90

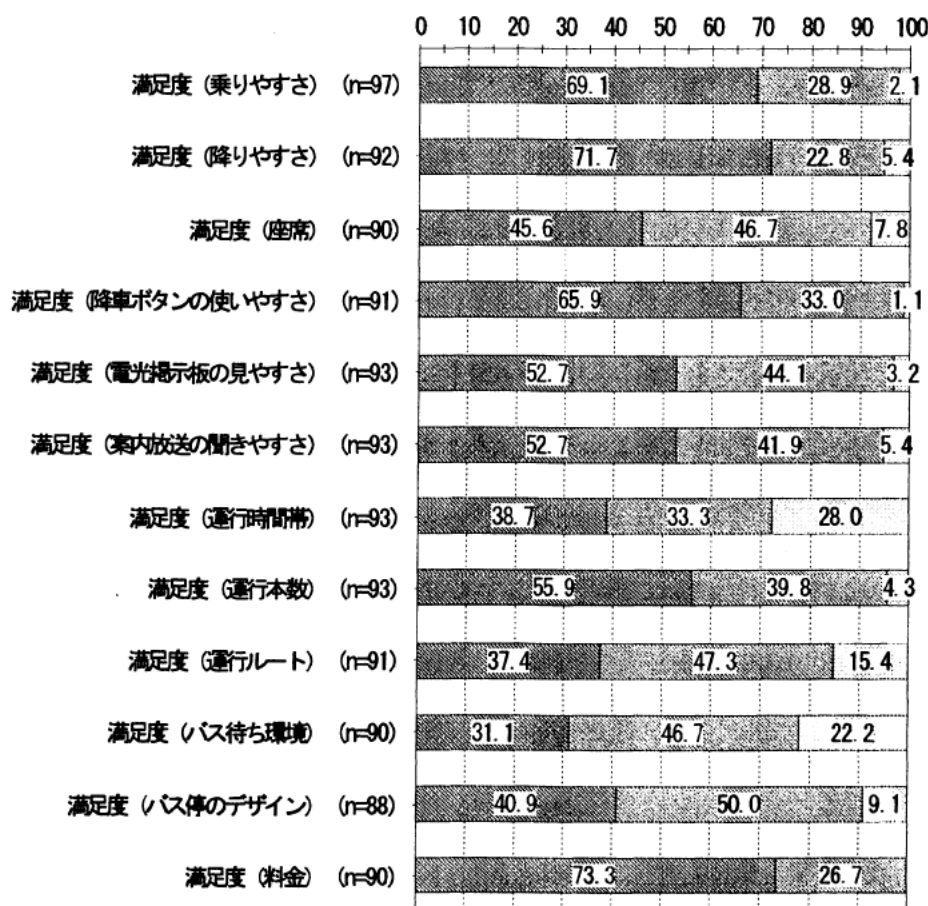
これら12項目の中で満足度（平均値）が最も高いのは「料金」であった。次いで「乗りやすさ」「降りやすさ」「降車ボタンの使いやすさ」など、車体自体や設備に対する満足度が高いことがわかる。

満足度（平均値）が低いのは「バス待ち環境」であった。次いで低いのは「運行時間帯」「運行ルート」「バス停のデザイン」となった。バスそのものではなく、運行システムやバス停などについて満足度が低い。

図10は各項目について、「満足」「普通」「不満」と回答した者の割合を示している。

「満足」と回答した者の割合が最も高いのは「料金」である。この項目には「不満」と回答する者が皆無であった。次いで「降りやすさ」「乗りやすさ」「降車ボタンの使いやすさ」となり、これらも「不満」と回答する者の割合が低い項目である。

「不満」と回答する者の割合が高いのは、「運行時間帯」である。次いで「バス待ち環境」「運行ルート」である。



■ 満足 ■ 普通 □ 不満

集計(1)

図10 設備・システムの満足度

8. 「金沢ふらっとバス」に対する日常利用者の評価 ー車体および設備ー

図10に基づき、車体および設備についての評価を項目ごとに述べる。

(1) 乗りやすさ

「乗りやすさ」については、回答のあった97人中「満足」と回答した者は67人(69.1%)、「普通」が28人(28.9%)で、「不満」は2人(2.1%)のみである。「降りやすさ」については、92人中「満足」は66人(71.7%)、「普通」が21人(22.8%)で、「不満」は5人(5.4%)である。乗降に対する満足度は約70%あり、不満と回答する者が非常に少なく、ノンステップバスであることで全体的に満足度が高いといえる。

「乗りやすさ」の評価を図11に示す。年齢が高い層にも満足と回答する者が多いことがわかる。また、「降りやすさ」についても同様の傾向が見られた。

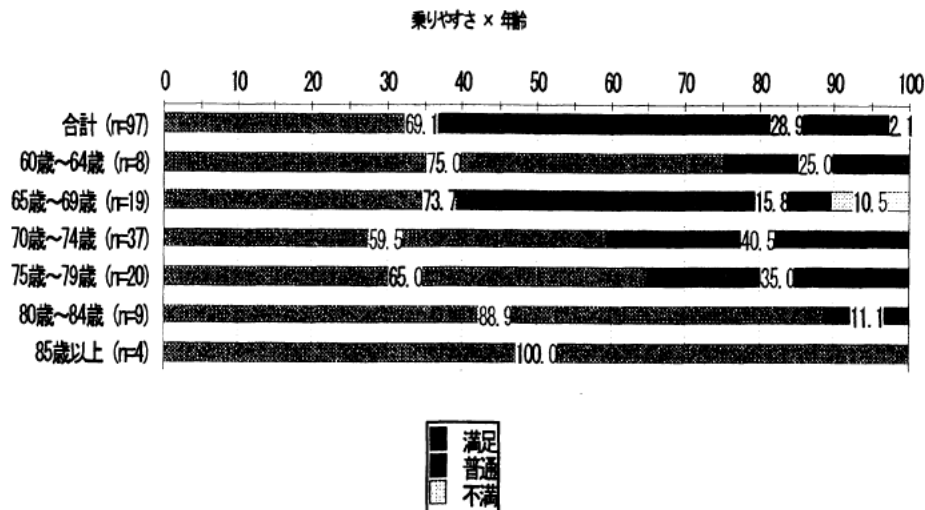


図11 年齢層別 乗りやすさの満足度

「乗りやすさ」に不満と回答したのは2人であったが、不満の理由としては(項目選択式・複数回答)「入り口の幅が狭い」1人、「段差が高い」1人、「手すりの位置が悪い」0人である。「降りやすさ」については(項目選択式・複数回答)、「出口の幅が狭い」0人、「段差が高い」4人、「手すりの位置が悪い」2人であった。降車時の段差や手すりにやや不満が見られた。

(2) 座席

「座席」に対しては、「満足」と回答した者が90人中41人(45.6%)、「普通」が42人(46.7%)、「不満」は7人(7.8%)である。不満と回答した者は少ないものの「満足」と回答する割合も多くない。他のバスと比較して特別に座席の大きさ、向き、数などについて「満足」と回答するほどの違いが見いだせなかったものと思われる。年齢が高い層に満足度が高い傾向が見られた。

不満と回答したのは7人である。不満の理由は(項目選択式・複数回答)「座席の幅が狭い」6人、「座席の向きが悪い」0人、「数が少ない(いつも込んでいて座れない)」2人である。主に座席の幅に不満が見られた。座席の向きは対面式であるが、車内がコンパクトであることもあり、見知らぬ同士の近隣の利用者と観光客の間で会話が始まるような、一般の路線バスとは異なる和やかに雰囲気を作り出しており、不満はまったく見られなかった。

(3) 降車ボタンの使いやすさ

「降車ボタンの使いやすさ」は、「満足」と回答した者が91人中60人(65.9%)、「普通」が30人(33.0%)、「不満」は1人(1.1%)である。降車ボタンが上下2箇所に設置されており、立っていても座っていても手近な場所にあることが不満の少ない要因であろう。年齢層による違いは見られなかった。

不満と回答した者の理由は(項目選択式・複数回答)、「数が少ない」ことであった。「ボタンの位置が悪い」「ボタンが小さい」「場所がわかりにくい」などの不満は見られなかった。

(4) 電光掲示板の見やすさ

「電光掲示板の見やすさ」については、「満足」と回答した者が93人中49人(52.7%)、「普通」が41人(44.1%)、「不満」は3人(3.2%)で、不満は少ない。「満足」と回答した者がやや「普通」と回答した者を上回っている。年齢層による違いは見られなかった。

不満と回答したのは3人である。不満の理由は(項目選択式・複数回答)、「字が小さい」「色使いが悪く見にくい」がそれぞれ1人、「表示の方法がわかりにくい」0人であった。

(5) 案内放送の聞きやすさ

「案内放送の聞きやすさ」については、「満足」と回答した者が93人中49人(52.7%)、「普通」が39人(41.9%)、「不満」は5人(5.4%)である。電光掲示板の評価とほぼ同程度であるが、多少不満が多い。

不満と回答した5人の不満理由は(項目選択式・複数回答)、「明瞭でない」1人、「早すぎる」0人、「音量が小さい」3人であった。評価、不満理由ともに年齢層による違いは見られなかった。

(6) その他

その他自由回答の中に、夏の冷房の弱さ、冬の入り口付近の寒さに対する不満が若干みられた。

以上のように、調査結果は座席、降車ボタン、電光掲示板、案内放送のいずれの項目も「不満」と答える人は少ない。これは調査対象者が公民館に通う活動的な高齢者であることにより、身体機能が低下した高齢者が少なかったためと考えられる。しかし本調査ではあまり顕在化しなかったが、高齢者や障害者の中には車椅子利用者や、段差の昇降ができないなどのハンディキャップを持つ者がいることも事実である。車体のバリアフリー化や快適性の向上は重視すべき課題であろう。

9. 「金沢ふらっとバス」に対する日常利用者の評価 ―システム―

「金沢ふらっとバス」の運行時間帯、運行本数、運行ルートに対する満足度と利用者の要求について述べる。

(1) 運行時間帯

運行時間は朝の 8 時から夕方の 6 時 30 分である。「運行時間帯」に対しては、「満足」と回答した者が 93 人中 36 人(38.7%)、「普通」が 31 人(33.3%)、「不満」は 26 人(28.0%)で、不満と回答する者が多い。

「不満」と回答した者と、性別、年齢層、階段の昇降の程度、自宅のバス停からの距離との関連をみたが、いずれも関連性は見いだせなかった。

「不満」と回答した者にその理由を尋ねたところ(選択項目式・複数回答)、回答のあった 24 人中 83.3%が「もっと遅くまで運行して欲しい」、33.3%が「もっと朝早くから運行して欲しい」と回答した。多くは夕方 6 時 30 分以降の運行を望んでいることがわかる。

「もっと遅くまで運行して欲しい」という回答は、男性 7 人全員、女性は 17 人のうち 13 人(76.5%)と、男性の希望が強い。70 才未満は 8 人全員、70 才以上では、16 人中 12 人となり、若い世代の方がより遅くまでの運行を希望している。また、「朝早くから運行して欲しい」と回答したのは男性 7 人中 2 人、女性では 17 人中 6 人で、女性の方の割合が高い。年齢層でみると、70 才未満は 8 人中 1 人、70 才以上では 16 人中 7 人と、高齢層の方が多いという結果となった。整理すると、朝早くからの運行希望は、女性に、もしくは高齢層に多く、遅くまでの運行希望は男性に、もしくは若年層に多い。

「金沢ふらっとバス」はもともと、高齢者や主婦層の日常的な買い物、所要、通院などを想定して導入されたため、夜間や早朝の利用はあまり考慮されていない。本調査でも「金沢ふらっとバス」の利用目的として、想定通り買い物、通院などが多数を占めた。しかし、現状の運行時間帯に不満を持つ高齢者が多いことが本調査で明らかとなった。従って新たな利用目的を想定し、運行時間帯の延長も視野に入れる必要があるだろう。

本調査では外出の目的として、「買い物」に次いで「娯楽・趣味」が多かった。武蔵が辻や香林坊などのデパートやカルチャーセンターなどの利用も目的として想定し、閉店時刻や講座の終了時刻なども考慮することも考えても良いだろう。

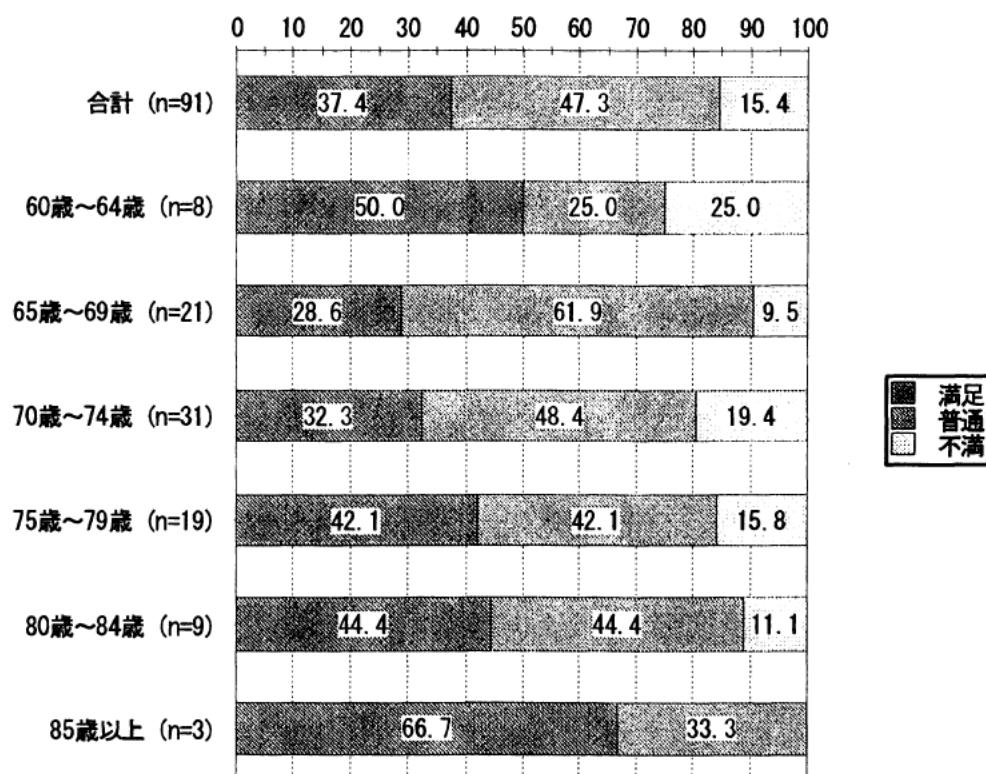
金沢市の担当職員に対する聞き取り調査によると、早朝と夜間に運行して欲しいという要求は十分に承知しているが、歩行環境の安全性が問題となること、バスにより渋滞が発生すること、バスの定時制が守られないことなどからできないとのことであった。早朝や夜間の利用目的を詳細な調査などを行いある程度特定し、それに合わせた運行時間帯を設

定した運行実験を行い、採算性や利用者にとっての利便性、渋滞が発生するかなどを検討してもよいだろう。

自由回答の中に、15分間隔の運行に対する満足の意見が複数みられた。本数に対する満足と、発車時刻を覚えやすいことによる。また、発車時刻が正確で安心との意見もいくつか見られた。

(2) 運行ルート

「運行ルート」については、「満足」と回答した者が91人中34人(37.4%)、「普通」が43人(47.3%)、「不満」は14人(15.4%)と比較的多い。年齢層別にみると(図12)、「不満」と回答したのは60~64才で最も高くこの年齢層(8人)の25%を占め、ほぼ加齢とともに不満の割合は減少する。



満足度 (運行ルート) × 年齢

図12 年齢別運行ルートに対する満足度

また、自宅からバス停までの距離別に不満の割合をみると、15分以上かかる者はサンプル数が少ないため省いてみると、5分未満ではこの層(48人)の14.6%、5分～10分未満(28人)では17.9%、10分～15分未満(5人)が40%となり、距離の増加とともに不満の割合が高くなる。「不満」と回答した者にその理由を尋ねたところ(選択項目式・複数回答)、15人の46.7%が「移動するのに時間がかかりすぎる」と回答した。これはバスが一方通行であるため、利用者は目的地との往復で1周しなければならず無駄が多いこと、停車時間が6分近くあるバス停もあり時間がかかるためと思われる。自由回答でも「逆回りを運行して欲しい」という意見や、「停車する時間が長すぎる」という意見が多く見られた。時間に余裕がある場合はよいが、時間に制約がある場合にはいろいろな原因になるだろう。不満の理由として「行きたいところに行けない」と「その他」にはそれぞれ26.7%が回答した。その他の具体的な理由には「バス停が自宅から遠い」を挙げる者が多い、また「行きたいところに行けない」に関しては、自由回答でも「バスを乗り継げるようにして欲しい」という意見が多く見られた。

(3) 運行本数

「運行本数」は「満足」と回答した者が93人中52人(55.9%)、「普通」が37人(39.8%)、「不満」は4人(4.3%)である。「運行ルート」や「運行時間帯」と比較し不満は少ない。前述のように、自由回答でも15分間隔で運行していることについて、本数が多く満足しているとの回答があった。

(4) 料金

「料金」は「満足」と回答した者が90人中66人(73.3%)、「普通」が24人(26.7%)、「不満」は0人である。1回100円という料金について不満は皆無であった。路線バス料金と比較すると非常に安いこと、コイン1枚という手軽さが満足の要因であろう。

10. 「金沢ふらっとバス」に対する日常的利用者の要求 —バス待ち環境—

バス待ち環境に対して「不満」と回答した者の割合は 22.2%である。また表1の満足度（平均値）では、「金沢ふらっとバス」の設備・システムの評価が全体で高い中で、全12項目の中で最も低い値を示した。

階段の昇降の程度別にバス待ち環境への満足度を見てみると、楽にできる者の内「不満」と答えた人は 20.8%、「無理すればできる」者の中では 30.8%と、「無理すればできる」者の方がやや高い。身体機能が低下した高齢者の方がよりバス待ち環境に関して満足度が低いことがわかる。バス待ち環境を改善すれば、身体機能の低い者のバスによる外出を促せるかもしれない。

バス待ち環境の満足度について、男女別、年齢別、バス停からの距離別に見ても、相関関係はみられなかった。

「不満」と答えた人にその理由を尋ねてみると（選択項目式・複数回答）、61.9%（13人）の人が「雨よけがない」、33.3%（7人）の人が「座る場所がない」と多く、「交通量が多くて危険」は1人（4.8%）であった。雨よけと座る場所が確保されたバス停がある一方、細くて入り組んだ道にバス停だけがあるというところも多いため、その点に不満を感じている人が多いのであろう。

「座る場所がない」と答えたのは70歳未満で9人中2人（22.2%）、70歳以上では、12人中5人（41.7%）であり、70歳以上の人の中により高い割合で見られた。座る場所を整備してほしいという要求は比較的年齢の高い高齢者に多いといえる。

1.1. 「金沢ふらっとバス」に対する非日常利用者の要求

(1) 利用頻度の低い理由

利用頻度が1ヶ月に1回未満の比較的利用頻度の低い人（以下、「非日常的利用者」と呼ぶ）に「なぜあまり利用しないか、または全く利用しないか」と尋ね、以下に挙げた11項目の中から、理由となるすべてを選んでもらった。142人中多い順に「出かける先に運行ルートがないから」が98人（65.5%）、「他の交通手段を利用しているから」が57人（40.1%）、「バス停までの距離が遠いから」が41人（28.8%）、「移動するのに時間がかかるから」が22人（15.5%）と続いた。その他はいずれも7.7%（11人）未満の少数回答であった。

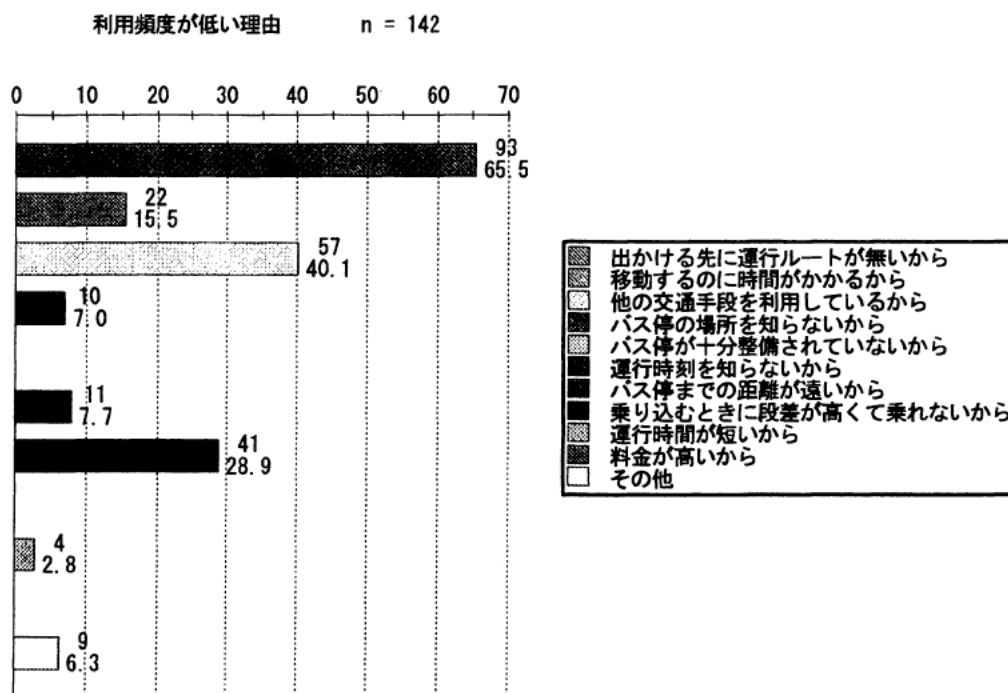


図13 利用頻度の低い理由

バス停から自宅までの距離別に利用頻度が低い理由を見ていくと、0.0分～14.9分の間では見られなかった、「バス停までの距離が遠いから」という回答が、0.0分～4.9分では2.6%と、低かったものの、5.0分以上になるといずれも26%を上回り、高い値となった。

さらに、バス停までの距離が、「バス停までの距離が遠いから」という回答のみならず、「移動するのに時間がかかるから」という回答にも間接的に影響すると考えられることから、両者の割合(%)を合計した値をバス停からの距離(分)別に比較してみた。すると、

両者を合計した値は、9.9 分までは 28.9 ポイントであったのだが、10.0 分以上では急激に増加し、いずれの距離においても 70 ポイント以上の高いとなっている。このことから、バス停から自宅までの距離が徒歩 10 分以上になることが、利用頻度が低い大きな理由になっていることが分かる。

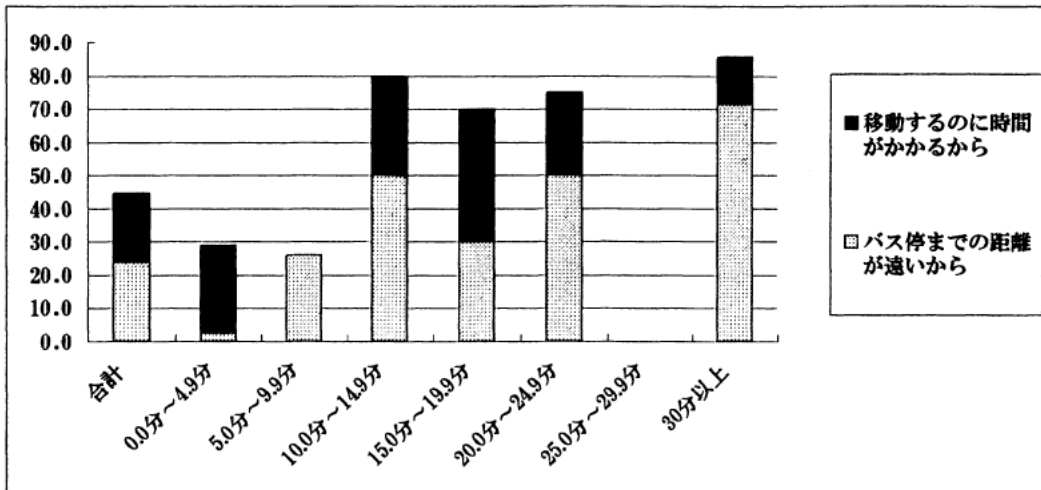


図 1 4 バス停・自宅の距離別不満の理由（移動時間の長さやバス停からの遠さ）

利用頻度が低い理由のその他の項目については、距離別に見ても特徴的な推移や差は認められない。

階段の昇降の程度別に利用頻度が低い理由を見た。「楽にできる」と答えた人の中には、17.3%見られた「移動するのに時間がかかるから」という回答が、「無理すればできる」人には 1 人も見られなかった。自由記入にも「時間がかかっても時刻どおりに到着するところが良い」という回答が見られたように、高齢者は時間の短縮よりも、到着・発車時刻が正確で落ち着ける環境を求めていることがわかる。

その他の項目については、身体的機能の違いによって顕著な相違は見られなかった。

(2) 利用促進の方策

非日常的利用者に「どうすればもっと利用するようになるか」と尋ね、以下の 11 項目の中からすべてを選択させた。その結果多い順に列挙すると、99 人中「運行ルートを変える」が 55 人 (55.6%)、「バス停が自宅の近くにある」が 30 人 (30.3%)、「もっと遅くまで運行する」が 17 人 (17.2%)、「バスが 1 周する時間を短縮する」が 16 人 (16.2%)、

「バス停の場所を分かりやすくする」が 14 人 (14.1%) であった。

「利用頻度の低い理由」と合わせて考慮すると、「運行ルート」、「バス停までの距離」、「時間がかかる」という点が 10%以上の比較的高い値となった点で一致した。

その他 10%以上の高い値であったのは、「もっと遅くまで運行する」(17 人、17.2%) 及び「バス停の場所を分かりやすくする」(14 人、14.1%) であった。

「運行ルート」、「バス停までの距離」、「時間がかかる」、「運行時間帯」は、前述のとおり日常の利用者にも不満に思っている人が多い項目であるが、「バス停の場所をわかりやすくする」ことは、非日常の利用者のみに見られた。

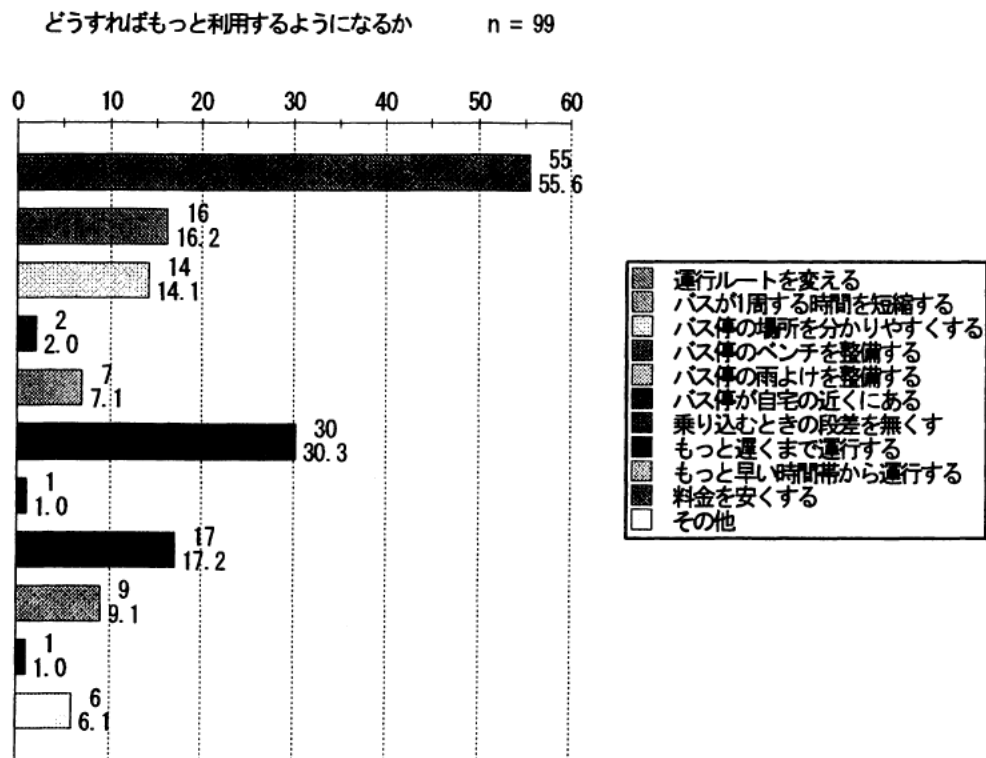


図 1 5 利用促進の方策

利用促進の方策に関する質問では、年齢別、男女別にみても顕著な特徴はみられなかった。距離別ではサンプル数が少ないために相違が認められなかった。

階段の昇降の程度別にみると、「1周する時間を短縮する」という回答は「楽にできる」と回答した者の中から 18.0%見られたが、「利用頻度が低い理由」と同様「無理すればできる」人には見られなかった。高齢者は移動時間の短縮は要求しておらず、落ち着いて乗れ、正確な時間に乗れることが要求されていることがわかる。

その他の項目に関しては身体的機能の違いによって目立った差は見られなかった。

12. 今後のふらっとバスの課題

「金沢ふらっとバス」の当初の導入目的は次の5点であった。

- ① 交通不便地域におけるモビリティの向上
- ② 高齢者の日常的な足としての地域内移動の支援
- ③ 中心市街地へのアクセス改善と活性化
- ④ 人々の交流の活性化と地域コミュニティの形成支援
- ⑤ マイカー依存型の都市内移動からの脱却

「金沢ふらっとバス」は大型バスが通れないような公共交通の空白地域と中心市街地や交通結節点を25～40分という適度な時間で結ぶように運行ルートが設定されていることや、乗車率の高さなどから、交通不便地域に住む住民にとって利便性が高く、①の交通不便地域におけるモビリティの向上は達成されていると思われる。しかし、運行ルートなどに不満もみられる。

「金沢ふらっとバス」は高齢者の日常的な足となっているかについては、高齢者の「金沢ふらっとバス」に対する全般的な評価が良かったこと、また観察調査においても高齢者の利用が多いことから、「金沢ふらっとバス」は高齢者の日常的な足となる可能性が非常に高い。

③に関しては、運行ルートが中心市街地と周辺の住宅地とを結ぶように設定されているため、アクセスは改善されているといえる。しかし、中心市街地の活性化という面から言えば不十分である。例えば、北安江町商店街のある店舗の経営者に対する聞き取り調査では、「金沢ふらっとバス」が運行されたことで売り上げの上昇にはつながっていないとのことであった。商店街の人通りはまばらで、活性化されている様子ではない。こういった中心市街地衰退の典型ともいえる人通りの少ない商店街は全国各地で見られるが、改善が必要である。

④に関しては、アンケート調査で「金沢ふらっとバス」の利用目的として、「娯楽・趣味」が31.0%、「知人・友人訪問」が21.0%、「団体活動（老人会など）への参加」が12.0%という、どれも比較的高い結果になったことなどから、「金沢ふらっとバス」が人々の交流や地域コミュニティの活性に寄与しているといえる。また、「金沢ふらっとバス」の車内は、高齢者と観光客の間に会話が始まるような和やかな雰囲気であったので、車両自体、人々の交流やコミュニティの活性を促すものになっていた。しかし、積極的な意味合いとしての人々の交流の活性化と地域コミュニティの形成支援には、未だ足りていないのではないかと。

⑤に関しては、アンケート調査で、利用頻度が月 1 回以下の高齢者の利用頻度が低い理由として、40.1%が「他の交通手段を利用しているから」と答え、高齢者の交通手段として 4 番目に「車（自分が運転）」が多く、また、現在でも金沢市中心部では、慢性的に交通渋滞が起こっていることなどから、マイカー依存型の都市からは脱却しきれてはいないと考えられる。「金沢ふらっとバス」はマイカー依存からの脱却という目的の重要な一端を担っているとは言えるが、今後は他の方法（パークアンドライド、道路の整備、公共交通の充実と利用促進など）とも合わせてこの問題に対処して行く必要がある。

本研究では「金沢ふらっとバス」を事例として、高齢者にとって有意義なものになっているかという観点からコミュニティバスを考察してきた。以下では、主にアンケート調査の結果をもとに、いくつかの点について具体的に総括する。

・ 全般的評価

アンケート調査では、「金沢ふらっとバス」を日常的に利用する人の約 75%ものが利便性を感じており、約 50%もが「便利になり外出が増えた」と回答している。自由記入でも「料金が安い」、「バス停が近くて便利」、「運転手がやさしい」、「買い物をする時によく利用する」などの理由で、満足とする意見が多かった。従って日常的利用者、または日常的利用可能者にとっては全般的に好評であるといえる。

しかし、設備・システム別の満足度を見ると、「運行時間帯」、「バス待ち環境」、「運行ルート」などでは「不満」と回答する者がいずれも 15%を超えているなど、利用者が不満に感じている点もしばしば見受けられ、改善の余地が残されている。

一方、「出かける先に運行ルートがない」、「自宅からバス停までの距離が遠い」、「運行時間が短い」、「移動するのに時間がかかりすぎる」等の理由から、あまり利用しない、あるいはできない人も存在している。

・ バス待ち環境

アンケート調査では日常的利用者のうち、「バス待ち環境」に不満と感じている者の割合が約 22%と高かった。路線バスと共用しているバス停や、アーケード内などスペースに余裕のあるバス停では、雨よけやベンチが整っているが、人口密度と高齢化率が高い住宅地と中心市街地や交通結節点を結ぶようにルートが設定されているため、細街路に設置されているバス停ではバス停の標識が立っているだけで雨よけもベンチも無い。

アンケート調査では、身体機能が低下した高齢者に不満と感じる人がより多かった。さらに、不満の理由として「雨よけがない」と「座る場所が無い」が多かった。特に年齢の

高い層に「座る場所が無い」と答えた人の割合が高い。

高齢者は、平衡性や閉足立と言った運動能力において、若者と比較し 3 分の 1 程度に減少するため、バス停で長時間立っているには困難を伴う。また、雨天や降雪の多い金沢では、屋根の設置も重要である。細く入り組んだ道でベンチや屋根を設置することは困難だと思われるが、住民の協力を得て住宅前のちょっとしたスペースを腰掛として利用できるようにすることや、屋根がついた商店の前などにバス停を設置するなどの工夫も考えられる。

・バスの運行

アンケート調査では、運行ルートに不満を持っている高齢者は約 15%と高い。不満の理由としては、「移動するのに時間がかかる」が最も多く、次いで「行きたいところに行けない」が多かった。また「その他」として、バス停から自宅までの距離が遠いという意見も多く見られた。

また当然のことながら、バス停から自宅までの距離が遠ざかるほど利用頻度は減少し、歩いて 20 分以上になるとほとんど利用者がいなくなると推測された。月 1 回以下の利用者に利用頻度の低い理由は、「出かける先に運行ルートがないから」、「バス停までの距離が遠いから」などの運行ルートに関わるものが上位を占めた。バス停間の距離については、約 200m 間隔で設置されており、高齢者にとって負担が少なく歩ける最適な距離であると考えられる。

1 周する時間に関しては、日常的利用者の不満の理由として最も多かった。非日常的利用者の 16.6%が改善要求を持っていた。新たなルート設定も必要だが、既存ルートも場合によっては考え直す必要もあろう。

今後運行ルートの見直しや設定が実施されると考えられるが、金沢市全体のバス路線の一部としてとらえること、つまりバス路線の再編成の計画が先行的に行われる必要があるだろう。

15 分間隔という分かりやすい運行時刻は非常に好評であった。アンケート調査では運行本数について、不満を持つ高齢者は 4.3%にとどまり、1 時間に 4 本の運行頻度に不満は少ない。

また、時間に余裕を持たせた運行をしているが、日常的利用者の若い年齢層に「移動するのに時間がかかりすぎる」と回答した割合が高いものの、全般的に好評である。自由回答に「ゆっくりして安心して乗れる」という意見が多数見られたことからわかる。移動時間の短縮要求は、非日常的利用者の中で身体機能が低下した高齢者では見られず、むしろ

る移動時間がかかっても、バスが定時に発着する安心感を好んでいる。

・運転手について

自由回答で「運転手が親切でやさしい」という意見が目立った。乗車・下車時に乗客と運転手が自然に挨拶を交わす姿が見られ、運転手の対応の良さがうかがわれた。運転手の選定には、基本的に無事故無違反で、乗客に対して適切な対応ができることが理由となっているようであるが、車内の雰囲気が高齢者にとって利用のしやすさにつながってくるので、今後も運転手の選定を慎重に行うべきであろう。

・料金と採算性

1回乗車ごとに100円という料金に対する不満はほとんど見られなかった。自由回答でも、「安くて良い」、「料金を維持してほしい」などの意見が目立った。

コミュニティバスは運行利益だけを求めるものではない。しかし、あまりにも利用者が少な過ぎて廃止に至った路線も全国的には多く見られ、一定程度の運賃収入も必要である。どこまで行政が負担するかは難しい問題だが、バス導入による商店街等の利用促進・売上増進の相乗効果などの収支や、住民の利便性、乗車人数などを多面的に捉えて計画を進めていく必要がある。

Ⅱ. 子どもの外遊び環境

1. はじめに

子どもの外遊びは発達過程においてさまざまな側面から重要であることは、多くの場で言及されている。しかし、現代の子どもたちをめぐる生活環境は、都市化や少子化、情報化などによって変化が著しく、子どもたちが元気に外で走り回り、思い切り遊ぶ姿を見ることが少なくなった。子どもの外遊びを阻害する要因はさまざまあるが、まず、子どもの外遊びを助ける魅力的な屋外空間が失われつつあることが大きな要因となる。さらに、子どもの誘拐事件が多発していることや、自動車数の増加などで交通事故に合うことなど、多様な危険にさらされていることも指摘できよう。

そこで本研究では、金沢市中心市街地に居住する小中学生を対象に調査し、外遊び実態と問題点、子どもの要求を把握することにより、子どもたちがまちの中で安心して生き生きと活動できるよう示唆を得ようとしている。

2. 調査概要

(1) 夏季の公園における外遊び実態調査 ー予備調査ー

- ①調査対象公園 : 玉川町周辺(さくら公園、玉川公園)、材木・横山町周辺(又五郎町 やすらぎ緑地、浅の川沿い公園、材木小学校校庭、横山町公園)、天神町など、中心市街地の公園
- ②調査期間 : 平成12年7月～8月
- ③調査方法 : 子どものいる公園の観察調査、および子どもの観察調査と面接調査

(2) 春季の外遊び実態調査

- ①調査対象 : 小学生および中学生
- ②調査場所 : 金沢市中心市街地の路上・公園などの屋外。兼六町、弥生、桜町、材木町、野町、寺町、橋場町、兼六元町、石引町、長土堀、長町、白菊町、本江町、広坂、玉川町、新竪町、横山町、さくら公園、やすらぎ公園
- ③調査期間 : 平成13年2月～4月
- ④調査方法 : 無作為選出による面接調査を実施した。
- ⑤回収数 : 155票
- ⑥調査場所別回収数 : 兼六町(1票・0.6%)、弥生(5票・3.2%)、桜町(3票・1.9%)、材木町(17票・11.0%)、野町(6票・3.9%)、寺町(4票・2.6%)、橋場町(4票・2.6%)、兼六元町(26票・16.8%)、石引町(27票・17.4%)、長土堀(5票・3.2%)、長町(4票・2.6%)、白菊町(1票・0.6%)、本江町(10票・6.5%)、広坂(7票・4.5%)、玉川町(13票・8.4%)、新竪町(3票・1.9%)、横山町(6票・3.9%)、さくら公園(11票・7.1%)、やすらぎ公園(1票・0.6%)、不明(1票・0.6%)
- ⑦調査曜日 : 平日。月曜日(11票・7.1%)、火曜日(41票・26.5%)、水曜日(14票・9.0%)、木曜日(49票・25.8%)、不明(40票・25.8%)
- ⑧調査月 : 2月(41票・26.5%)、3月(21票・13.5%)、4月(38票・24.5%)、5月(16票・10.3%)、不明(39票・25.2%)
- ⑨調査時間 : 日中に調査を実施した。12時台(1票・0.6%)、13時台(17票・10.9%)、14時台(8票・5.1%)、15時台(17票・11.0%)、16時台(27票・17.4%)、17時台(23票・14.8%)、18時台(3票・1.9%)、不明(59票・38.1%)

3. 夏季における外遊びの実態

夏季は日も長く、夏休みなど子どもが外遊びに出る機会も多い。日中は暑いですが、午前中や夕方などには外遊びの機会もあると思われるので、調査は午前中や夕方などを中心に実施した。この調査では、夏季における公園などにおける、子どもの外遊びの実態を把握しようとしている。以下は、観察調査および子どもを対象とした面接調査結果である。親子連れには、親に対しても調査をした。

○…面接調査

(1) 玉川町周辺

<穴水町児童公園…通称さくら公園>

金沢市街区公園・長土堀1丁目151番地ほか

玉川公園から近い場所に位置している。規模はあまり大きくない。周囲は民家に囲まれており、静かな環境である。

小学生が多く見られ、子ども中心の公園のように見受けられるが、ゲートボールができることもあり、高齢者の姿も見える。かなり利用者が多い。

就学前児の女子は砂遊びをしている。砂場ではなく、もともとは地面に、自分で自由に掘って作ったもので、大変人気がある。その他、ブランコ、滑り台、縄跳びをしている。

男子は水鉄砲に人気がある。水は近くのトイレまで汲みに行く。公園外周の道路を自転車で回る。子どもたちは自転車で来る。

○公園で遊ぶのは楽しい。だいたい家か公園か児童館で遊ぶ。児童館が一番楽しい。

家は公園の近くにある。(幼稚園～小学2年生・女子8人・さくら公園)

○公園にはいつも来ている。妹や友達も皆来るので楽しい。家は公園の近くにある。

(小学5年生・男子・さくら公園)

<玉川公園>

石川県近隣公園・金沢市玉川町

1. 5ヘクタール。芝生広場、レンガ広場、休憩舎、風車のある子供の家、噴水池(カナル)、トイレ(身障者用含む)

日本専売公社金沢地方局の工場移転跡地を公園化した。

金沢市立玉川図書館本館に隣接し、歩行者用通路が設けられている。外周は道路

と用水。

非常に規模が大きい。全体に非常に樹木が多いという印象である。

公園にはおとなの姿ばかりで、犬の散歩が目につく。樹木が生い茂っている付近では、ホームレスが複数いる。子どもは少ない。

○今日はたまたま待ち合わせのために来ているだけで、普段は家の中が多い。公園はつまらないから行きたくない。勉強とゲームができればそれでいい。たまにサッカーをしたい。(小学6年生・男子3人・玉川公園)

○友達は皆家の中で遊んでいる。玉川公園には行かない。浮浪者が多くて嫌。虫も多くて嫌。さくら公園は小さいばかり。公園にはもっと遊具があるといい。ボールとか貸してくれて遊べると楽しい。(小学5年生・女子・玉川公園横路上)

(2) 材木・横山町周辺

〈又五郎町 やすらぎ緑地〉

金沢市緑地・金沢市材木町

小学校に近い。入り組んだ場所にあり、周辺の交通量は少なく、静かな住宅地。規模は小さい。遊具はほとんどない。

子どもはかなりいる。自転車を利用して来ている。周辺道路でも、三輪車や自転車で遊ぶ姿が見られる。暑いこともあり、水場に集まっている。

○中学生は外に行かない。家の中にいる。今日は部活もないからたまたま来た。家は公園の近くにある。通学する道路(浅の川沿いの道路)は自動車が多くて嫌。帰りは電灯が暗く怖い。(中学1年生・女子2人・又五郎町やすらぎ緑地)

〈浅の川河川敷〉

河川敷で子どもが遊んでいると期待したが、高齢者とジョギングの人ばかりである。子どもは親とともに来ている。川の流力は速い。

○川で遊ばせたいが、川の真ん中は浅くて流れも緩やかだが、ふち側は深くて流れが急になっていて危険だから遊ばせられない。(子1人連れの父親・浅の川沿い)

〈東山河岸緑地〉

金沢市緑地・金沢市東山1丁目10番ほか

天神橋詰め

滑り台がある。

高齢者ばかりで子どもは見られない。樹木や草が茂っている。

〈材木小学校校庭・材木保育園・桜華幼稚園〉

金沢市材木町

小学校、保育園、幼稚園が隣接している。

日曜日の利用が多い。小学校はサッカーをしている。幼稚園・保育園では遊具の利用や、虫取りなどを行っている。

〈横山町児童公園〉

金沢市街区公園・金沢市横山町352番ほか

周辺は住宅である。砂場、回転球様の遊具が設置されている。

○数年前事故があつて以来、川は大人と一緒にないと行つてはいけないことにしているから、子どもだけでは行かない。子どもも行きたいと言わない。夏は砂場に人気がある。水を使って遊んでいる。この周辺は道路が狭く、路上駐車も多く、子どもが見えなくて危険だが、仕方がない。(子2人連れの母親・横山町公園)

○この公園に来たのはたまたま。家は森山の方。(子2人連れの母親・横山町公園)

(3) 天神町

〈天神町緑地〉

金沢市緑地・金沢市天神町2丁目617番ほか

規模が大きく、外周は傾斜のある道路になっている。園内に日本庭園風の庭がある。休憩できる場所が設置されている。

休憩している高齢者や、親子連れが多い。遊具で遊ぶ小さい子どもと高齢者が一緒に仲良く過ごしている姿が見られる。小学校高学年の子どもは、芝生でボール遊びをしたり、傾斜のある外周道路を自転車で走って遊んでいる。

○ここは広いので、よく利用している。毎日子どもと一緒に来る。静かで、遊び場として問題はまったくない。(子2人連れの母親・天神町公園)

(4) 課題

屋外を観察調査していると、子どもを見かけるのはほとんど公園においてであった。まちなかでは、子どもの屋外における居場所は公園や、児童館などに限られているようであるが、公園は魅力のある環境になりえていない場合が多い。

近くにありながら玉川公園と穴水町児童公園（さくら公園）とでは違いが明確に現れていた。

玉川公園は規模が大きく、緑にあふれ、図書館も隣接しているが、子どもの遊びには使われていない。トイレが暗く使いにくいこと、樹木が生い茂っている場所は暗くホームレスがいるなど、特に子どもには危険感が強いことや、魅力的な遊具がないこと、広いことを活かした遊び（ボールを使った遊び、スポーツなど）に利用できない、あるいは利用しにくいこと、外周道路の交通量やビルなどのために落ち着きを感じられないこと、死角になる場所が多く危険な感じがすることなどが要因と思われる。まちなかに広い場所を確保しながら、住民の集う場所になっていない。

穴水町児童公園（さくら公園）は小学生や高齢者に人気がある。ゲートボールができること、トイレが使いやすいこと、住宅地内にあり交通量も少なく、静かで落ち着いた場所であること、適度な規模で死角がないこと、周囲が民家であるため住民や公園にいる高齢者などから見守られる安心感があることがその要因と思われる。

その他観察調査において、特に小学生以上の子どもの場合は、一ヶ所に留まって遊ぶことはあまりなく、周辺道路も含めて、自転車などで行き来しながら遊んでいる様子がしばしば見られた。しかし公園周辺の道路が自動車の危険性が高い場合は、その姿は見られない。公園内だけを自動車の危険から遠ざけるのではなく、周辺道路も含めて安全性を高める必要がある。できれば他の公園・施設などに移動しながら遊べるような、空間的なネットワークを構築できれば、遊びの幅が広がるだろう。

4. 調査対象者の属性

以下、「春季の外遊び実態調査」の調査対象者の属性について述べる。

(1) 性別・年齢

調査対象者の性別は、男性65人(43.0%)、女性86人(57.0%)である。

年齢構成は、6歳・7歳が9人(5.8%)、8歳・9歳が16人(10.3%)、10歳・11歳が40人(25.8%)、12歳・13歳が61人(39.4%)、14歳以上が28人(18.1%)となった。

10歳から11歳に男子が多い。

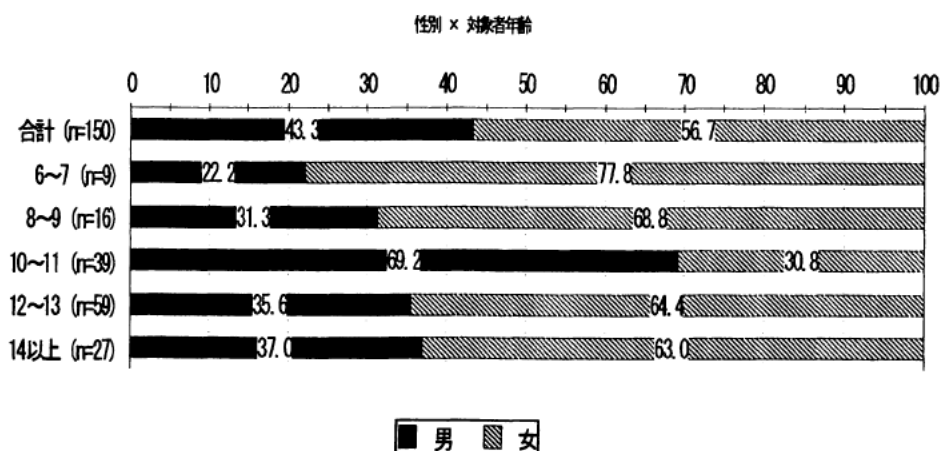


図1 性別と年齢

(2) 学校

通学する学校は合計15校にものぼった。中学校5校、小学校10校である。

中学校は、小將町中学校16人、泉中学校3人、兼六中学校16人、紫錦台中学校25人、高岡中学校12人、である。

小学校は材木小学校17人、野町小学校4人、弥生小学校4人、泉野小学校3人、味噌蔵小学校19人、十一屋小学校1人、中央小学校30人、金沢大学附属小学校1人、中村町小学校1人、菊川小学校3人である。

自宅の住所を町名で調査したところ、49町にものぼった。

兼六元町、芳齋、片町、長町など、中心市街地に自宅がある者が多いが、そうでない者も比較的多い。

5. 自動車による危険感

中心市街地の路上や公園など子どもの遊び場所となりうる場所において、子ども自身が自動車交通により「危ないと感じたこと」の経験の有無を尋ねた。選択肢は「よくある」「少しある」「あまりない」「一度もない」の4段階とした。以下に場所別に検討する。

(1) 公園・遊び場

「公園・遊び場の近くに車がよく通るので危ないと感じたこと」について尋ねたところ、「よくある」と回答したのは153人のうち35人(22.9%)、「少しある」は62人(40.5%)、「あまりない」が39人(25.5%)、「一度もない」が17人(11.1%)であった。60%以上が経験し、4分の1は日常的に経験する危険であるといえる。

中心市街地において、公園は子どもにとってかけがえのない遊び場となるはずである。しかし、その付近は自動車の危険にさらされていることがわかる。

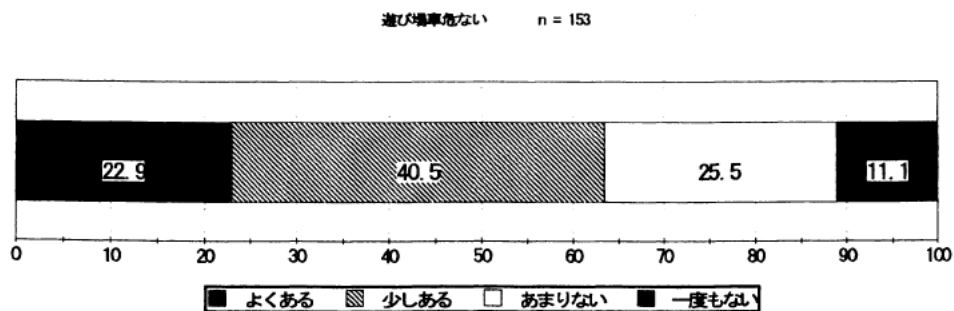


図2 公園・遊び場付近の自動車による危険感

性別では、男子にやや危険感の経験が多いが、あまり顕著な違いは見られない。

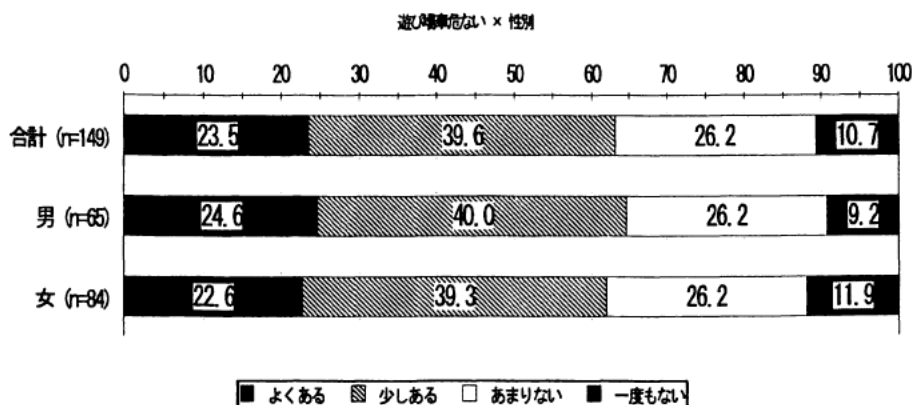


図3 性別公園・遊び場付近の自動車による危険感

年齢により、自動車による危険感の違いをみたところ、8～9歳に「よくある」と回答した者が非常に多い。

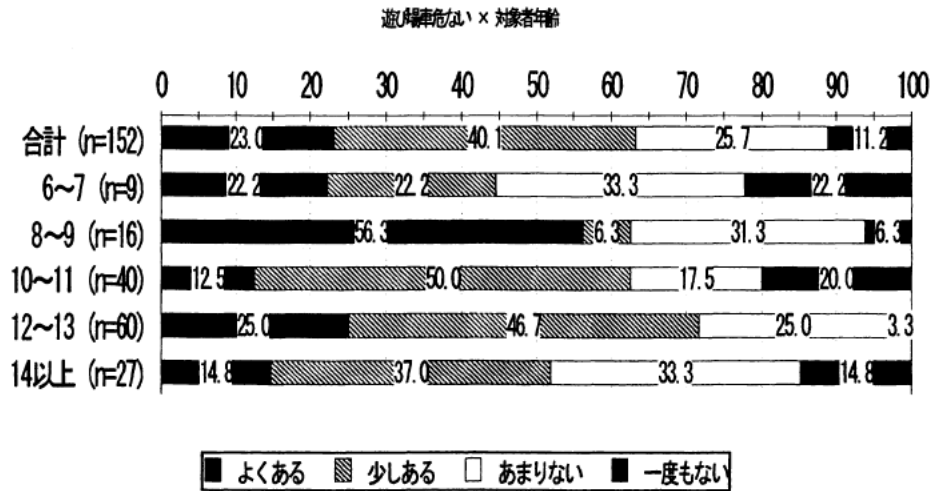


図4 年齢別公園付近の自動車による危険感

(2) 細街路

「細い道を通っていると車がよく通るので危ないと感じたこと」について尋ねたところ、「よくある」と回答したのは153人のうち65人(42.5%)、「少しある」は41人(26.8%)、「あまりない」が33人(21.6%)、「一度もない」が14人(9.2%)であった。公園・遊び場に比べるとかなり危険を感じていることがわかる。

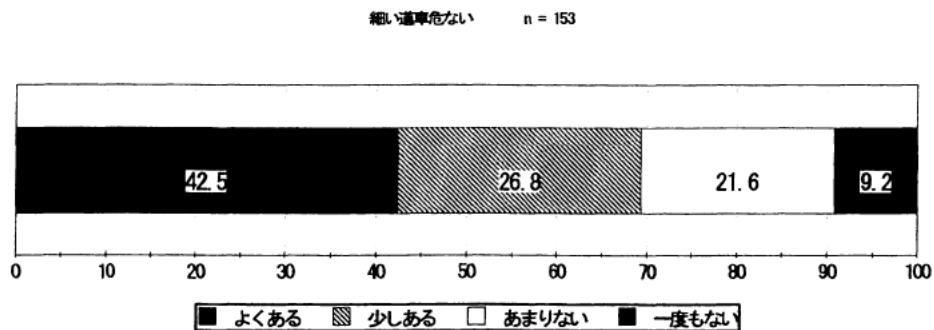


図5 細街路の自動車による危険感

金沢市は戦災に合わなかったこともあり、藩政期以来の城下町特有の細街路が多く残って

いる。他の多くの都市が区画整理事業などにより道路を整備してきたが、金沢市では、今に色濃く残る伝統的都市景観を魅力ととらえ、積極的に残してきた。まちなかに多く残るこのような細街路は市民生活にも深く結びついており、今後も残していくべきである。

しかしこの調査により、子どもにとっては自動車の危険にさらされていることがわかる。子どもに対する危険回避の教育も必要であるが、安心して細街路を通ったり遊んだりする姿がみられる方が、市民生活上健全であろう。

年齢別に危険感をみたところ、8～9歳に「よくある」が多いという特徴がみられるが、年齢層が低い方が危険感を強く感じているわけではないことがわかる。つまり、危険感はいさゝか小さい子どもだけの問題ではない。おとなも同様であると思われ、特に高齢者にとっては外出の阻害になるだろう。

細街路の自動車通行の危険に対しては、自動車に対する規制などで対処すべきである。

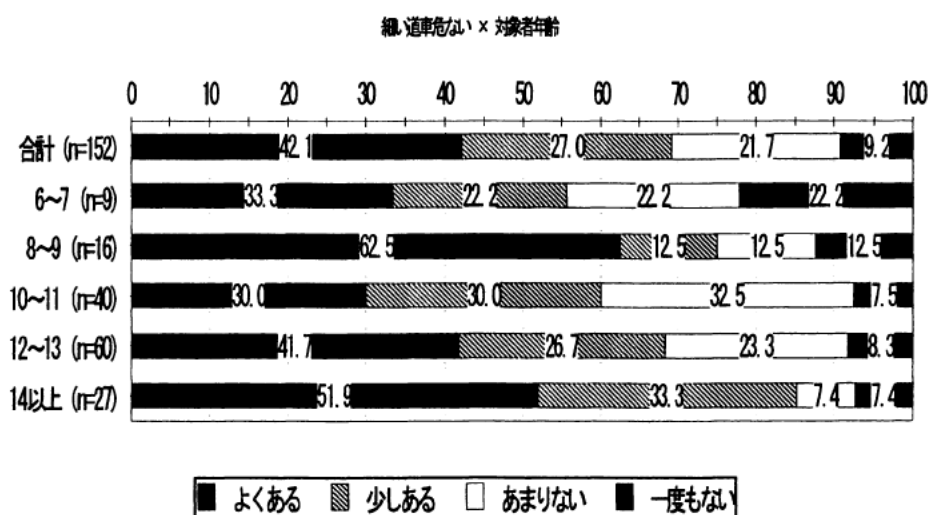


図6 年齢別細街路の自動車による危険感

(3) 自宅付近

「家の近くに車がよく通るので危ないと思ったこと」については、以下のものであった。「よくある」「すこしある」と回答した者の合計が、公園・遊び場は63.4%、細街路は69.3%であるのに対し、自宅付近は55.6%であり、危険を感じる経験をした者の割合が少ない。

男子の方が「よくある」と回答した者が多いが、全体的にはあまり違いはみられない。

家の近く車危ない n = 153

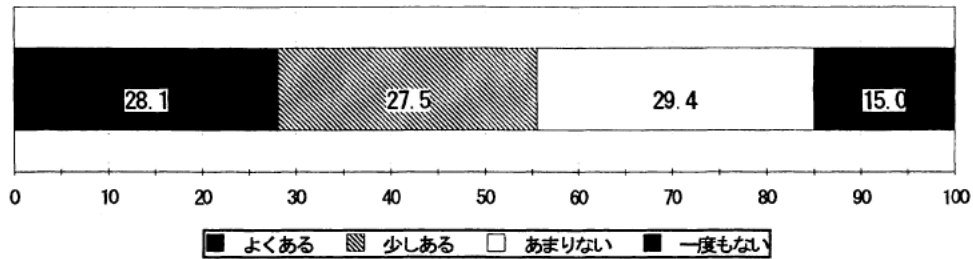


図7 自宅付近の自動車による危険感

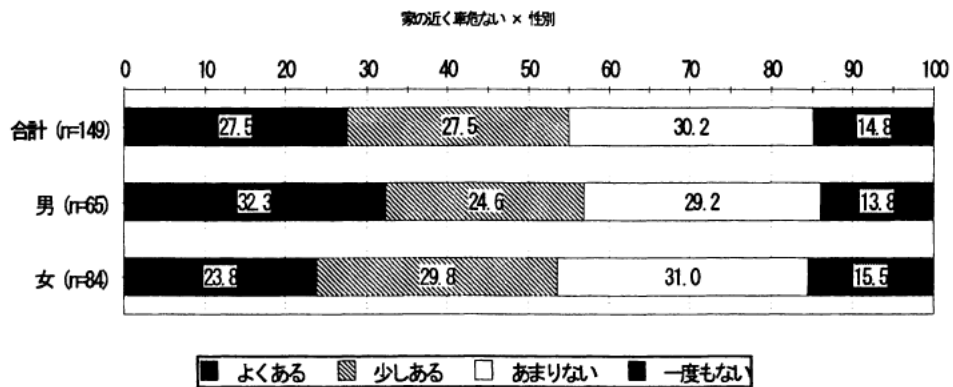


図8 性別自宅付近の自動車による危険感

年齢別にみると、「よくある」「少しある」と回答した者は、年齢が低いほど多い傾向が見られた。

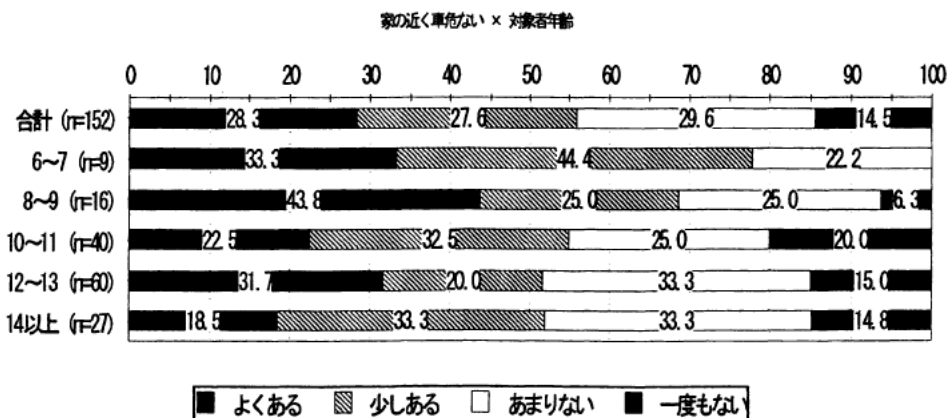


図9 年齢別自宅付近の自動車による危険感

(4) 学校付近

「学校の近くに車がよく通るので危ないと思ったこと」については、以下のようなものである。「よくある」と回答したのは152人のうち37人(24.3%)、「少しある」は49人(32.2%)、「あまりない」が37人(24.3%)、「一度もない」が29人(19.1%)であった。

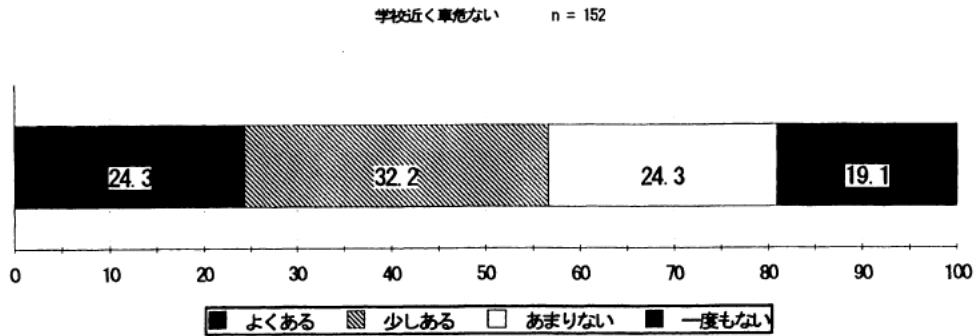


図10 学校付近の自動車による危険感

男子の方が「よくある」「少しある」と回答した者が多く、女子に「一度もない」と回答した者が多い。

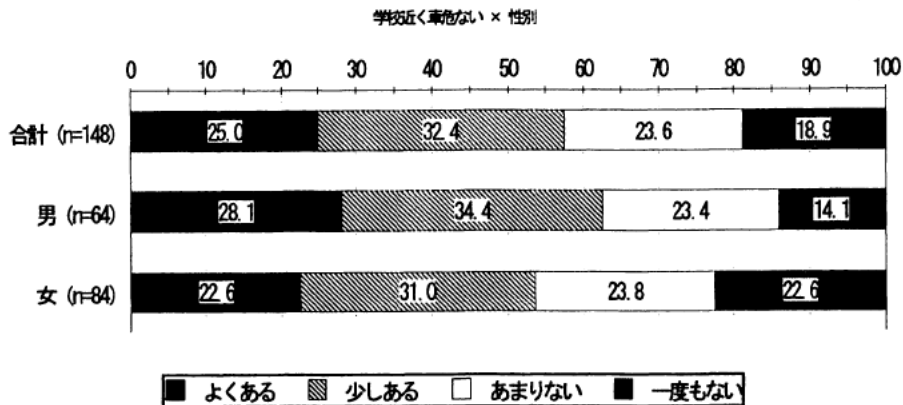


図11 性別学校付近の自動車による危険感

学校別にみたところ、中央小学校、味噌蔵小学校、高岡中学校、小將町中学校など中心市

街地所在の小中学校周辺の交通量が多く、子どもたちに危険を感じさせていることがわかる。

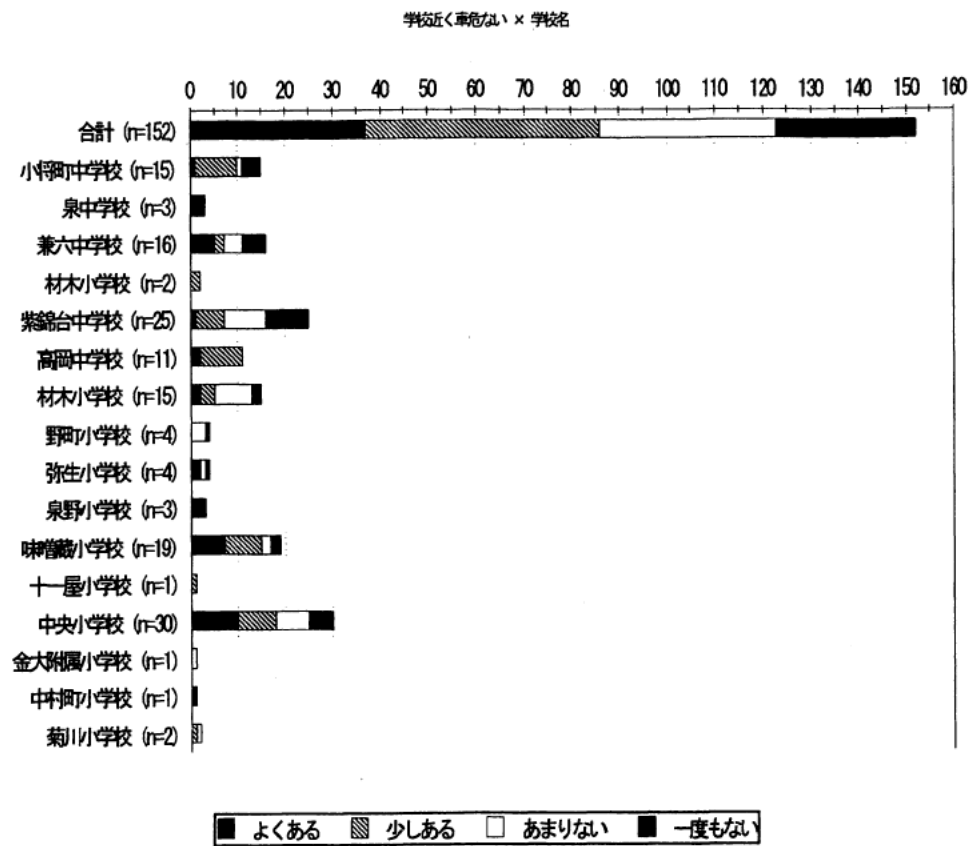


図 1 2 学校別学校付近の自動車による危険感

6. 不審者などによる危険感

中心市街地の路上や公園など子どもの遊び場所となりうる場所において、子ども自身が不審者や大人などの存在や通行により「危ないと感じたこと」の経験の有無を尋ねた。選択肢は自動車の場合と同様「よくある」「少しある」「あまりない」「一度もない」の4段階とした。

(1) 公園内の不審者

夏季の観察調査および面接調査により、公園に常時いるホームレスの人々に対して不安を感じ、遊びの阻害になっているという意見が多数聞かれた。そこで、「公園などに不審な人がいて怖いと思ったこと」について尋ねたところ、「よくある」が25.5%、「少しある」が30.1%と、半数以上が不審者に対して不安感を持った経験があることがわかる。

特に女子に大変多く、61.9%もが不審者に対して不安感を持った経験があると回答している。また、年齢でみると年齢の高い層に不安感が強いことがわかる。

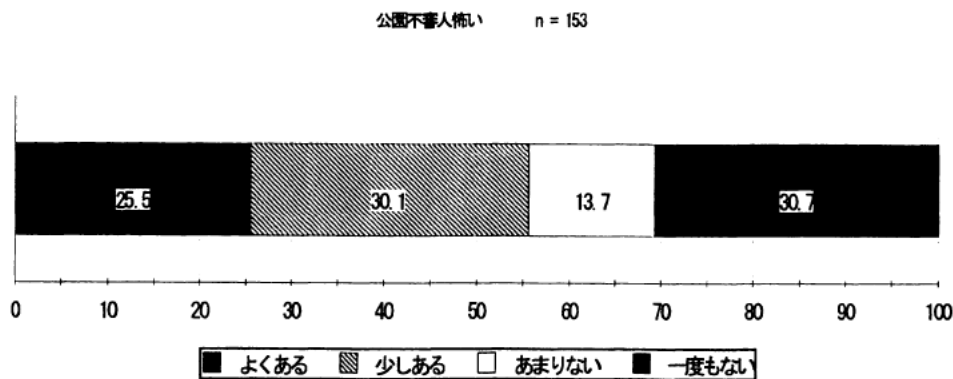


図 1 3 公園の不審者に対する危険感

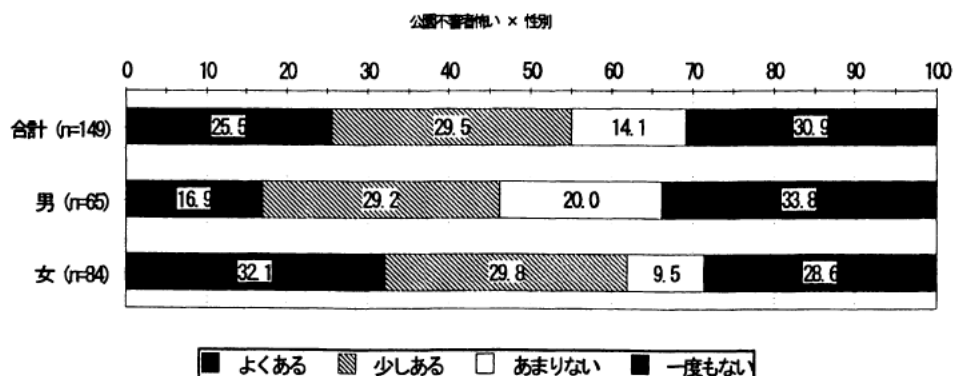


図 1 4 性別公園の不審者に対する不安感

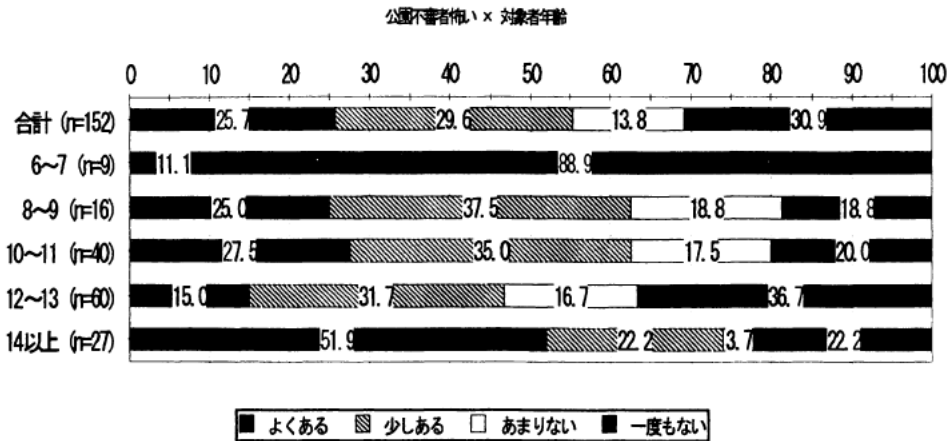


図 1 5 年齢別公園の不審者に対する不安感

(2) 公園の不安を感じさせる高校生など

夏季の観察調査および面接調査により、ホームレスの人々の存在と同様、公園に溜まっている高校生などに対して不安を感じ、遊びの阻害になっているという意見が多数聞かれた。そこで、「公園などに怖そうな高校生などがいて怖いと思ったこと」について尋ねたところ、「よくある」が 25.7%、「少しある」が 36.2%と、公園の不審者以上の高い割合で不安感を持った経験があることがわかる。

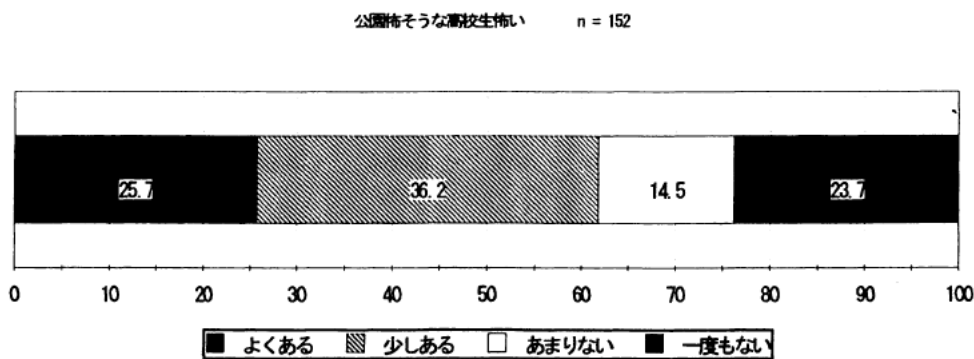


図 1 6 公園の不安を感じさせる高校生などに対する不安感

不審者に対しては特に年齢の高い女子に不安感を持つ経験をした割合が高かったが、高校生に対しては、むしろ男子に多い。またどの年齢層でも高いことがわかる。

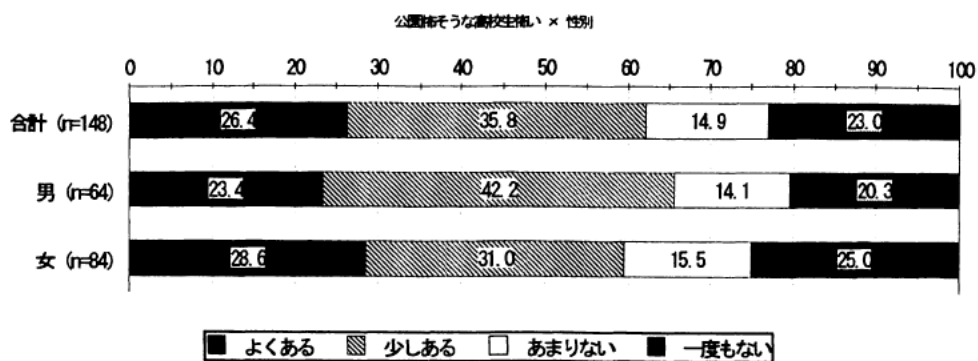


図 1 7 性別公園の不安を感じさせる高校生などに対する不安感

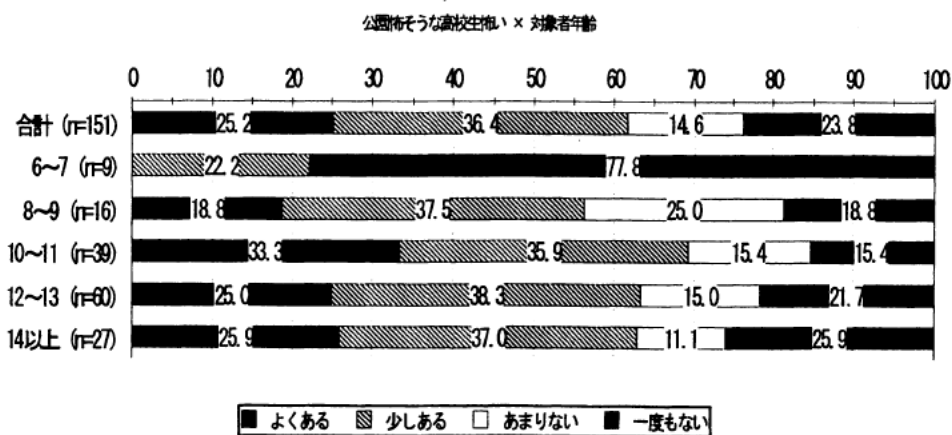


図 1 8 性別公園の不安を感じさせる高校生などに対する不安感

(3) 路上の人通り

日中は自動車や通行人がいる路上でも、夕方以降はこれらの通行が少なくなり、子どもたちにとって不安な空間となるのではないかと考えられる。そこで、「暗くなると人通りが少なくなって怖いと思ったこと」はないかを尋ねた。「よくある」と回答した者は比較的多く 38.2%もある。「少しある」と回答した者は 19.7%であった。

性別、年齢別でみると、公園の不審者と同様の傾向がみられ、年齢の高い女子に特に不安感を持った経験が多いことがわかる。

暗く人通り無く怖い n = 152

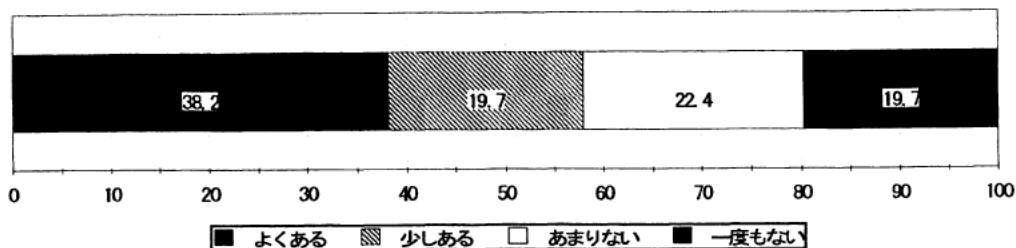


図 19 路上の人通りに対する不安感

暗く人通り無く怖い × 性別

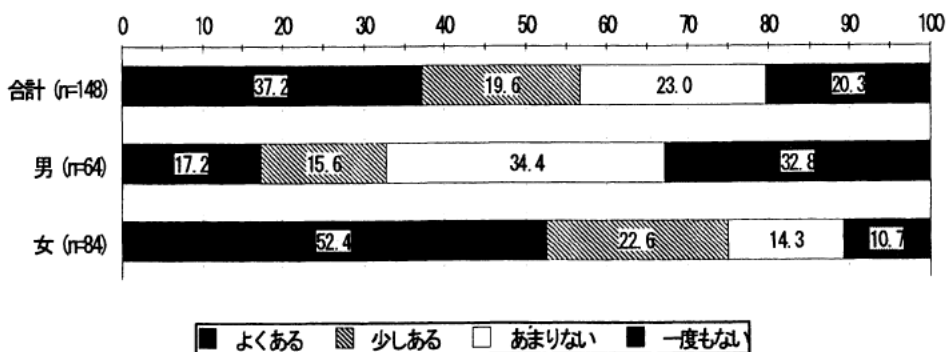


図 20 性別路上の人通りに対する不安感

暗く人通り無く怖い × 対象者年齢

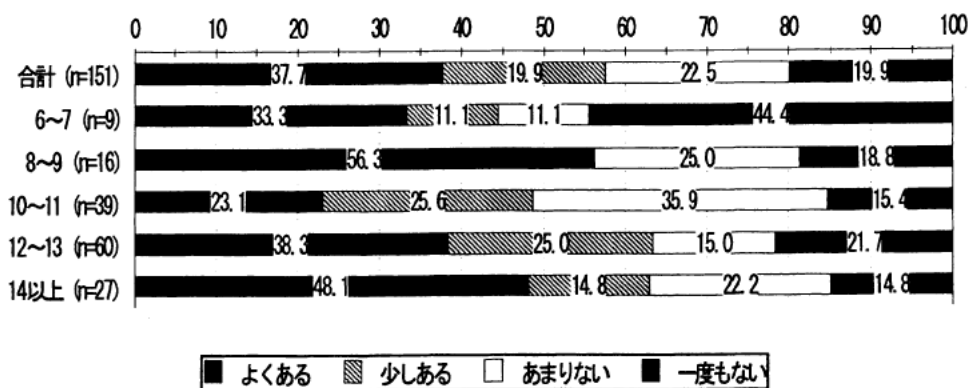


図 21 年齢別路上の人通りに対する不安感

7. その他の不安感の経験

公園・遊び場周辺の自動車通行、細街路の自動車通行、自宅付近の自動車通行、学校付近の自動車通行、公園内の不審者、公園内の不安を感じさせる高校生など、路上の人通り以外に、まちなかにおいて通行中、あるいは遊び中に不安を感じた経験について調査した。自由回答によって得られた結果は以下のようである。

①自動車 (14)

- ・信号無視の車にぶつかりそうになる。
- ・バイクがたくさんいて怖い
- ・自転車で車にぶつかった。
- ・排気ガス。
- ・車がいっぱい通っていてぶつかりそう(商店街あたり)。
- ・マンションの駐車場の裏に広場があって遊ぶが、車の出入りが危ない。
- ・タクシーの運転手はクラクションを鳴らすくせに、スピードを抑えてくれない。

②道路の狭さ (7)

- ・歩道が狭く、車道を歩いてしまう。
- ・側溝に落ちる。
- ・道が狭いので止まらないといけない。
- ・行き止まりの道が多いので、Uターンしてくる車が多くて危ない。
- ・道路が狭いので車にあたった。
- ・道が狭くて、大型車が通るとサイドミラーや傘があたる。

③雪道、雨天時 (19)

- ・雪道が危ない。
- ・融雪装置の水が出過ぎて歩きにくい。

④夜間の人通り (7)

- ・夜1人で歩いている時、暗くてこわい。
- ・灯りが暗いとこわい。
- ・誘拐されるかと思うとこわい。

⑤不審者など (21)

- ・お店に高校生がいて行けない
- ・浮浪者が歩いている
- ・家の前に変質者がいた。
- ・チカンがいる。
- ・夜、ヤンキーがいた。
- ・夜、高校生がいた。
- ・夜のコンビニ
- ・大人がタバコ吸っていて怖い。
- ・友達が知らない大人に傘で叩かれたことがあった。

⑥その他

- ・放し飼いの犬 (7)
- ・散歩中の犬 (3)
- ・カラス (3)
- ・蜂、虻 (5)

公園・遊び場付近、細街路、自宅付近、学校付近における自動車に対する危険感については前述のとおりであるが、自由回答でも自動車の危険感について多くの子どもから意見が聞かれた。ぶつかった、ぶつかりそうになったなど、自動車による危険が日常的であることがわかる。その理由として挙げられたのが、歩道が狭く、歩行の安全性を確保できないことなどである。

降雪・積雪時の危険についての指摘もあった。調査時期が2～4月であったため特に多く聞かれたこともあるが、子どもにとっては切実な問題であろう。

不審者や高校生など、恐怖感を感じるおとなの存在については、公園だけでなく、路上やコンビニなど、いたるところであるようだ。夜間における危険感の経験も多く、自動車とともに子どもにとっては、屋外は常に危険を感じる場所となってしまう。

その他では特に放し飼いや散歩の犬を怖い感じる子どもも多いことがわかる。

8. 安全への方策

前記のような危険に対する安全性を高めるための方策について、調査対象者に自由に回答してもらった。結果は以下のようなものである。

①自動車

- ・ 自動車を減らす、通らないようにする (8)
- ・ 自動車の安全運転
- ・ 路上駐車をやめる
- ・ 自動車が来たらわかるようなシールを柱に貼る

②道路の狭さ

- ・ 道路全体の整備、拡幅 (10)
- ・ 歩道の確保・整備、路側帯・側溝の整備 (5)
- ・ 歩道と車道の間にはガードレールをつける (2)

③雪道、雨天時

- ・ 融雪装置の整備、調節 (2)
- ・ ちゃんと雪をどかしてほしい (3)
- ・ 車のはね水を防ぐ壁をつける
- ・ 雪の日は車を通さない

④夜間の人通り

- ・ 街灯の増加 (18)
- ・ 誰かと一緒に歩く。 (2)
- ・ 人がいてにぎやかにする。 (2)
- ・ 早い時間に明かりをつける。 (2)
- ・ 警察のパトロール
- ・ 明るいところを歩く
- ・ 夜歩かないようにする

⑤不審者など

- ・ 警察のパトロール、逮捕 (10)

- ・交番の設置 (2)
- ・走る、しっかりするなど個人の対策 (2)
- ・防犯カメラをつける (2)

⑥その他

- ・トイレを明るくきれいにする (2)
- ・カラスを駆除する

自動車による危険に対しては、まず自動車の通行自体の抑制を期待する声が多い。また運転者の法律の遵守やマナーの徹底も必要だとしている。道路の整備、特に歩道の整備など、安心して歩ける環境が必要であることの回答も多い。

不審者などに対しては、警察のパトロールや取締りなど、不審者を身近なところからの排除の要求が非常に多く得られた。

9. 希望する場所・施設

既述のように、中心市街地において子どもたちは常に自動車や人の危険に直面している。そこで、地域の中で子どもが安全に、快適に過ごせる居場所づくりのために何が必要かを把握するために、「学校や家の近くにあったらよいと思う」施設などについて、「欲しい」「いない」の2段階で調査した。

中心市街地には既存文化施設などが多いことが特徴であるが、有料であることや高額であることなど金銭的な不自由さがある。またはあっても良いが、有料なら自分は使えない、あるいは使いたくないなどの回答もあり得ると考え、この調査では「無料または安い値段で使えるならば」という条件をつけた。

(1) 緑や水など自然の多い場所

金沢は犀川、浅の川と河川があり、また用水も通っており、市民は日常的に水の流れを目にしている。緑も遠景に山々が見え、また市街地でありながら、兼六園、金沢城址、中央公園、玉川公園など、樹木の多い場所が比較的多い。にもかかわらず「緑や水など自然の多い場所」を欲しいと感じている者は88.9%にのぼった。これは、前述の危険感で述べたように、河川での遊びは危険なため禁止されていること、公園の樹木は生い茂っていて不審者のたまり場所となり危険感から近づかないことなど、子どもの屋外遊びの場にはむしろ否定的に捉えられている場所となっているためである。しかし、ここでみるように子どもたちは自然を欲していることがわかる。

性別や年齢では女子、8～9歳にやや希望が多いが、顕著な違いは見られない。

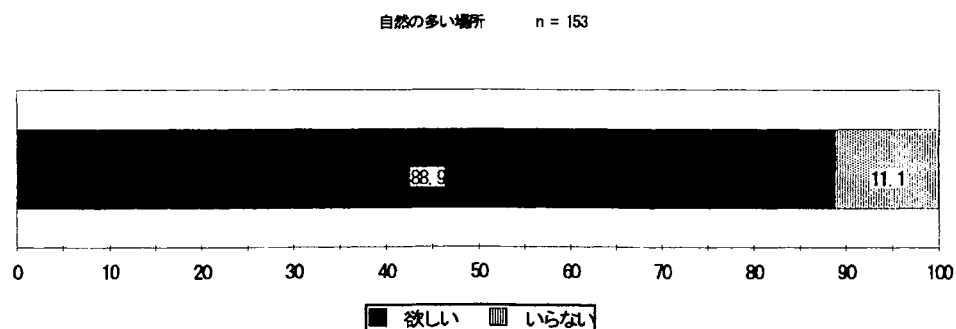


図22 希望・自然の多い場所

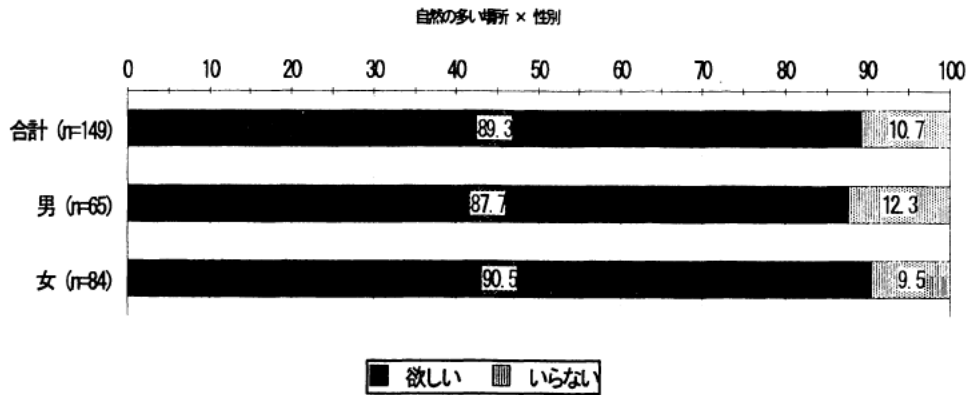


図 2 3 性別・自然の多い場所

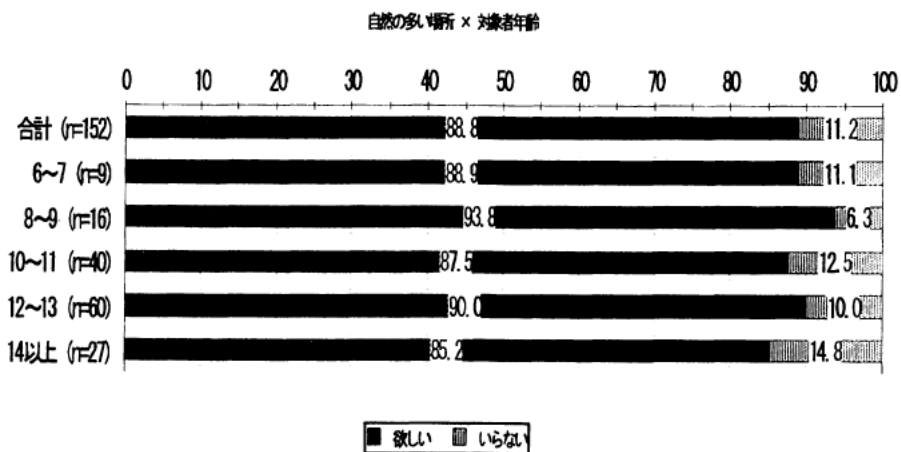


図 2 4 年齢別・自然の多い場所

(2) 遊具のたくさんある場所

「ブランコ、ジャングルジムなど遊具のたくさんある場所」を希望する子どもは51.7%で、自然の多い場所と比較し非常に少ない。

性別でみると男子にやや多いが、大きな相違はない。

年齢別では年齢の低いほど希望する者が多いことがわかる。小学校低学年までは、男女ともに公園の遊具で遊びたいという要求が強いことがうかがえる。小学校高学年以上になると、遊具に魅力を感じなくなるのか希望する割合は激減するものの、14歳以上でも4分

の1の者は「欲しい」と回答しており、中学生になると公園の遊具で遊ばないと決め付けるのは早計であろう。

遊具たくさんある場所 n = 149

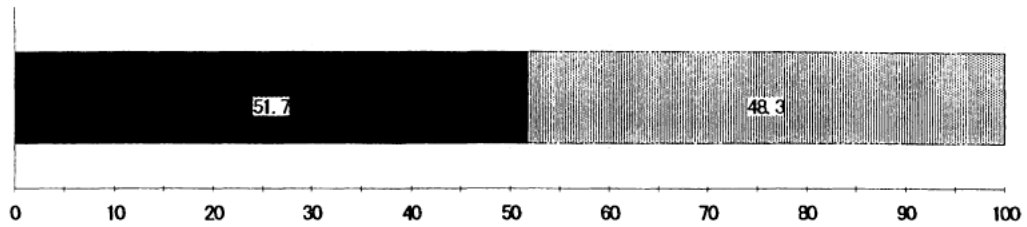


図25 希望・遊具のたくさんある場所

遊具たくさんある場所 × 性別

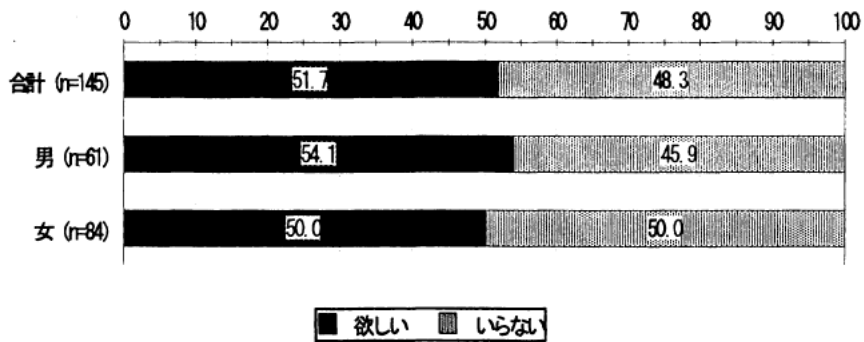


図26 性別・遊具のたくさんある場所

遊具たくさんある場所 × 対象年齢

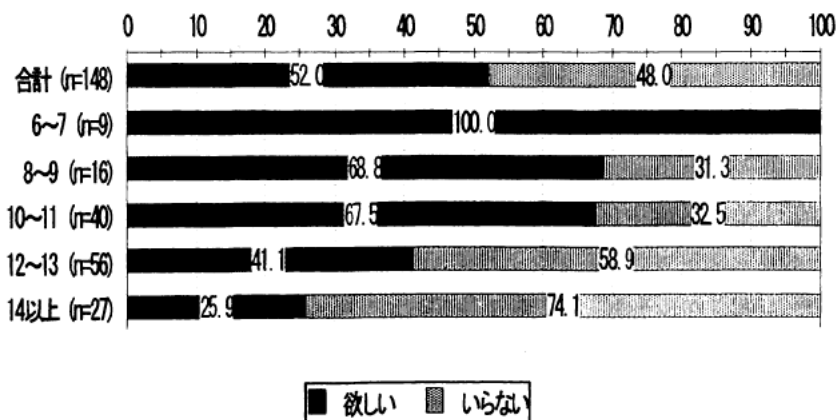


図27 年齢別・遊具のたくさんある場所

(3) 屋内スポーツ施設

「道具や場所が自由に使える屋内のスポーツ施設」を希望する者は非常に多く、89.5%にのぼる。本調査における14種類の「あったらよいと思うもの」の中で、子どもが最も欲しいと回答した割合が高い。

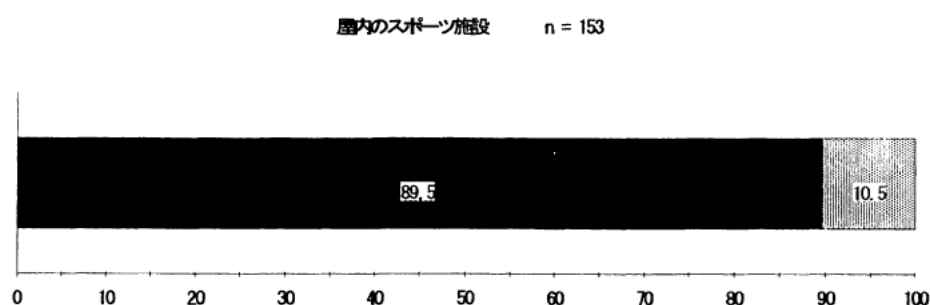


図28 希望・屋内スポーツ施設

性別にみると、女子にやや多いが、ほとんど違いは見られない。金沢は雨天や降雪など、屋外で過ごせないことが多く、屋内施設への希望が多いのではないかとと思われる。

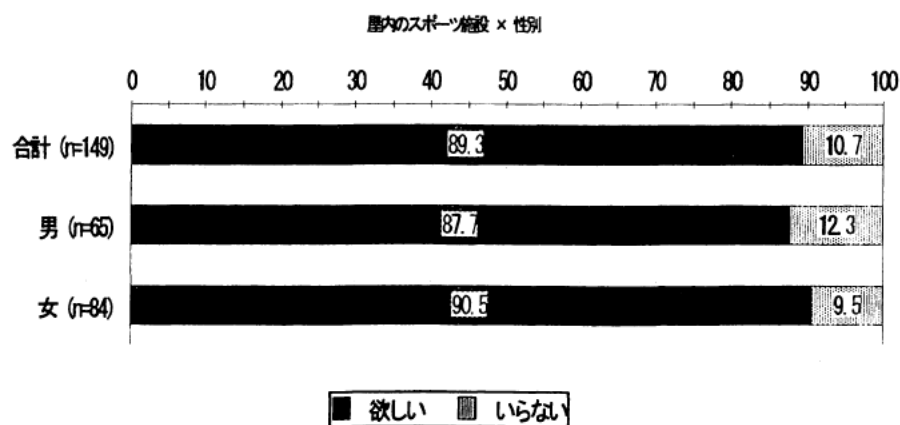


図29 性別・屋内スポーツ施設

年齢別にみると、8～9歳のすべて、他の年齢層も9割が欲しいと回答している。性別、年齢にかかわらず、多くの子どもが屋内スポーツ施設があればよいと感じていることがわかる。

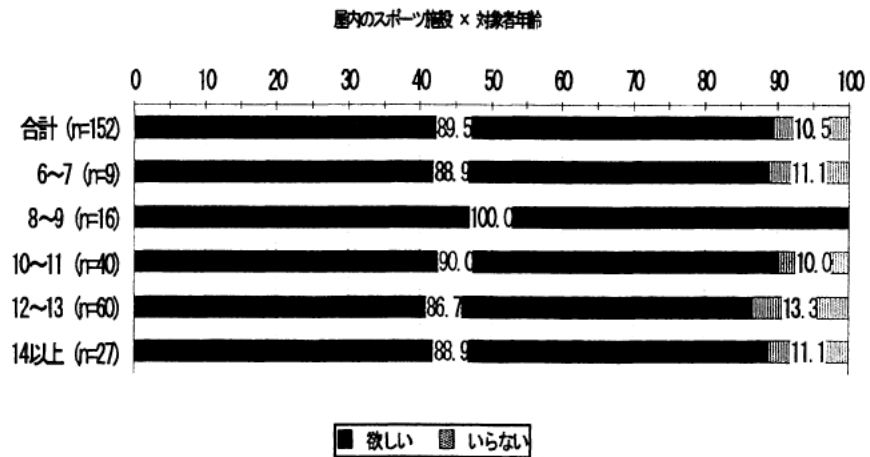


図30 年齢別・屋内スポーツ施設

(4) 屋外スポーツ施設

屋内スポーツ施設に対する希望が多いのに対し、「道具や場所が自由に使える屋外のスポーツ施設」は66.0%であった。屋外のスポーツ施設は雨天・降雪時は使えないなど、利用機会が少ないことや、屋内スポーツに比較し気軽な感じが少ないためであろう。

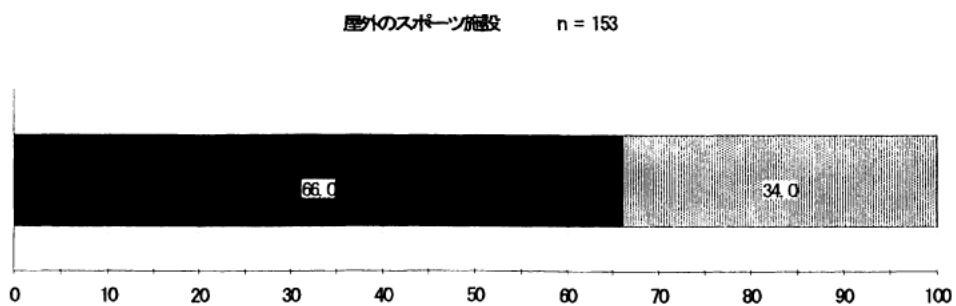


図31 希望・屋外スポーツ施設

屋外スポーツ施設は、男子には希望が多く女子に少ない。屋外スポーツには野球やサッカーが考えられるが、男子に人気があるスポーツであるためであろう。年齢別には8～9歳にすくなく、6～7歳に多いものの、特別な理由は見当たらない。

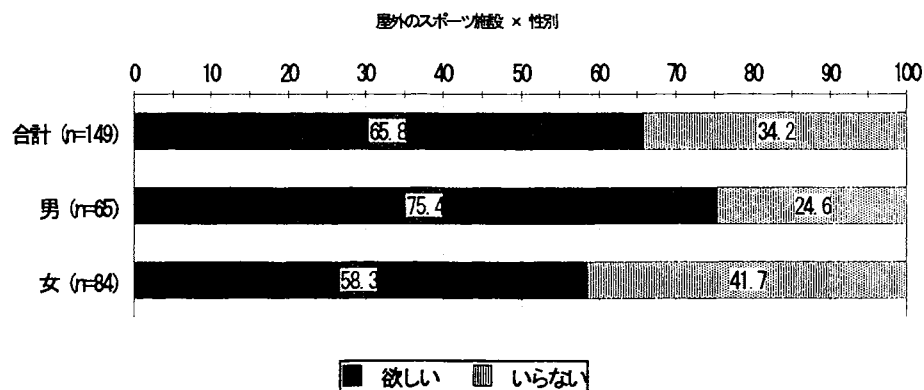


図 3 2 性別・屋外スポーツ施設

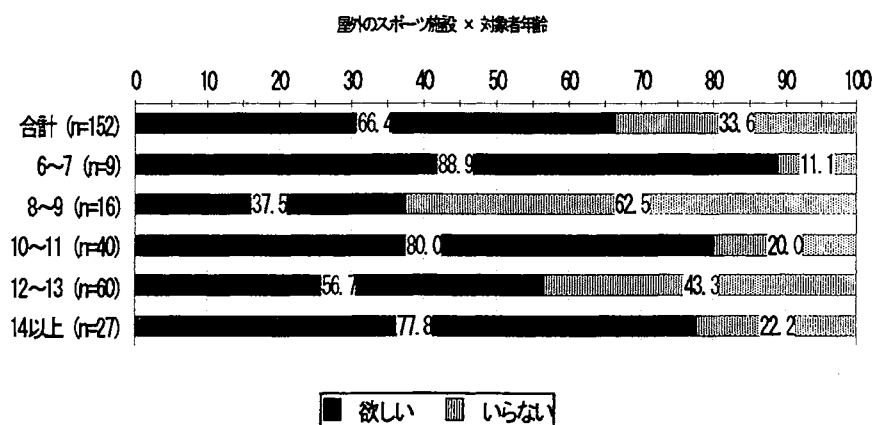


図 3 3 年齢別・屋外スポーツ施設

(5) 自由な屋内遊び場

「雨や雪の日でも自由に遊べる屋内の遊び場」への希望は、88.9%となり、「道具や場所が自由に使える屋内のスポーツ施設」に次いで、全14の施設・場所の中で希望する者の割合が高い場所となった（「緑や水など自然の多い場所」と同順位）。屋内で自由に過ごせる場所に対する要求が多いことがわかる。屋外はルールのあるスポーツをするのではなく、自然の中で過ごすことを期待しているものと思われる。雨天・降雪の多い地域性によるものかもしれないが、特に中心市街地に居住する子どもは、屋外で体を動かすことが

苦手になってきているのかもしれない。

屋内のスポーツ施設と屋内で自由に遊べる遊び場とは、スポーツをしたいのか、屋内の居場所を欲しているのかの違いを見出そうとする目的で別の項目としたが、両者に大きな違いは見られなかった。年齢別にみると、屋内スポーツ施設は8～9歳全員が希望しているが、屋内の自由な遊び場は12～13歳に多く、14歳以上では少なくなっている。しかし全体としてみると、屋内の自由な遊び場も、性別、年齢層にかかわらず、希望が多いといえる。

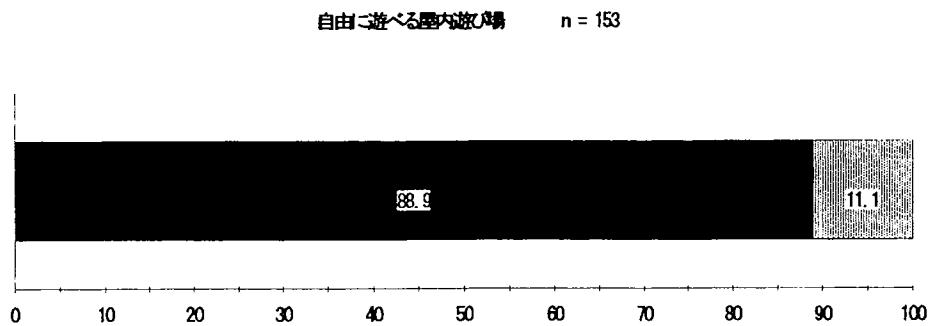


図 3 4 希望・自由な屋内遊び場

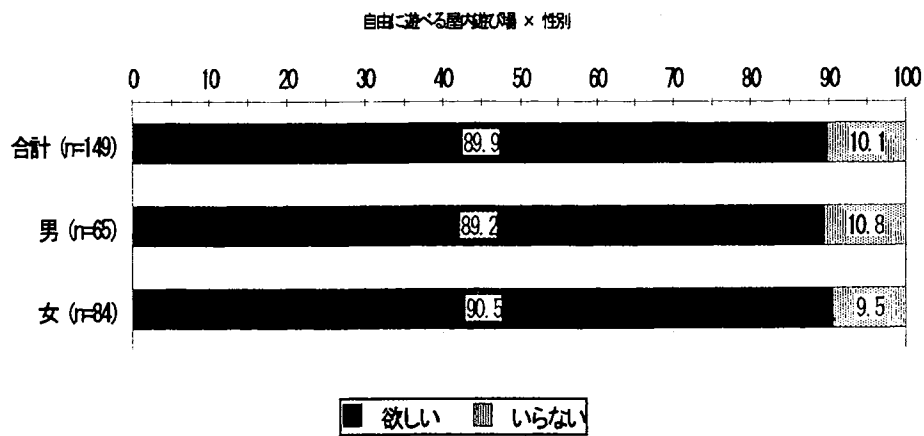


図 3 5 性別・自由な屋内遊び場

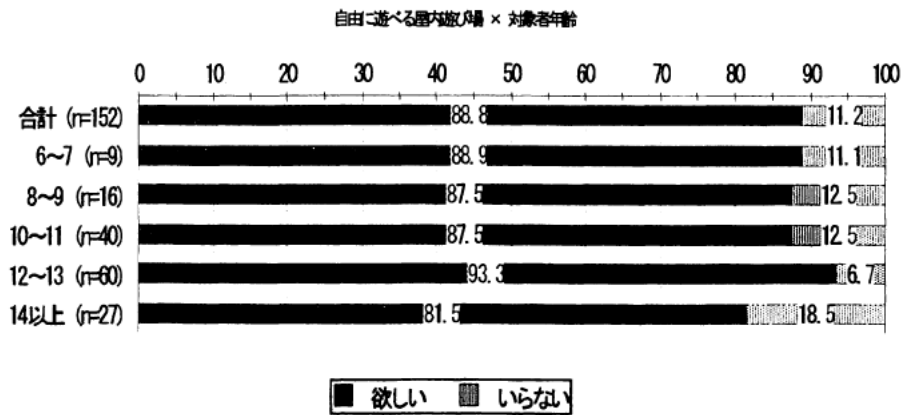


図 3 6 年齢別・自由な屋内遊び場

(6) おしゃべりできる場所

「友だちとおしゃべりできる場所」への希望は74.7%であった。特徴的であるのは女子に大変多く、男子の60.3%であるのに対し女子は84.3%を占めることである。

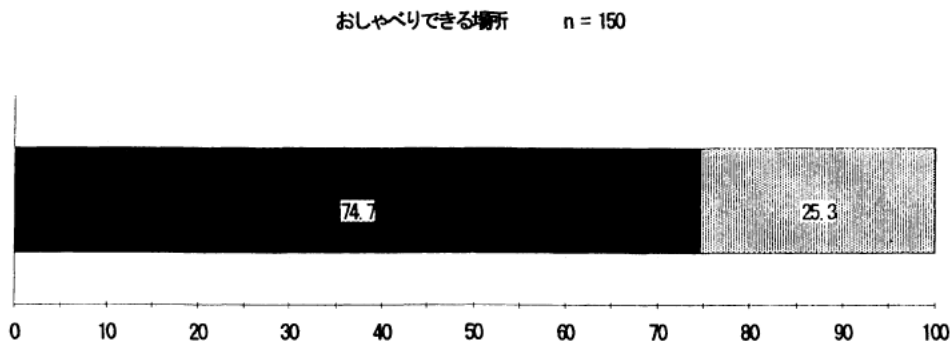


図 3 7 希望・おしゃべりできる場所

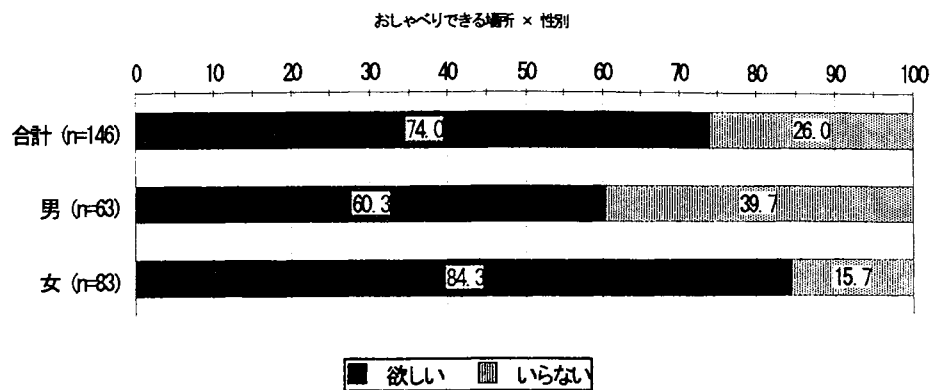
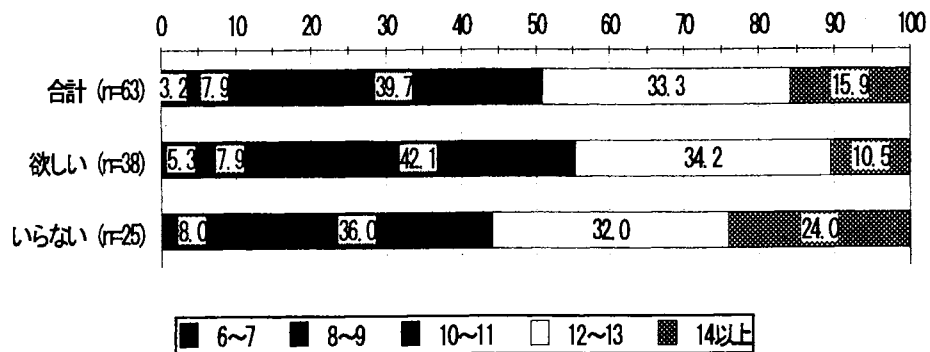
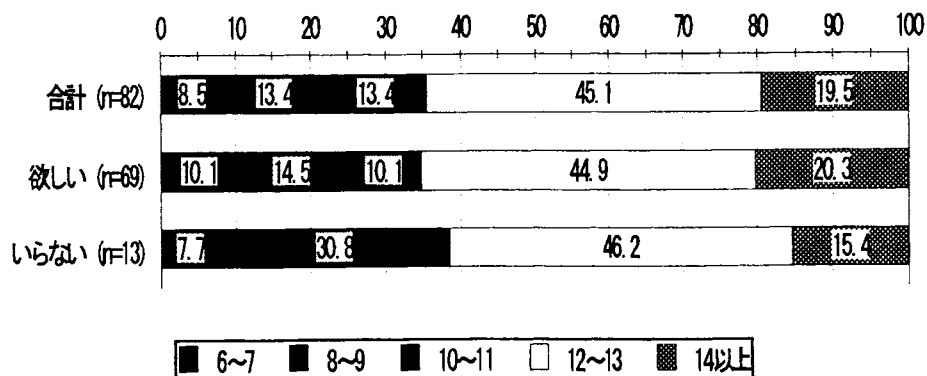


図 3 8 性別・おしゃべりできる場所

性別に違いが大きいため、性別・年齢別に分析を行った。「欲しい」と回答する者は男女とも年齢の低い層に多い。特に男子は年齢が高い場合は「いらない」とする場合が多い。女子も年齢の低い層で特に希望が多いが、年齢が高い層に希望が少ないとはいえない。



年齢 × おしゃべりできる場所(男子)



年齢 × おしゃべりできる場所 (女子)

図 3 9 性別・年齢別 おしゃべりできる場所

(7) 友だちと宿題などができる場所

「友だちと宿題などが一緒にできる場所」の希望は58.9%である。おしゃべりと比較するとかなり少なくなっており、友だちとは勉強ではなくおしゃべりなどで過ごしたいことがわかる。

性別では女子に多く、年齢別では8～9歳に多い。男子は屋外スポーツ施設などの希望が多く、屋外で体を動かして過ごす場所への希望が多いが、女子は男子に比べ、友だちとおしゃべりにしても勉強にしても、少人数で座るなどして親密な関係を築くことを望んでいる者が多いことが推察される。

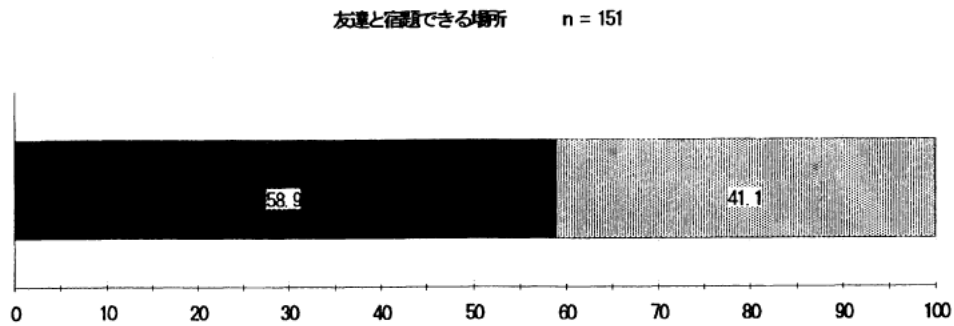


図40 希望・友達と宿題などができる場所

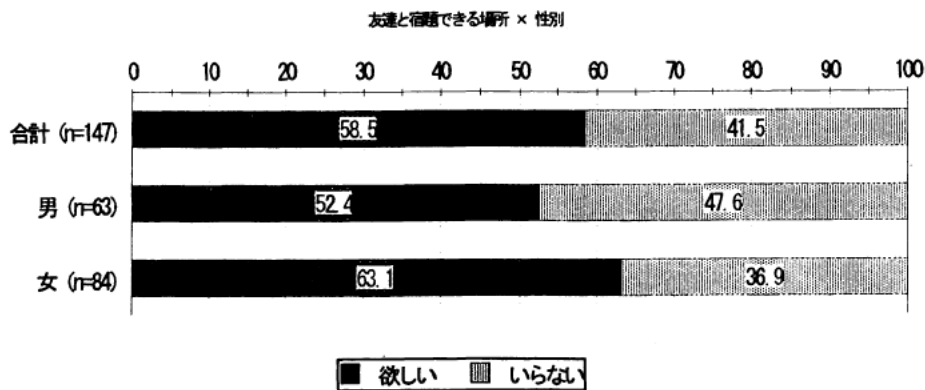


図41 性別・友達と宿題などができる場所

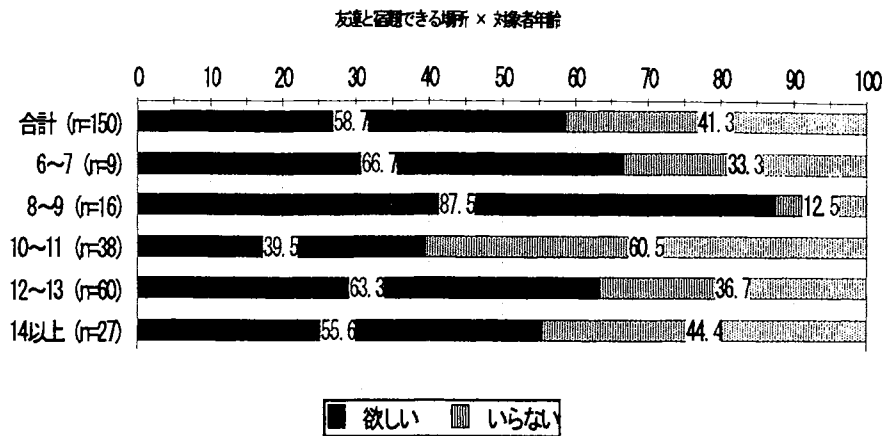


図 4 2 年齢別・友達と宿題などができる場所

(8) 勉強できる場所

「勉強できる場所」についての希望は、「友だちと宿題などができる場所」希望よりさらに少なく、48.0%である。子ども自身が勉強をしたいと思っていないのかもしれないが、子どもの個室化が進み、親も子どもの勉強環境の整備にはかなり配慮している家庭が多いことから、勉強する場所がないと感じていないこともあるだろう。

「友だちと宿題などできる場所」の希望が女子多い結果が得られたが、「勉強できる場所」の希望はやや女子に多いものの、大きな相違は見られなかった。前述のように、女子にはおしゃべりや宿題など行為はさまざまであるが、これらを媒体として友だち関係を築くことに主眼が置かれているように見受けられる。

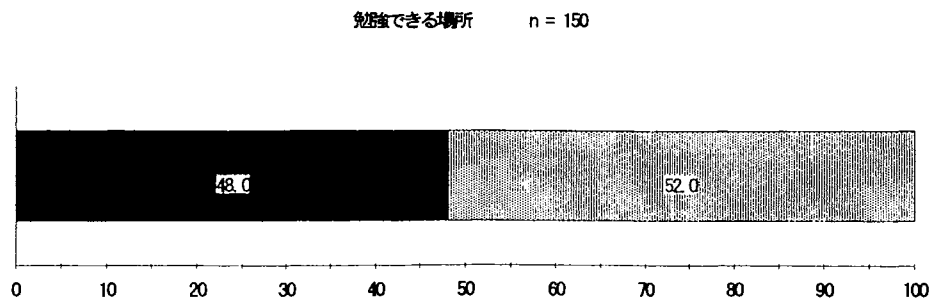


図 4 3 希望・勉強できる場所

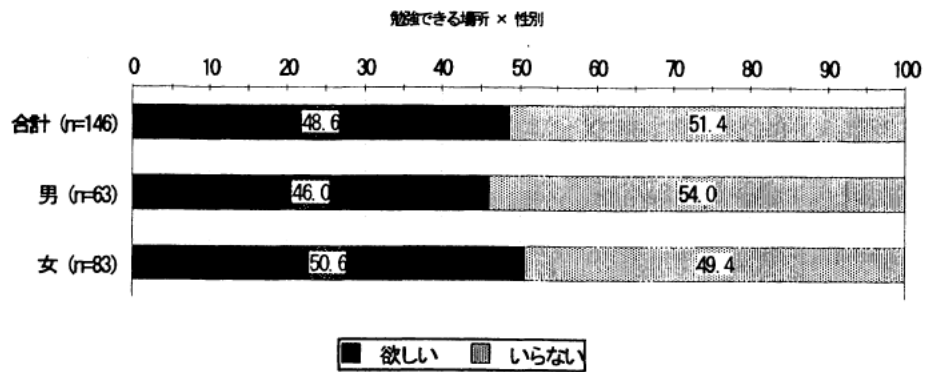


図 4 4 性別・勉強できる場所

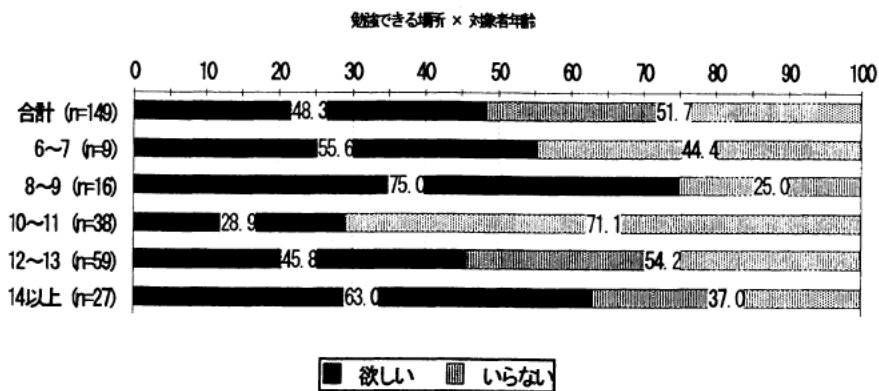


図 4 5 年齢別・勉強できる場所

(9) ひとりになれる場所

「ひとりになれる場所」の希望は最も少なく43.0%であった。前述のようにほとんどの子どもが個室を持っているため、ひとりになることは日常的に充足されているためと思われる。

女子に多く、また8~9歳に多い。「勉強できる場所」「友だちと宿題などできる場所」への希望も8~9歳に多い。その理由は調査対象者の住宅事情などに特徴があると推測されるが、本調査においては明確にできない。

一人になれる場所 n = 149

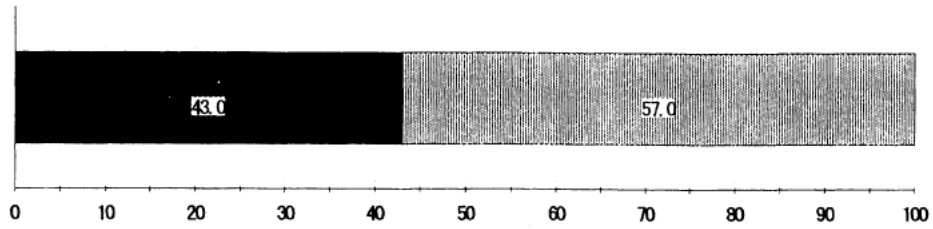


図 4 6 希望・一人になれる場所

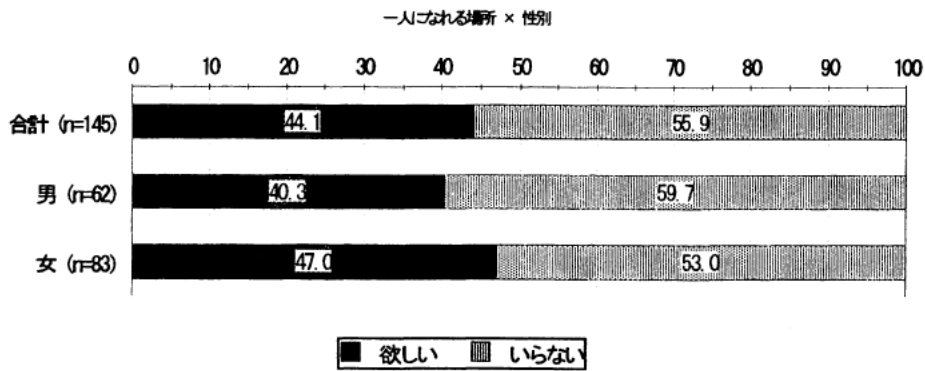


図 4 7 性別・一人になれる場所

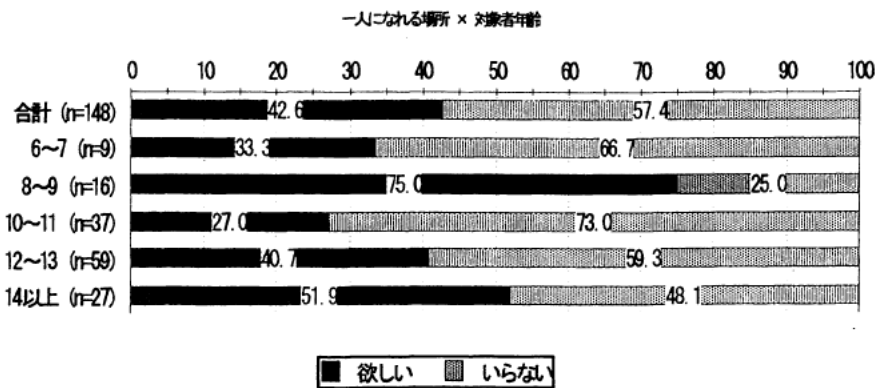


図 4 8 年齢別・一人になれる場所

(10) 楽器演奏などできる場所

「楽器を演奏したり大きい音を出すことのできる場所」への希望を調査した。住宅の密集

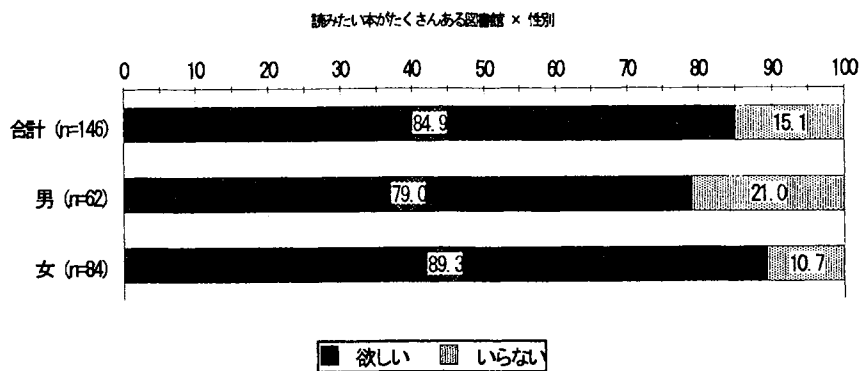


図 5 3 性別・読みたい本がたくさんある図書館

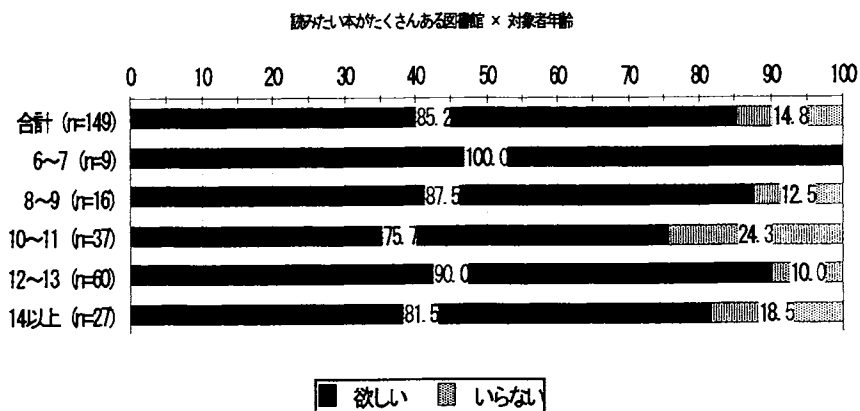


図 5 4 年齢別・読みたい本がたくさんある図書館

(12) コンピュータを自由に使える場所

「コンピュータを自由に使える場所」については比較的多い79.3%が希望した。女子に多く、また年齢の低い層に多い。年齢が高くなると、自宅や個人でパソコンを持つ者もいるためだろう。

コンピュータ自由に使える場所 n = 150

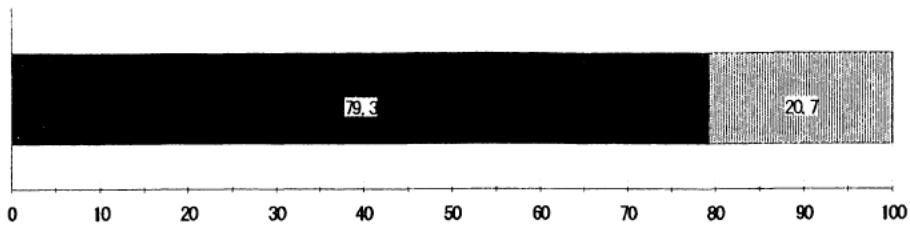


図 5 5 希望・コンピュータを自由に使える場所

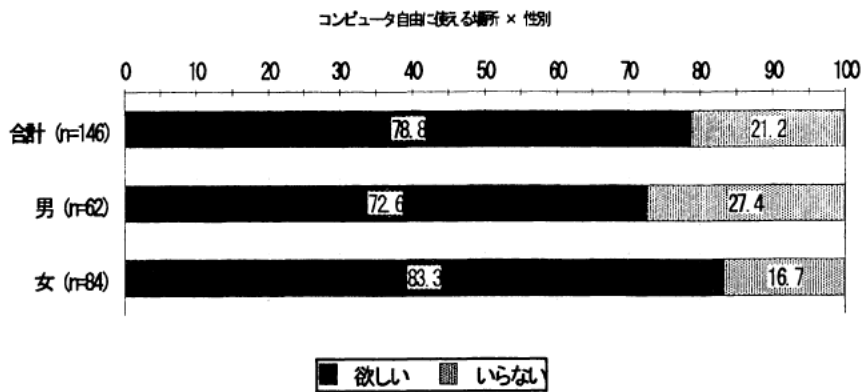


図 5 6 性別・コンピュータを自由に使える場所

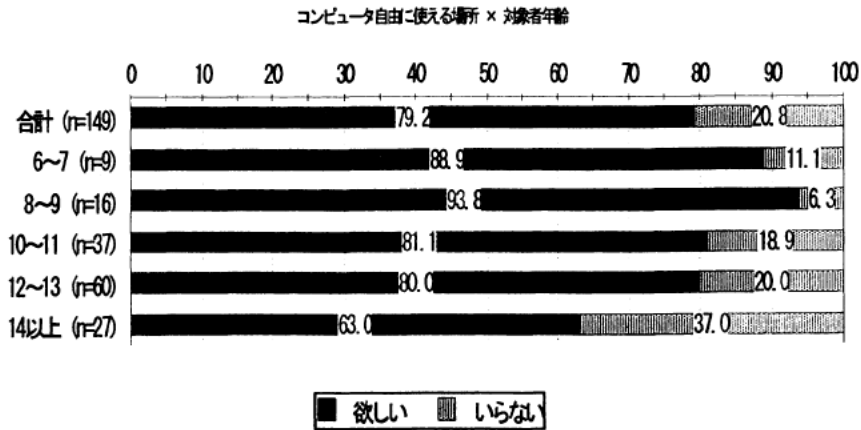


図 5 7 年齢別・コンピュータを自由に使える場所

(13) 飲食店

「飲食店（喫茶店、ファーストフード店など）」への希望は84.7%と非常に多い。性別では女子に多く、年齢層では10~11歳に少ない以外はどの層にも多い。特に12歳以上の高い年齢層で多い。ファーストフード店の希望は高いことがわかる。

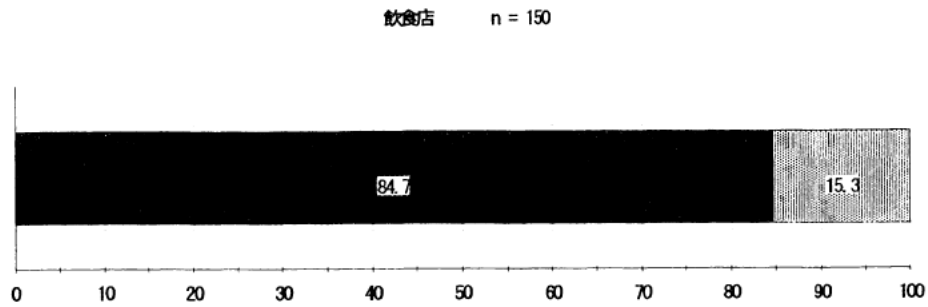


図 5 8 希望・飲食店

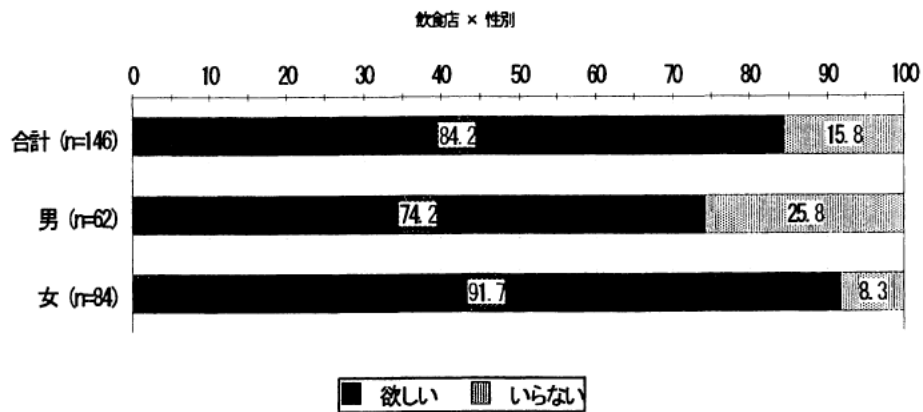


図 5 9 性別・飲食店

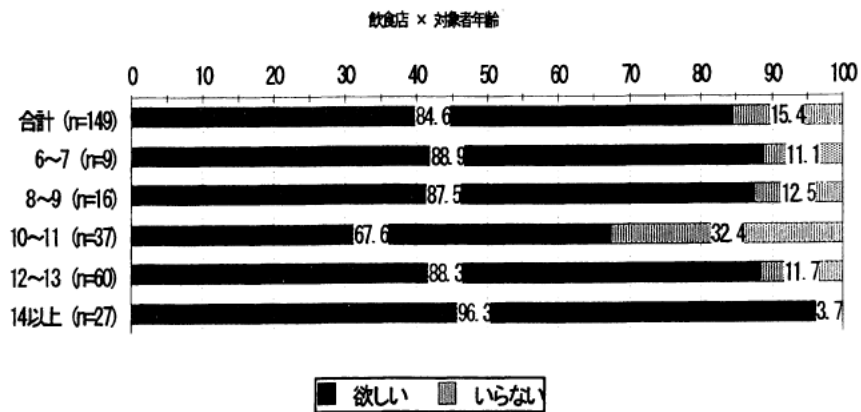


図 6 0 年齢別・飲食店

(14) その他の店舗

その他の店舗の希望は64.5%である。この質問に対して回答したのが全体の三分の二

であり、その他の三分の一は特に希望はないと考えると、希望している者の割合は42%程度となる。飲食店以外の店舗の希望は女子、年齢の低い層に多く見られた。具体的には後のその他の希望の中で述べることとする。

その他のお店 n = 104

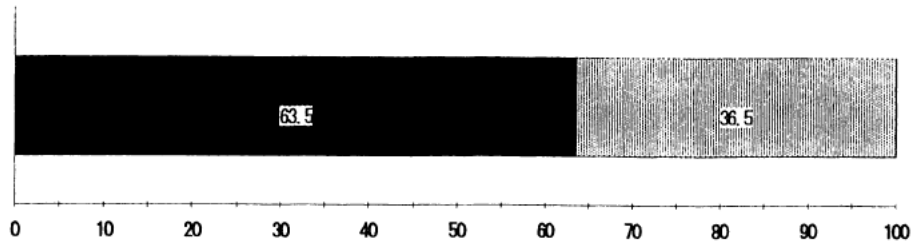


図 6 1 希望・その他の店舗

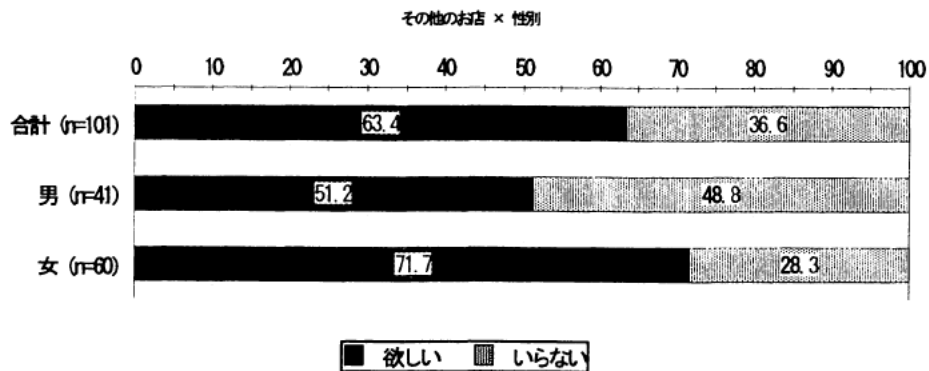


図 6 2 性別・その他の店舗

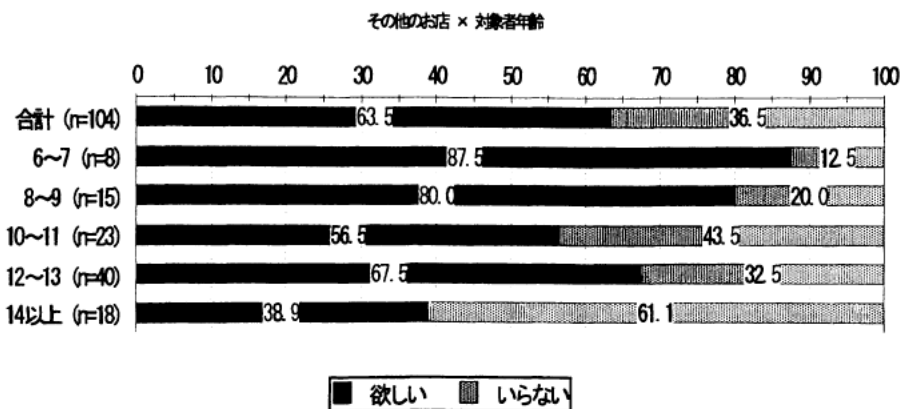


図 6 3 年齢別・その他の店舗

(15) 最も設置希望する場所・施設

前述の14種類の場所・施設に対する希望は、それぞれ「欲しい」「いらない」で回答を求めた。それぞれの結果は前述のとおりである。調査対象者の中で最も「欲しい」と回答した者の割合の高いのは「道具や場所が自由に使える屋内のスポーツ施設」であった。次いで「緑や水など自然の多い場所」「雨や雪の日でも自由に遊べる屋内の遊び場」である。その他「マンガなど読みたい本がたくさんある図書館」や「飲食店（喫茶店、ファーストフード店など）」であった。

これら14種類の場所・施設の中で、個人として欲しいと回答した場所・施設の中で最も「欲しい」場所・施設について尋ねた。その結果は以下の図のとおりである。

最も多いのは「道具や場所が自由に使える屋内のスポーツ施設」であり、やはり男子の年齢の高い層に多いことがわかる。次いで多いのは「マンガなど読みたい本がたくさんある図書館」「コンピュータを自由に使える場所」となった。「コンピュータを自由に使える場所」「マンガなど読みたい本がたくさんある図書館」ともに性別に違いは見られないが、コンピュータは年齢の低い層に多く、マンガの読める図書館は小学校高学年に多い。

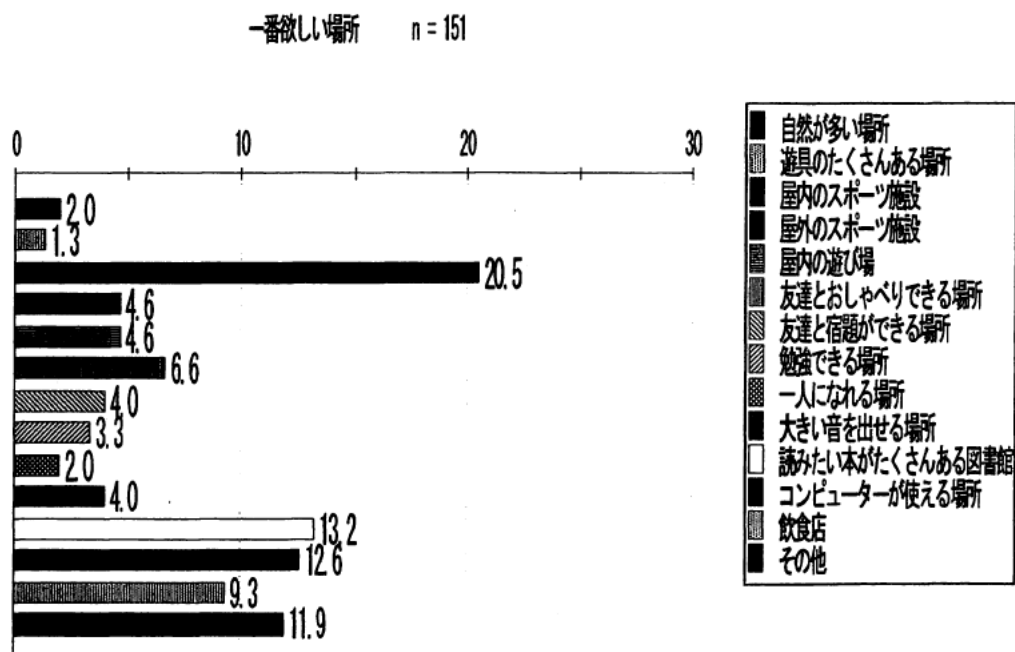


図 6 4 希望・最も欲しい場所

一番欲しい場所 × 性別

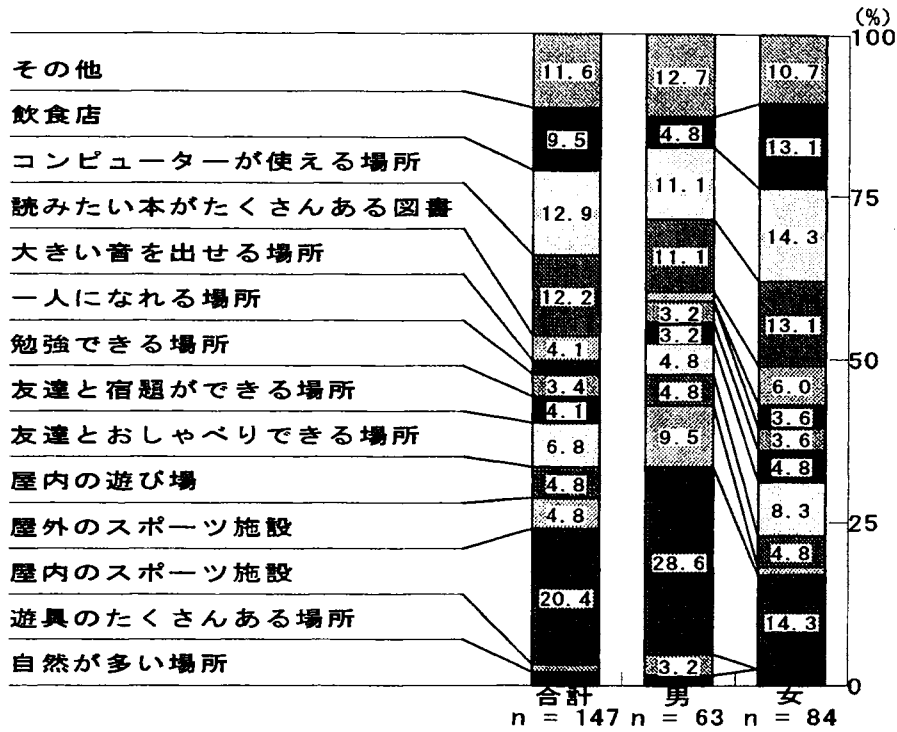


図65 性別・最も欲しい場所

一番欲しい場所 × 対象者年齢

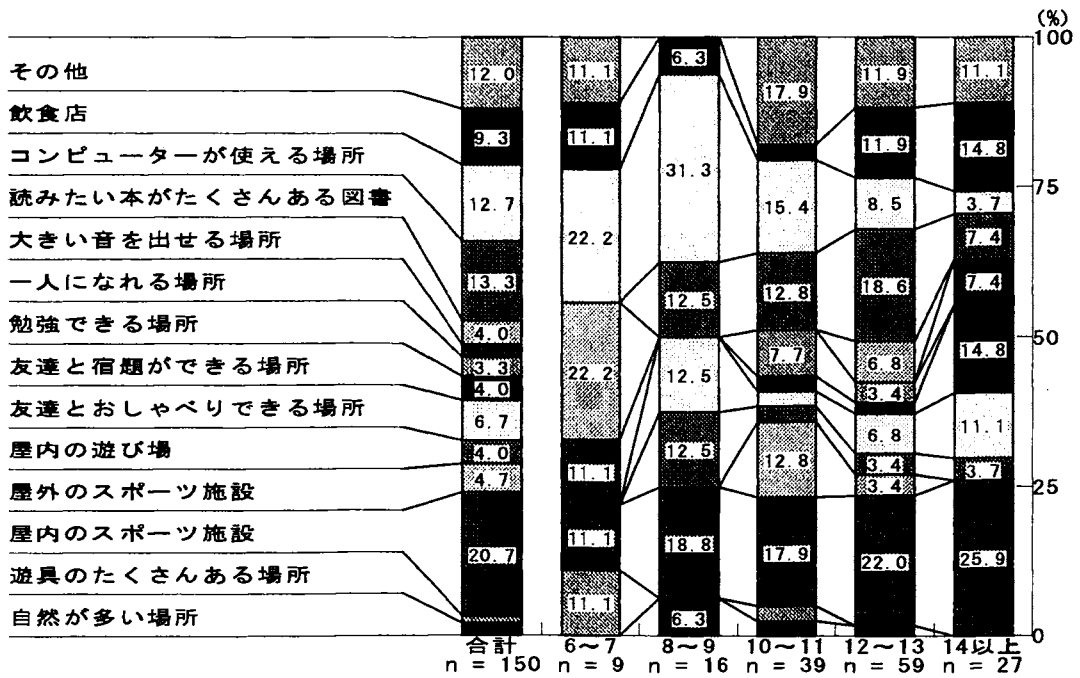


図66 年齢別・最も欲しい場所

(16) その他設置希望場所・施設

「その他近くにあったらいいと思うもの」について尋ねたところ、多数の具体的な意見が聞かれた。以下その結果である。()内はサンプル数である。

- ・大規模スーパー・デパート (4)
- ・コンビニエンスストア (10)
- ・本屋 (3)
- ・文房具店 (2)
- ・服屋 (2)
- ・飲食店 (2)
- ・まんが喫茶 (1)
- ・50円ショップ (1)
- ・スポーツ用品店 (1)

- ・ゲームセンター (6)
- ・遊園地 (5)
- ・ボーリング (2)
- ・映画館 (2)
- ・カラオケ (2)
- ・バッティングセンター (1)

- ・図書館 (4)
- ・プール・温水プール (2)
- ・体育館 (2)
- ・スポーツジム (1)
- ・野球場 (1)
- ・テニスコート (1)
- ・音楽室 (1)

- ・公園 (11)
- ・動物と触れ合える 動物園 (7)

- ・秘密の場所・小屋（6）
 - ・自由に使える室内（5）
 - ・自由に使える屋外（2）
 - ・大人のいないところ（7）
 - ・ローラースケートができるところ、平らなところ（4）
-
- ・駐輪場（2）
 - ・バス停（1）
 - ・駅（1）

コンビニエンスストアの希望が非常に多く見られた。その他本屋、文房具屋、洋服屋などさまざまな商店の希望が多い。またマンガ喫茶など、マンガの読める図書館と飲食店を合わせた形態への希望もある。

ゲームセンター、ボーリング、カラオケなどの娯楽施設も人気がある。一方、公園や動物と触れ合える動物園など自然を利用した場所への人気も高い。また、大人のいない場所や、うるさく管理する人がいない所、子どもだけで使える場所、友だちだけが入れられる部屋、秘密基地などの表現で、おとなの管理下にない場所への希望がうかがえた。

Ⅲ. 既婚女性の求める住宅平面構成

1. はじめに

女性にとっての中心市街地における居住の課題を検討する。日常生活上の問題点は多数あるが、本研究では、短期間の居住の場としてではなく、家族とともに定住できる質をもつ住宅平面計画についての示唆を得ようとしている。

戦後の近代化および高度経済成長に伴い産業構造が転換し、それまでの農家や自営業を中心とする社会からサラリーマンを中心とする社会に変わった。以前は家族とともに働いていた女性は少数派となり、専業主婦が大多数を占めるようになった。主婦であることが強い規範性をもち、子どもも2～3人いることが当然とされた。サラリーマンの夫と専業主婦の妻、2～3人子どもという画一的な形態の家族を近代家族という。近代家族は性別役割分業を当然とし、妻は家事を担当し夫は外で働く、いわば夫婦二人で一組と考えられる傾向が非常に強い。

画一化された近代家族が住む住宅もまた画一的なものとなる。いわゆるn-LDK型プランである。nとは家族人数マイナス1の数である。子どもは個室を与えられるが、夫婦は二人で一部屋と計算される。先に述べた規範に加え、夫婦は深い愛情で結ばれ同じ寝室で寝るべきだとの規範により、夫婦寝室が当然のものとして定着していった。

近代家族は子ども中心主義である。住宅においても子どもの場所を重視する。狭い住宅事情の中で、子ども部屋を優先して確保するため、夫婦が別の部屋を持つことは空間的にも困難である。

しかし、家族の形態は多様化し変化してきた。婚姻率は70年代の初めから急激に低下し、離婚率も上がっている。このように、一生、あるいはかなりの期間、子どもや配偶者のない人が増えている。つまり、近代家族の概念とは異なる家族形態が増加し、また血縁関係ではない多様な住み方、生き方を選択する者も増えているのが現状である。この生き方は、夫婦で一組という考え方ではなく、個人志向の考え方と言えるだろう。しかし、住宅平面はその高度化・多様化に対して根本的にはほとんど対応してきていないと思われる。供給される住宅平面は相変わらずn-LDK型である。このような現状の中で、近代家族の規範どおりに住んでいるのかといえば、そうではない。

筆者は、昭和54年から昭和60年にかけて、近畿圏における11の分譲集合住宅における住まい方調査を実施した*。この調査において、以下のような結果が得られてい

る。

どの住宅でも、またどの住戸タイプでも一定割合（10～20%）の夫婦別室就寝世帯が存在する。これは、居住者の潜在的な要求であると考えられる。

夫婦別就寝の形態には大きく2種類ある。一つは主に長子6歳以下の若い世帯で見られる、乳幼児の夜鳴き・授乳のための「夫」「妻と子」の別就寝で、一時避難的別就寝である。二つ目には主に長子が中高生以上のライフステージで見られる「夫」「妻」の別就寝であり、部屋数が多くなるとその割合も高くなる。別就寝世帯の34～46%は「夫婦の就寝・起床時刻があわないのでお互い別の方が快適」との理由による。また、「夫婦はそれぞれ独立した部屋を持つべきである」という積極的別就寝要求は20%みられる。さらに「部屋数に余裕があるため、自分の持ち物のある部屋を自分の部屋とした」「なんとなく」という理由も個室要求の表れとみることができる。

以上のように、n-LDK型平面と、現実の住まい方とは食い違いが見られる。特に中心市街地においては、郊外立地のニュータウンに居住するいわゆる標準的な志向の家族とは異なり、多様な家族形態や志向の家族の存在が予想される。そこで本研究では、住宅平面の主流であるn-LDK型住宅における「夫婦寝室」に焦点を当て、中心市街地に居住する家族にとって、要求に合ったものであるか、新しい要求の芽生えなどについて検討する基礎的な資料としたい。

* 「集合住宅居住世帯の住要求に関する研究」山岸雅子 奈良女子大学大学院人間文化研究科 博士論文 1987

2. 調査概要

- ①調査対象者 : 中心市街地および周辺に居住する同居する夫婦。中心市街地を対象に調査実施したが、一部中心市街地周辺地域も含まれる。
- ②調査方法 : 調査票留置法による。本研究では、女性（妻）の意見聴取を目的としているが、夫婦寝室の一方の使用者である男性（夫）に対する意見聴取も必要と考えられるため、アンケート用紙は妻用と夫用の二部を用意し、それぞれ本人に記入を依頼した。
- ④配布・回収数 : 妻用アンケートは、配布200票、回収164票。夫用アンケートは、配布200票、回収159票。妻と夫の両方から回収できた各159票、合計318票を有効票とした。

3. 調査対象者の属性<同室就寝夫婦>

本調査対象者318人、159組の夫婦のうち、同室就寝夫婦は126組、79.2%、別就寝夫婦は33組、20.8%となった。前述の筆者による近畿分譲集合住宅居住世帯における調査結果と、同程度あるいはそれ以上の割合の別就寝世帯がみられた。

ここでは本調査における同室就寝夫婦の夫婦126組に関する調査結果について述べる。

(1) 年齢

妻の平均年齢は44歳で45～49歳が最も多く、20.6%（26人）を占める。夫の平均年齢は42.3歳で50～59歳が最も多く、37%（44人）であった。妻と夫の年齢の関係を見ると、ほとんどの夫婦が同年代同士の結婚である。

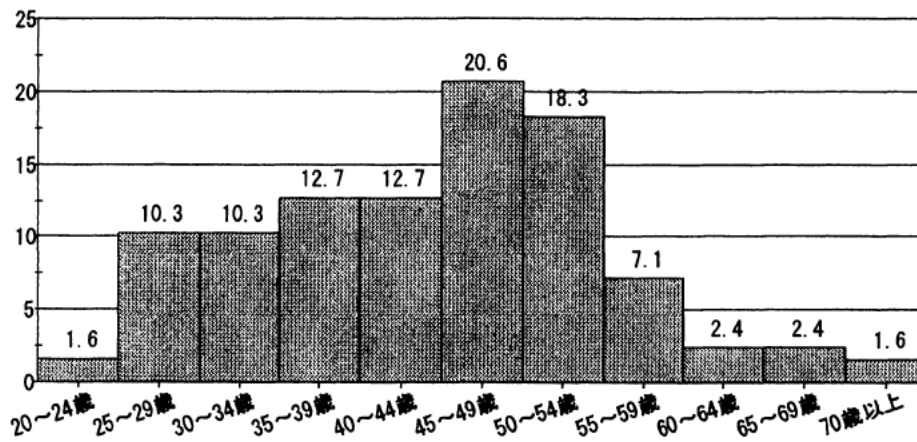


図1 妻の年齢<同室就寝夫婦> (n = 126)

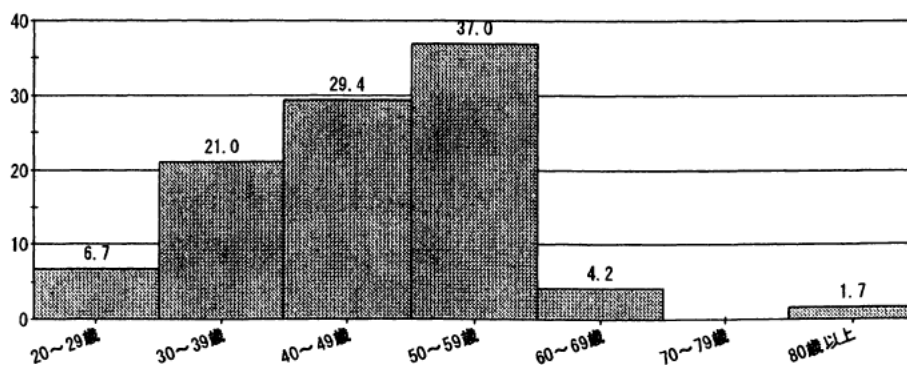


図2 夫の年齢<同室就寝夫婦> (n = 119)

(2) 職業

妻の職業は「専門職・技術職」が最も多く27.2% (34人)、次いで「専業主婦」が21.6% (27人) %、「パートタイム」19.2%、「会社員」15.2%である。夫の職業は「会社員」が最も多く43.7% (52人) を占め、次いで「管理職」16.0% (19人) である。

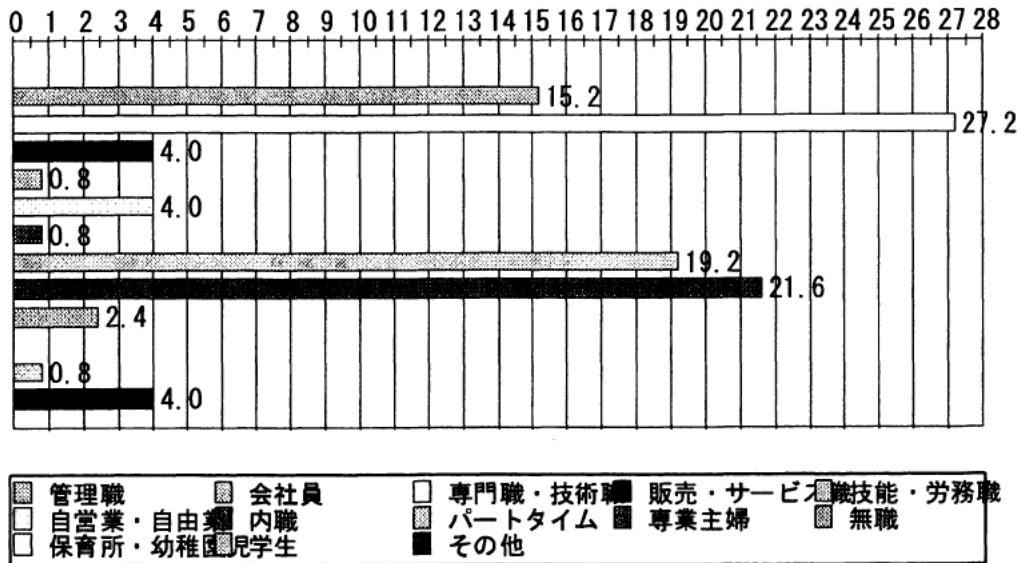


図3 妻の職業<同室就寝夫婦> (n = 125)

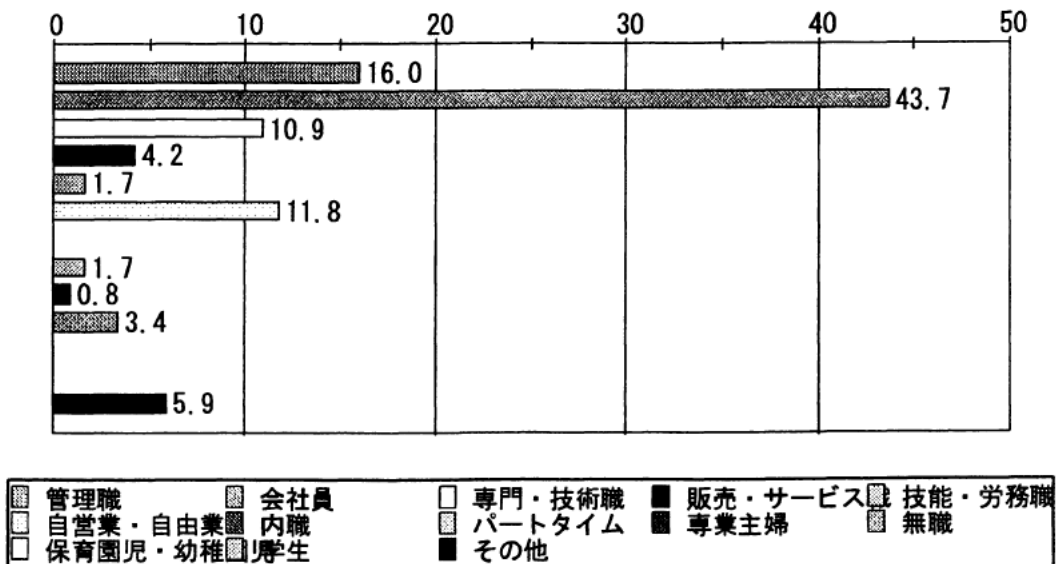


図4 夫の職業<同室就寝夫婦> (n = 119)

(3) 家族構成

同居家族人数は4人が最も多く37.8%（45世帯）を占める。次いで3人の20.2%（24世帯）である。平均同居家族人数は4人である。

同居している子ども数は2人が最も多く33.6%（40世帯）、次いで1人が31.1%（37世帯）である。同居の子どもがない世帯が21.8%（26世帯）を占める。

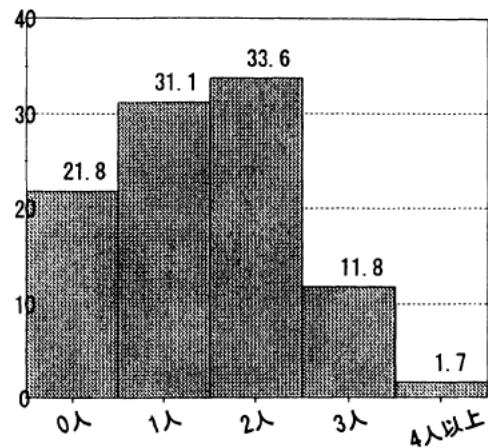
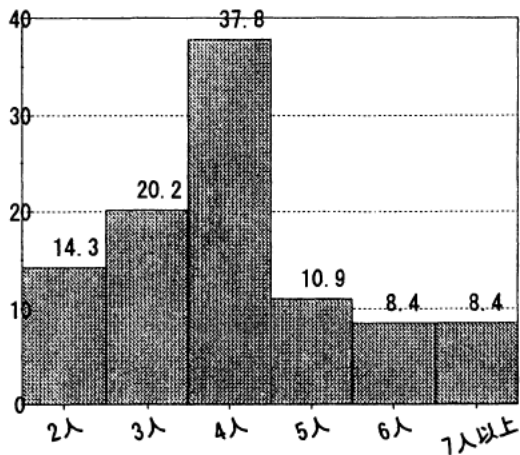


図5 同居家族人員数<同室就寝夫婦>

(n = 119)

図6 同居の子ども数<同室就寝夫婦>

(n = 119)

同居の長子年齢は20～24歳が最も多く24.7%（23世帯）、次いで15～19歳が15.1%（14世帯）である。同居の末子年齢は0～4歳が最も多く22.6%（21世帯）、次いで20～24歳と10～14歳が多く、それぞれ18.3%（17世帯）を占めている。

父母との同居については、どちらとも同居していない夫婦が多く63.9%（76世帯）を占める。両親と同居、母親のみ同居の夫婦がそれぞれ16.8%（20世帯）となる。孫と同居しているのは5世帯で4%である。

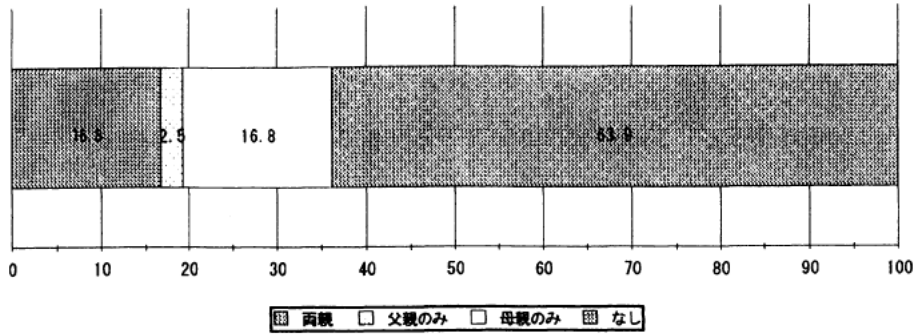


図7 父母との同居<同室就寝夫婦> (n=119)

(4) 住宅形態

独立住宅に居住する世帯が圧倒的に多く90.5% (114世帯) を占める。その他、アパートが7.9% (10世帯)、マンションが1.6% (2世帯) であった。

アパート居住世帯は妻が20～39歳までの比較的若い世代に多く、25～29歳で42% (4世帯) である。

(5) 延べ床面積

延べ床面積は、40～45坪が最も多く36世帯で28.6%を占める。次いで20～39坪が21世帯で16.7%、60～79坪が15.2%となる。独立住宅居住世帯が90%を超え、比較的延べ床面積が大きい。

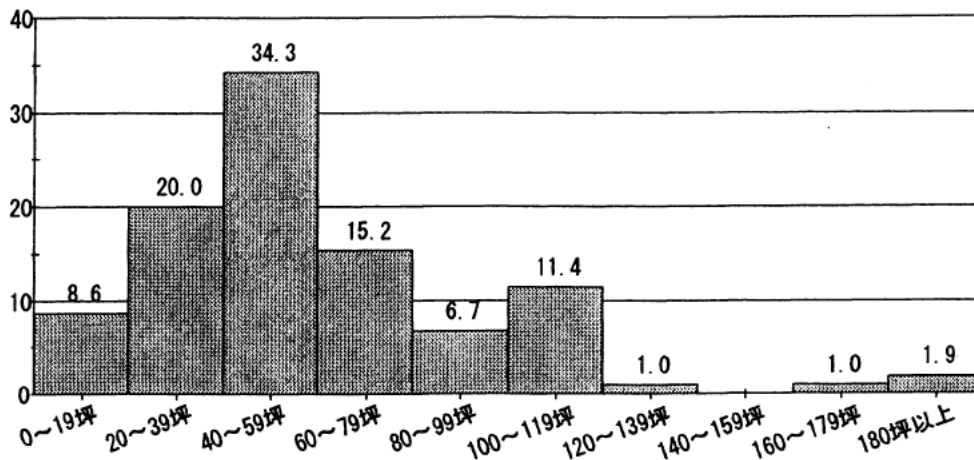


図8 延べ床面積<同室就寝夫婦> (n=105)

4. 寝室の状況<同室就寝夫婦>

妻の個室、夫の個室、夫婦の個室を持っているかについて調査したところ、妻の個室は7.4% (9人)、夫の個室は24.4% (30人) が持っていると回答した。また、夫婦の個室については82.6% (100人) である。

夫婦寝室面積は、8～9畳の世帯が35.2% (43世帯)、10～11畳が25.4% である。夫婦寝室の平均面積は収納スペースを含めて9.6畳となった。

妻の個室と夫の個室の有無については、夫が個室を持ち妻も個室を持つ夫婦は28組 21.4% である。妻のみが個室を持つ夫婦は2.2% と非常に少ない。妻に個室がある世帯は夫も個室を持つ場合が圧倒的に多い。

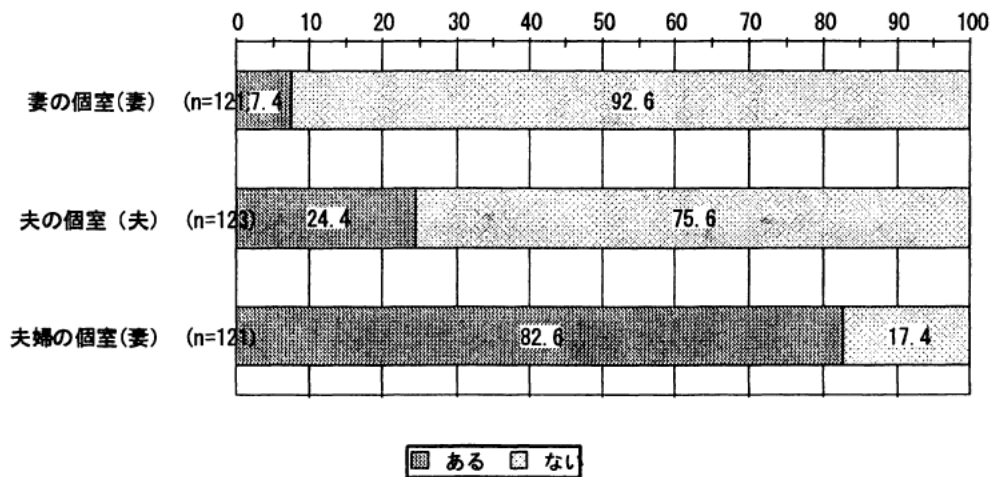


図9 個室の状況<同室就寝夫婦>

* (妻) は妻の回答、(夫) は夫の回答を表す

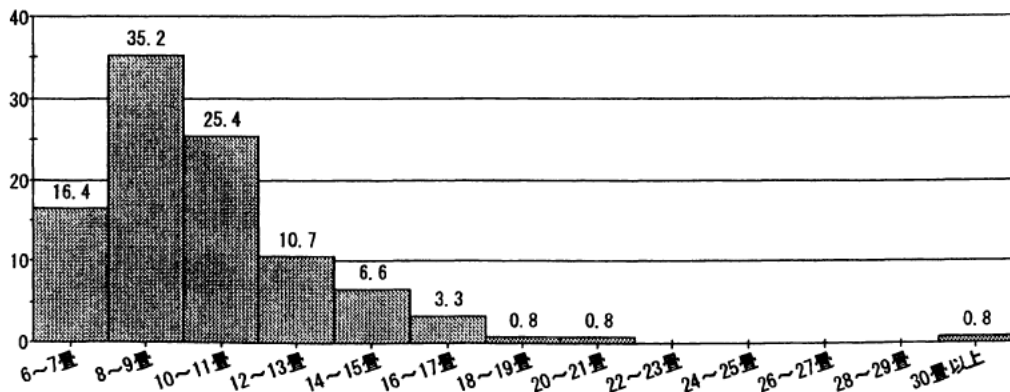


図10 夫婦寝室の広さ<同室就寝夫婦> (n=122)

子どもの個室が「ある」世帯が73%（89世帯）、「ない」世帯は10.7%（13世帯）、子どもが「いない」世帯は16.4%（20世帯）であった。

妻の個室がある世帯で子どもの個室がない世帯はなく、妻が個室を持っている場合子どもも個室を持つ。妻の個室がない世帯で子どもの個室があるのは72.1%（80世帯）である。妻の個室より子どもの個室が優先されて確保されていると言える。

夫の個室がある世帯で、子どもの個室がない世帯は7.1%（2世帯）となった。夫の個室があるのに子どもの個室がない世帯もある。

以上のことから、子どもの個室、夫の個室、妻の個室の順で優先順位あることがわかる。

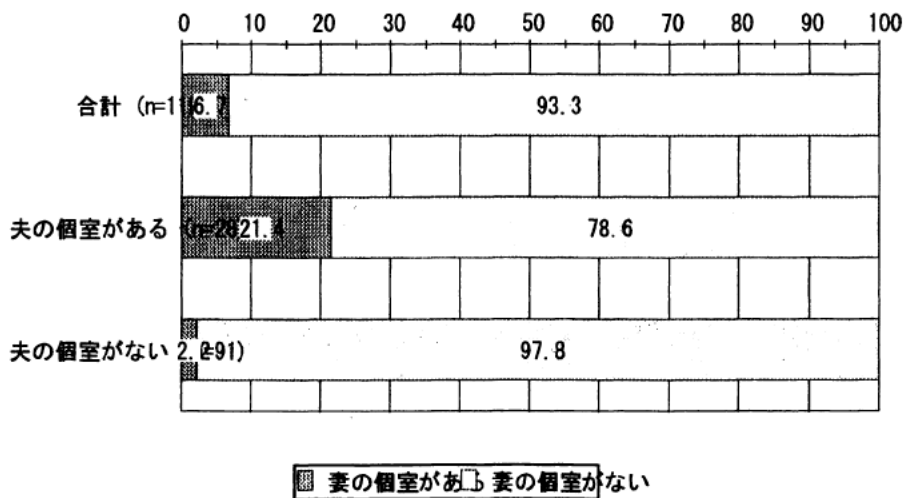


図11 夫の個室の有無と妻の個室の有無<同室就寝夫婦>

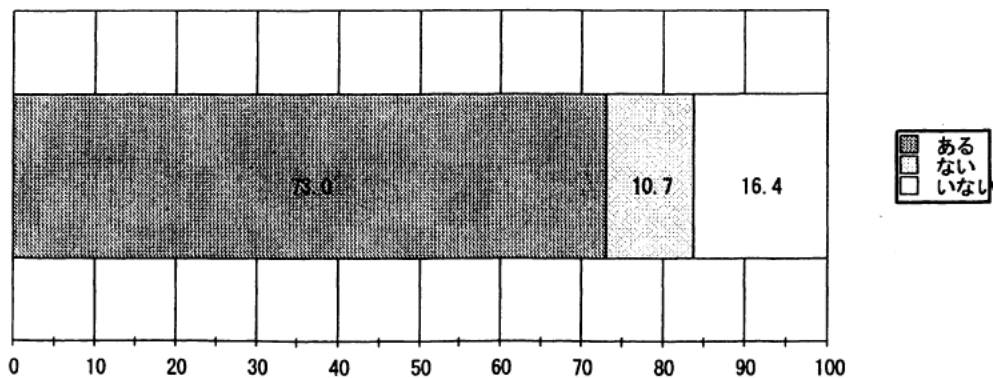


図12 子ども部屋について<同室就寝夫婦> (n=122)

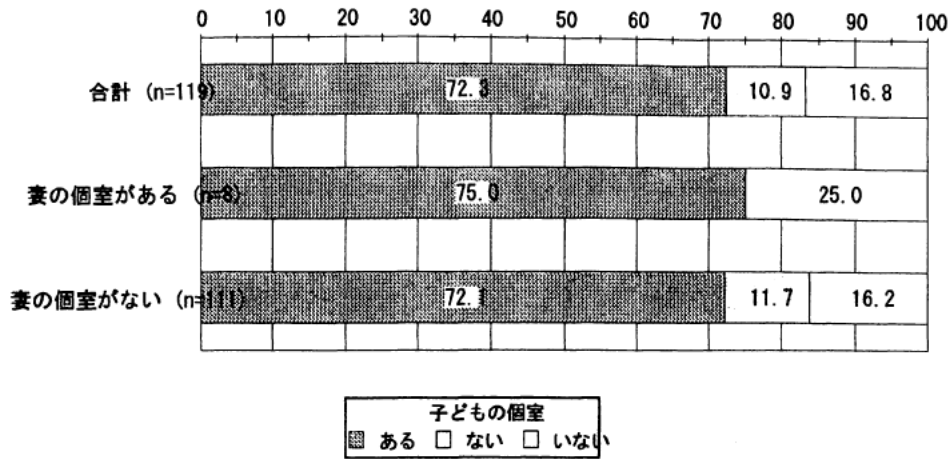


図13 妻の個室と子どもの個室との関係<同室就寝夫婦>

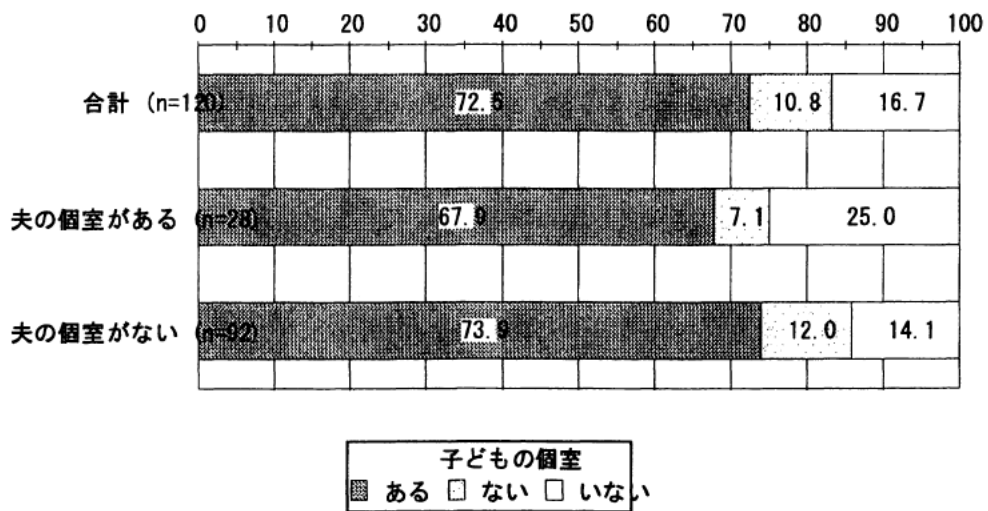


図14 夫の個室と子どもの個室との関係<同室就寝夫婦>

5. 日常生活における意識<同室就寝夫婦>

(1) 平日自宅で過ごす時間

平日、自宅で過ごす時間は、妻は12～16時間が最も多く56.8%（71人）で、夫は8～12時間で56%（70人）である。自宅でほとんどの時間を過ごすことになる20～24時間と回答した者が、妻は15.2%（19人）、夫では1.6%（2人）である。自宅にほとんどいないことになる8時間未満と回答した妻は0.8%（1人）、夫は5.6%（7人）であった。妻は年齢が高い方が自宅で過ごす時間が長い傾向がみられ、60歳以上は半数がほぼ一日中自宅にいる。夫は、20～29歳はやや自宅で過ごす時間が長い、全体として年齢が高い方が自宅にいる時間は長くなる傾向がみられる。

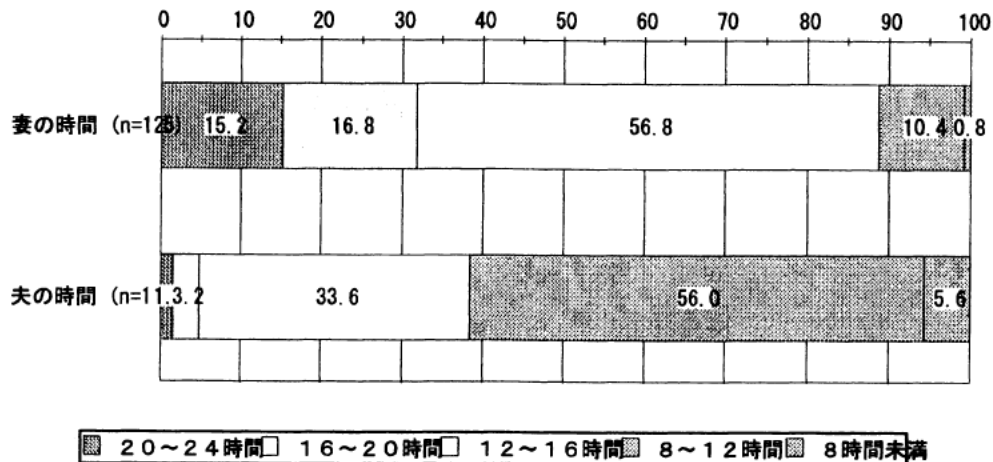


図15 平日自宅で過ごす時間<同室就寝夫婦>

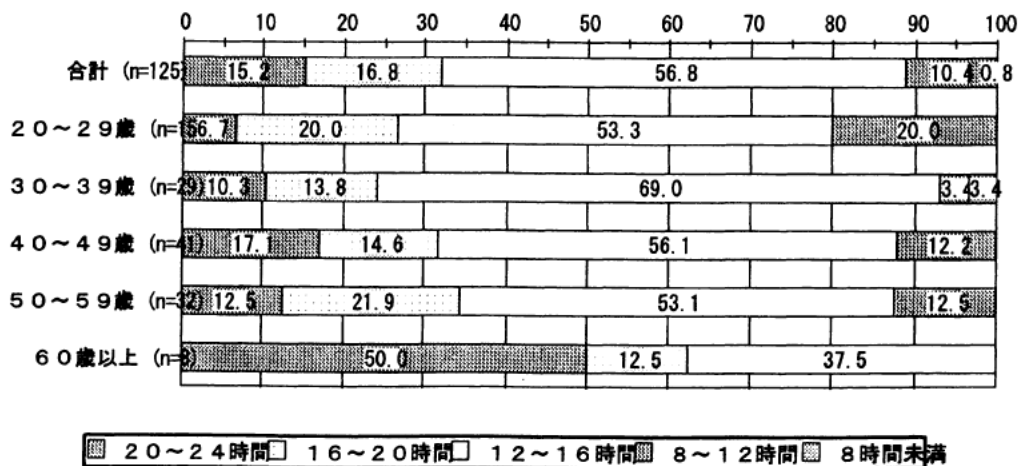


図16 妻の年齢と平日自宅で過ごす時間<同室就寝夫婦>

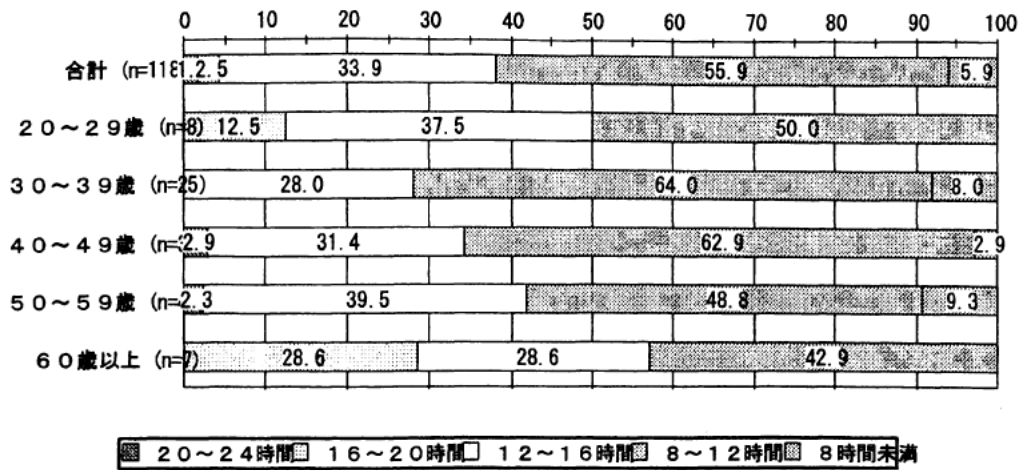


図17 夫の年齢と平日自宅で過ごす時間<同室就寝夫婦>

妻の職業を、フルタイム、パートタイム、専業主婦（無職）、その他に分類し、自宅で過ごす時間をみたところ、フルタイムの70.3%（45人）が12~16時間、パートタイムの58.3%（14人）が12~16時間と回答している。専業主婦は55%以上が20~24時間と回答し、フルタイム、パートタイムに比べ、専業主婦は圧倒的に自宅にいる時間が長い。

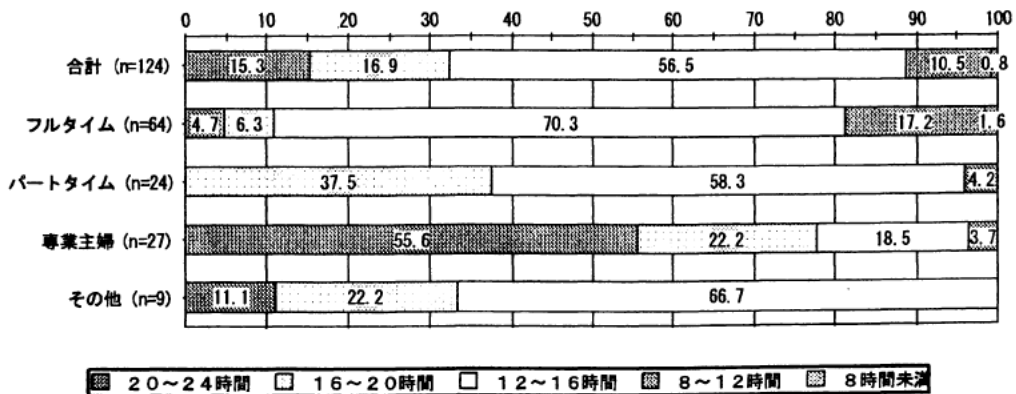


図18 妻の職業と自宅で過ごす時間との関係<同室就寝夫婦>

(2) 大切にしたい時間

夫婦同室就寝126世帯中、子どもを持つ世帯は102世帯である。子どもを持つ夫婦に対して、次に挙げる4項目のうち最も大切にしたいものについて、1項目選択式で

尋ねた。選択肢は「1人の時間」「子どもとの時間」「夫婦の時間」「家族みんなの時間」である。

「家族みんなの時間」を最も大切にしたいと回答した者が、妻と夫ともに5割を超え、以下「夫婦の時間」、「1人の時間」、「子どもとの時間」の順となり、妻と夫はほぼ同様の傾向が見られた。

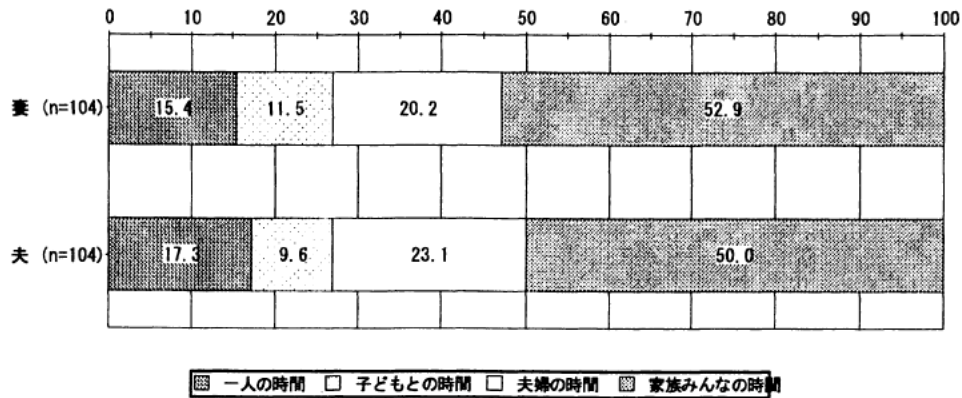


図19 大切にしたい時間<同室就寝夫婦>

結婚暦との関係を見ると、妻と夫ともに結婚後25年以上経過した者で「子どもとの時間」を最も大切であると回答する者がいない。「夫婦の時間」が最も大切とする者が、結婚暦0～4年で妻3割、夫5割を占めるが、結婚暦5～19年で急激に減少し、20年以上経過すると再び増加する。子どもが成長・独立した時期に、再び夫婦の時間を大切にしようとするのであろう。

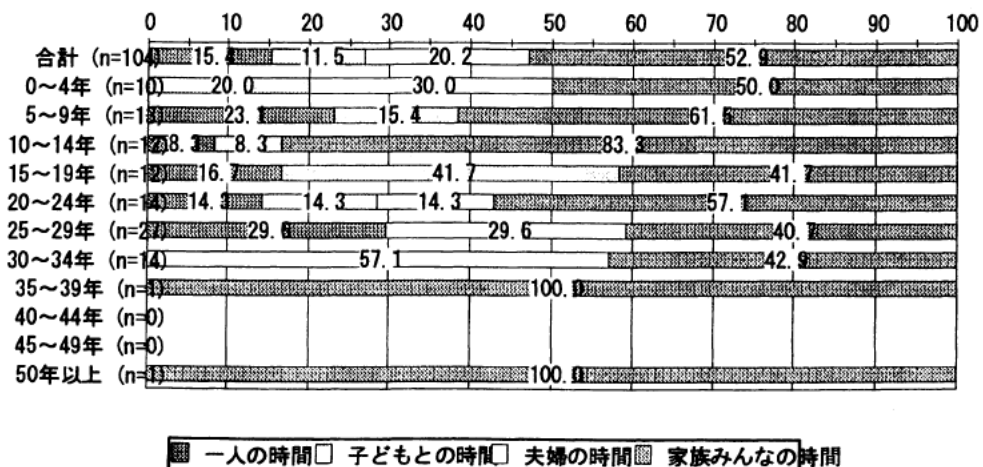


図20 子ども+夫婦の結婚暦と妻の大切にしたい時間<同室就寝夫婦>

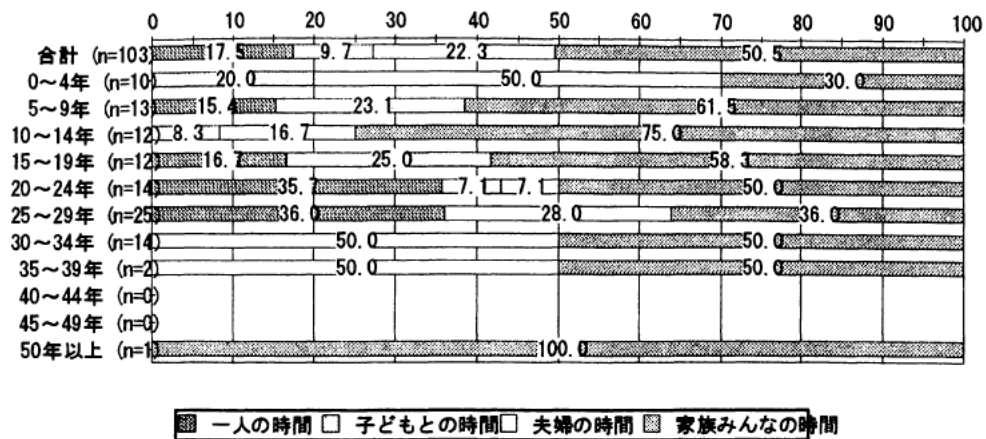


図 2 1 子ども+夫婦の結婚暦と夫の大切にしたい時間<同室就寝夫婦>

子どものいない夫婦は126世帯中20世帯である。その夫婦の最も大切にしたい時間は、妻、夫ともに「夫婦の時間」で、妻60%、夫55%である。子どものいる夫婦では「夫婦の時間」が2割程度であるのに対し、子どものいない夫婦ではその割合が半数を超えている。また、妻よりも夫のほうが一人の時間を大切にしたいと考える人が多い。結婚暦や、自宅で過ごす時間との関係は、対象人数が少ないこともあり、あまり違いは見られない。

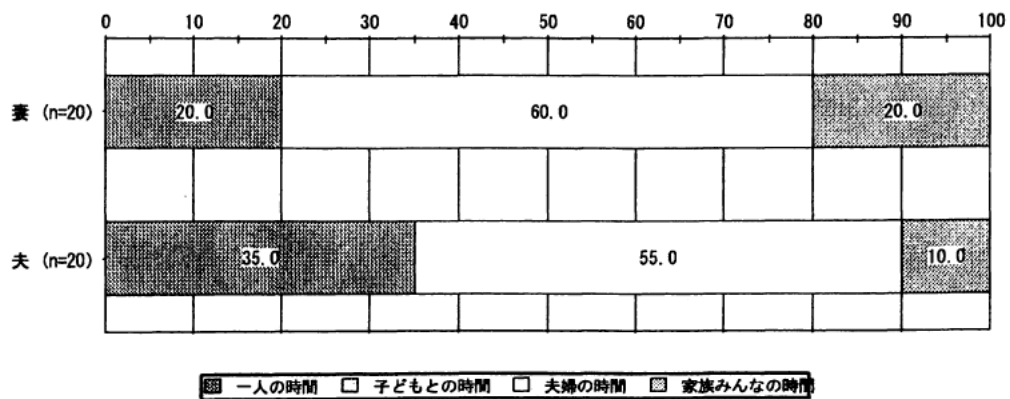


図 2 2 子どものいない夫婦の大切な時間<同室就寝夫婦>

(3) 夫婦寝室に対する考え方

「夫婦ならば、同じ部屋で寝るのが当然である」という考え方について調査を行った。

選択肢は以下の中から一つを選択する方法である。「その通りだと思うし、同じ部屋で寝たい」（以下「その通りで同じ部屋で寝たい」）、「その通りだと思うが、別々な部屋で寝たいと思うこともある」（以下「その通りだが別でもいい」）、「当然だとは思わないが、自分は同じ部屋で寝たい」（以下「当然ではないが同じ部屋で寝たい」）、「当然だとは思わないし、別々な部屋で寝たいと思うことがある」（以下「当然ではないし別でもいい」）。

その結果、妻は「その通りで同じ部屋で寝たい」「その通りだが別でもいい」「当然ではないが同じ部屋で寝たい」がそれぞれ29.8%（36人）であった。夫は「その通りで同じ部屋で寝たい」が56.9%（70人）で半数以上を占めた。夫の方がより「夫婦は同じ部屋で寝るのは当然だ」と考えていることがわかる。また、妻の「当然ではないが同じ部屋で寝たい」と回答した割合が夫より高く、妻の方がより社会規範にかかわらず、自分の意志で同室就寝している者が多いのであろう。

妻と夫ともに、「当然だとは思わない」者に年齢の比較的若い層の割合が高い。夫は「その通りで同じ部屋で寝たい」と回答する者のうち50～59歳が5割を占める。このことから、年齢が高い方が夫婦同室就寝を当然と考えている傾向があると言える。

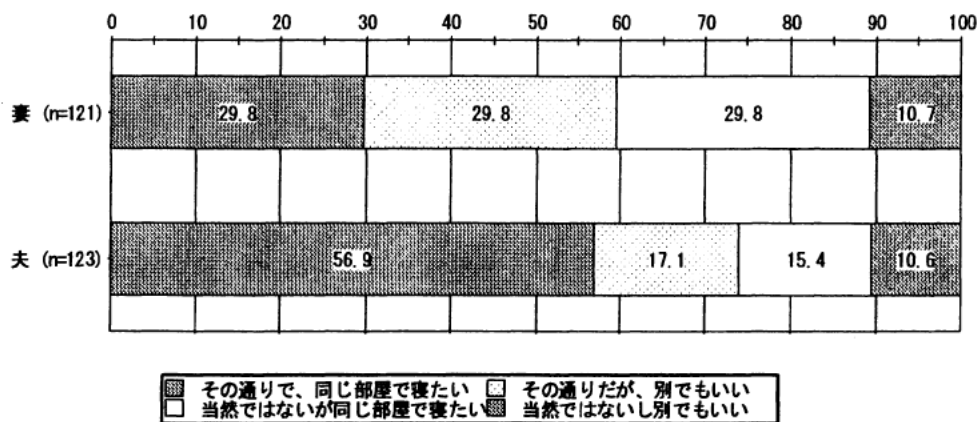


図 2 3 夫婦同室就寝は当然<同室就寝夫婦>

(4) 家事は女性の仕事か

夫婦同室就寝は当然と考えている者が少なからずあることがわかったが、夫婦寝室以外でも、同様に社会規範と関係するのかを検討する。社会規範の例として「結婚したら女性は男性よりも家事をするのは当然か」を取り上げ、この質問に対し、「当然だ」と「当然ではない」のうち、一つを選択する方法により探った。

その結果、「当然だ」が妻56.2%（68人）、夫57.7%（71人）となった。

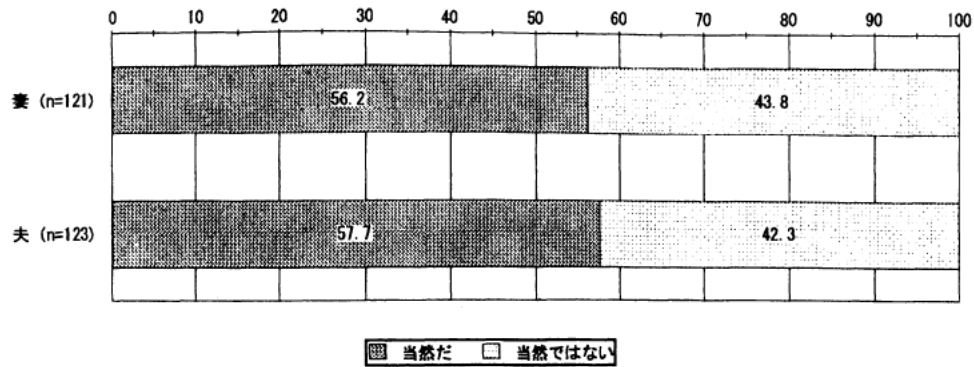


図24 女性は男性よりも家事をするのは当然か<同室就寝夫婦>

妻はこの質問に対して「当然だ」と回答した者が、50～59歳で69%、60歳で62.5%と多くなり、40～49歳の間で半数以下になるが、年齢層による顕著に相違は見られず、全体として55%程度である。

夫は20～29歳の若い年齢層で「当然ではない」が75%（6人）となり、年齢が高くなるほど「当然だ」と感じる者が多い。

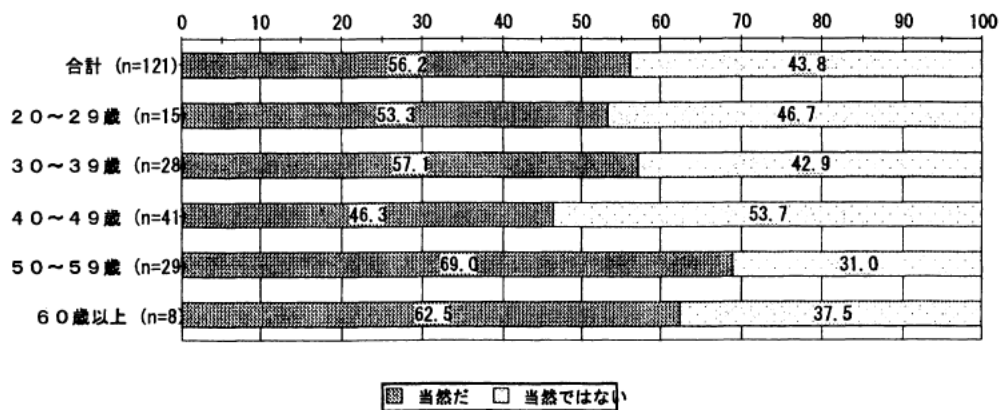


図25 妻の年齢と女性が家事をするのは当然<同室就寝夫婦>

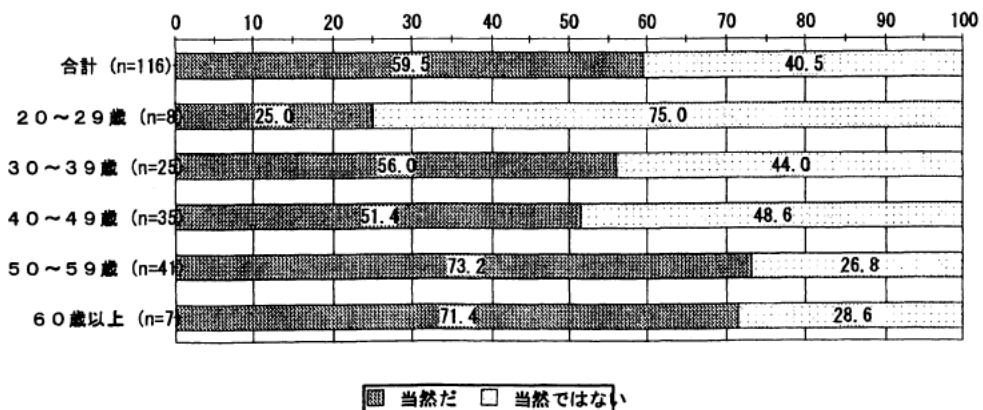


図26 夫の年齢と女性が家事をするのは当然<同室就寝夫婦>

(5) プライバシーの必要性

夫婦間のプライバシー意識について調査した。「夫婦間でもプライバシーは必要だと思うか」との質問に対し、次のような結果となった。

妻は「まあまあそう思う」が39.2%（49人）で最も多く、次いで「そう思う」が34.4%（43人）である。夫は「そう思う」が43.1%（53人）で最も多く、次いで「まあまあそう思う」が38.2%（47人）である。また「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」と回答した割合は夫より妻の方が高い。夫婦間のプライバシーの必要性は夫の方がより感じており、妻は夫婦一心同体という考え方の者が多いといえる。

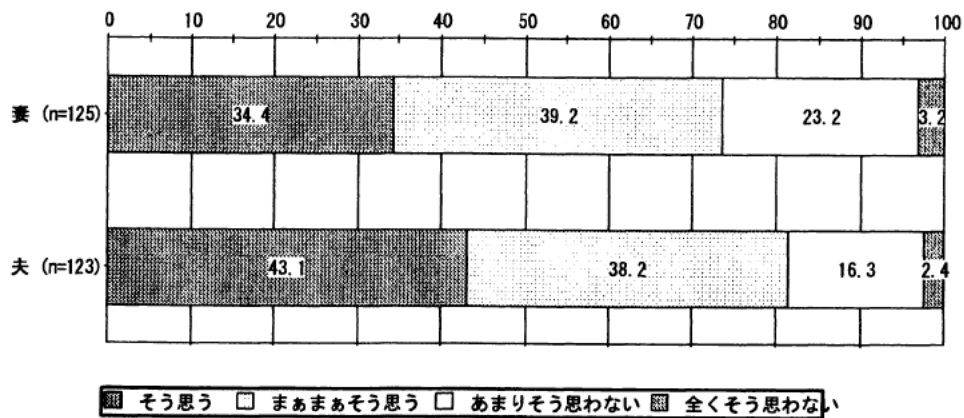


図27 夫婦間でもプライバシーは必要か<同室就寝夫婦>

6. 夫婦寝室の実態<同室就寝夫婦>

(1) スペースの使い方

夫婦寝室のスペースの使い方の実態について調査した。選択肢は「部屋全体が夫婦共同の空間」「夫用スペースだけある」「妻用スペースだけある」「夫婦それぞれのスペースがある」で、これらの中から最も実態に近いものを選択させた。

妻と夫ともに「部屋全体が夫婦共同の空間」との回答が8割を超え、夫婦寝室は専用スペースをとらず共同で使用している夫婦がほとんどである。

妻は「妻用のスペースだけある」と回答する者が3.3%(4人)、「夫用のスペースだけある」と回答する者が7.4%(9人)となり、夫用のスペースだけあると感じている者が若干多い。逆に夫では、「夫用のスペースだけある」との回答が4.8%(6人)、「妻用のスペースだけある」が7.3%(9人)となり、妻用のスペースだけあると感じている者が若干多い。このことから、相手のスペースが確保されているのに、自分のスペースはないと感じている傾向が見られる。

妻が「部屋全体が夫婦共同の空間」と感じ、夫も同じ回答をした夫婦は86組ある。妻が「部屋全体が夫婦共同の空間」と回答しているが、夫が「夫婦それぞれのスペースがある」とした夫婦が7.1%(7組)、妻が「夫用のスペースだけがある」と回答し、夫が「部屋全体が夫婦共同の空間」とした夫婦が44.4%(4組)と、夫婦寝室のスペースの使い方に対する認識が異なる夫婦が119組中25組存在する。

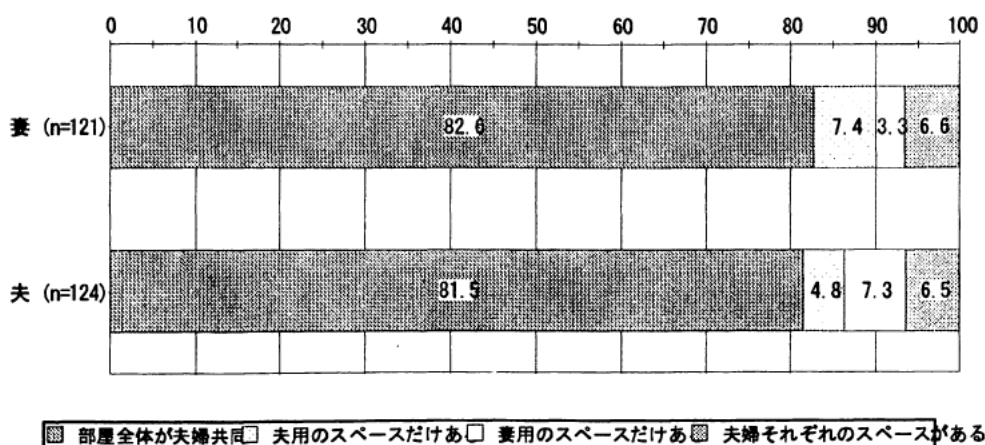


図28 夫婦寝室のスペースの使い方<同室就寝夫婦>

表1 スペースの使い方について夫婦の認識<同室就寝夫婦>

上段:度数 下段:%		夫婦寝室のスペース (夫)				
		合計	部屋全体が夫婦共同	妻用のスペースだけある	夫用のスペースだけある	夫婦それぞれのスペースがある
夫婦寝室のスペース(妻)	合計	119 100.0	98 82.4	5 4.2	8 6.7	8 6.7
	部屋全体が夫婦共同	98 100.0	86 87.8	2 2.0	3 3.1	7 7.1
	夫用のスペースだけある	9 100.0	4 44.4	-	5 55.6	-
	妻用のスペースだけある	4 100.0	2 50.0	2 50.0	-	-
	夫婦それぞれのスペースがある	8 100.0	6 75.0	1 12.5	-	1 12.5

(2) 夫婦寝室の使用目的

夫婦寝室の使用目的について調査した。選択肢は次のようである。「夫婦で会話をする」「1人で趣味を楽しむ」「夫婦で趣味を楽しむ」「1人で仕事をする」「1人でくつろぐ」「夫婦でくつろぐ」「1人で育児をする」「夫婦で育児をする」「その他」(複数回答可)。

「夫婦で会話をする」が最も多く、妻51.4%(56人)、夫45.8%(54人)である。次いで「夫婦でくつろぐ」が妻35.8%(39人)、夫39.8%(47人)となり、夫婦寝室では夫婦二人で過ごすことが多い。

「一人でくつろぐ」は妻23.9%、夫20.3%、「一人で趣味を楽しむ」は妻17.4%、夫15.3%、「1人で仕事をする」夫11%と、夫婦寝室において夫・妻一人で過ごすことも比較的多いことがわかる。「その他」では「寝る以外何もしない」が最も多く妻と夫合わせて20人、他には、「テレビを見る」、「子どもと遊ぶ」などである。

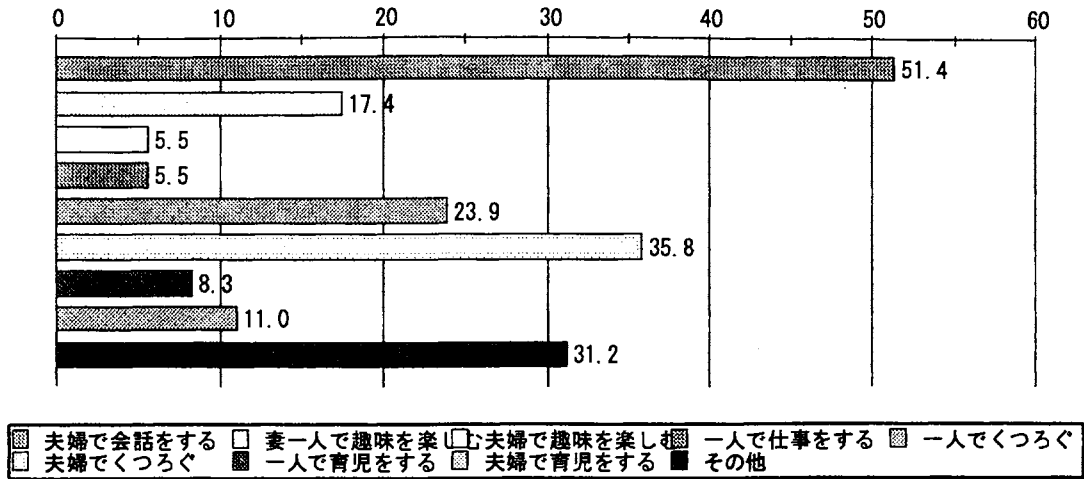


図 2 9 妻の寝室の使用目的 (複数回答可) <同室就寝夫婦> (n = 1 0 9)

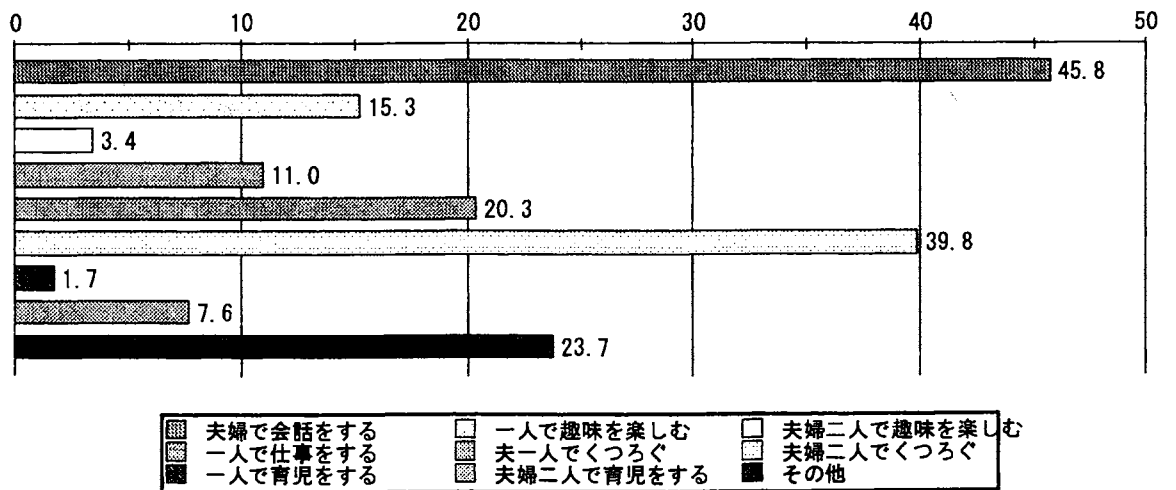


図 3 0 夫の寝室の使用目的<同室就寝夫婦> (複数回答可) (n = 1 1 8)

個室の有無との関係を見ると、個室を持っている妻は個室を持たない妻と比較し、夫婦寝室で「一人で趣味を楽しむ」「一人でくつろぐ」の割合が少なく、「一人で仕事をする」を選択していない。また、個室を持たない妻では「一人で仕事をする」と回答した者が6.2% (6人) いる。個室を持つ妻は個室で趣味や仕事などをし、この目的のために夫婦寝室を使用していない。

表2 妻の個室の有無と夫婦寝室の使用目的<同室就寝夫婦>

上段:度数 下段:%		夫婦寝室の使用目的(妻)									
		合計	夫婦で会話を する	妻一人で 趣味を楽 しむ	夫婦で趣 味を楽し む	一人で仕 事をする	一人でく つろぐ	夫婦でく つろぐ	一人で育 児をする	夫婦で育 児をする	その他
妻の個室(妻)	合計	105 100.0	56 53.3	17 16.2	5 4.8	6 5.7	25 23.8	39 37.1	9 8.6	12 11.4	33 31.4
	妻の個室がある	8 100.0	5 62.5	1 12.5	1 12.5	-	1 12.5	2 25.0	-	-	4 50.0
	妻の個室がない	97 100.0	51 52.6	16 16.5	4 4.1	6 6.2	24 24.7	37 38.1	9 9.3	12 12.4	29 29.9

個室を持つ夫は、個室を持たない夫に比べ、「1人で仕事をする」「1人でくつろぐ」の割合が高くなっていることから、妻とは逆に、個室で1人になる時間が作れるのに、夫婦寝室で過ごすことが多い。

表3 夫の個室の有無と夫婦寝室の使用目的<同室就寝夫婦>

上段:度数 下段:%		夫婦寝室の使用目的(夫)									
		合計	夫婦で会話を する	一人で趣 味を楽し む	夫婦二人 で趣味を 楽しむ	一人で仕 事をする	夫一人で くつろぐ	夫婦二人 でくつろ ぐ	一人で育 児をする	夫婦二人 で育児を する	その他
夫の個室(夫)	合計	115 100.0	54 47.0	18 15.7	4 3.5	13 11.3	23 20.0	44 38.3	2 1.7	9 7.8	28 24.3
	夫の個室がある	28 100.0	14 50.0	4 14.3	-	5 17.9	8 28.6	10 35.7	-	-	5 17.9
	夫の個室がない	87 100.0	40 46.0	14 16.1	4 4.6	8 9.2	15 17.2	34 39.1	2 2.3	9 10.3	23 26.4

7. 夫婦寝室の理想の形態<同室就寝夫婦>

(1) 夫婦同室の理想の形態

同室就寝している夫婦に対して、同室就寝の場合の理想の寝室について尋ねた。「部屋全体が夫婦共同」「二つに仕切られ、互いの様子は良く見えるがそれぞれのスペースがある」「二つに仕切られ、互いの様子が見えない部分もあり、それぞれのスペースがある」「時と場合に応じて、二つの部屋に分けられる」「夫婦同室はどうしても嫌」の中から一つを選択する方法とした。

妻、夫ともに「部屋全体が夫婦共同」が多く、妻70.4%（88人）、夫83.2%（104人）である。「夫婦同室はどうしても嫌」と回答する者は妻と夫ともなかった。

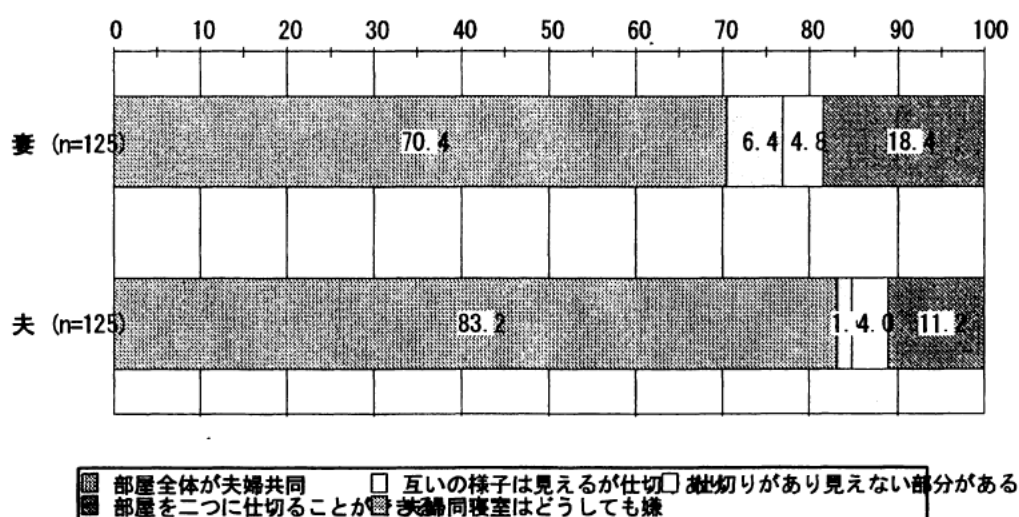


図 3 1 夫婦同寝室の理想の形態<同室就寝夫婦>

妻と夫ともに20～29歳の若年層と、50歳以上の高齢層に「部屋全体が夫婦共同」と回答する割合が高い。30～39歳、40～49歳の層は他の年齢層に比べて「部屋全体が夫婦共同」と回答する割合が低い。

プライバシーの必要性和、夫婦同寝室の理想との関係を見たところ、プライバシーの必要性を感じていない妻全て（あまり思わない+全く思わない）が「部屋全体が夫婦共同」と回答した。夫は妻に比べ、プライバシーの必要性を感じていても、部屋全体が夫婦共同の夫婦寝室を望んでいる。夫婦寝室の理想はプライバシーに対する意識と関係するが、夫にはその傾向があまり見られないといえる。

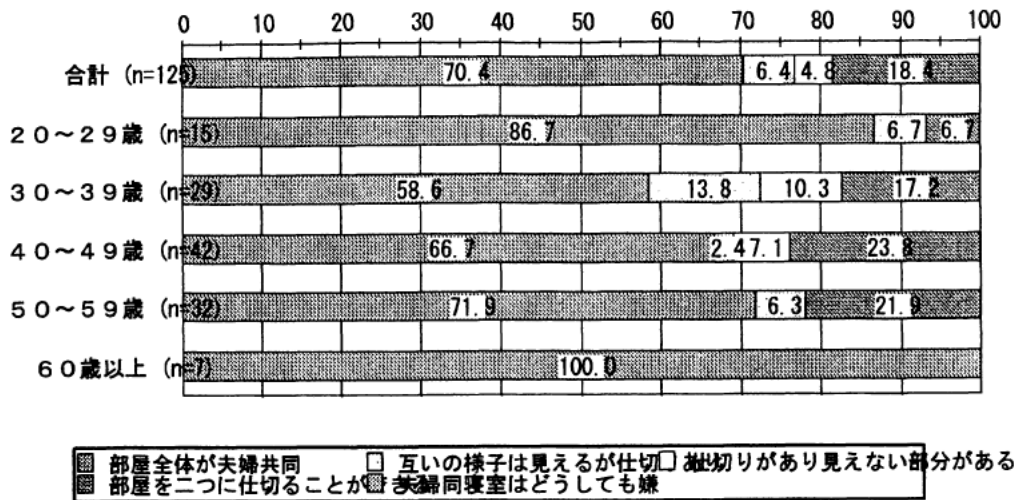


図32 妻の年齢と同室寝室の理想<同室就寝夫婦>

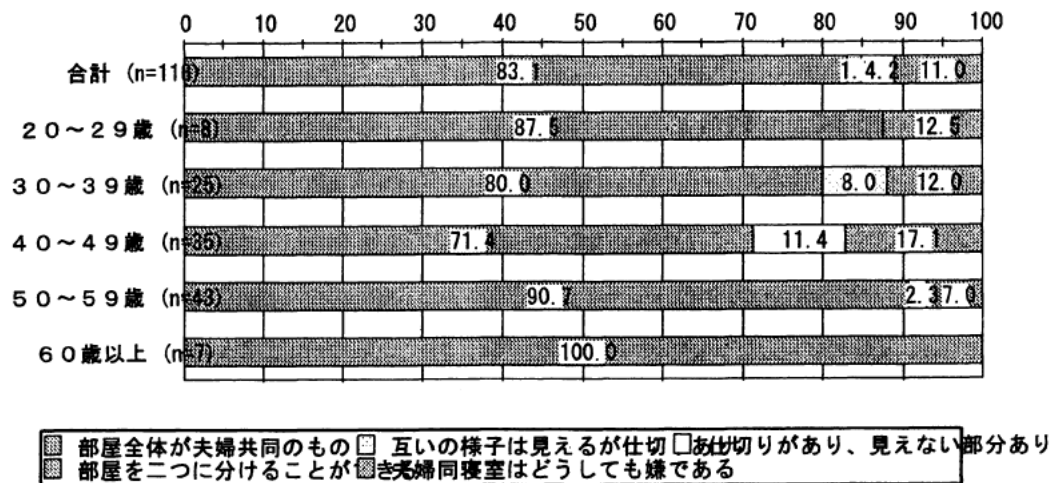


図33 夫の年齢と同室寝室の理想<同室就寝夫婦>

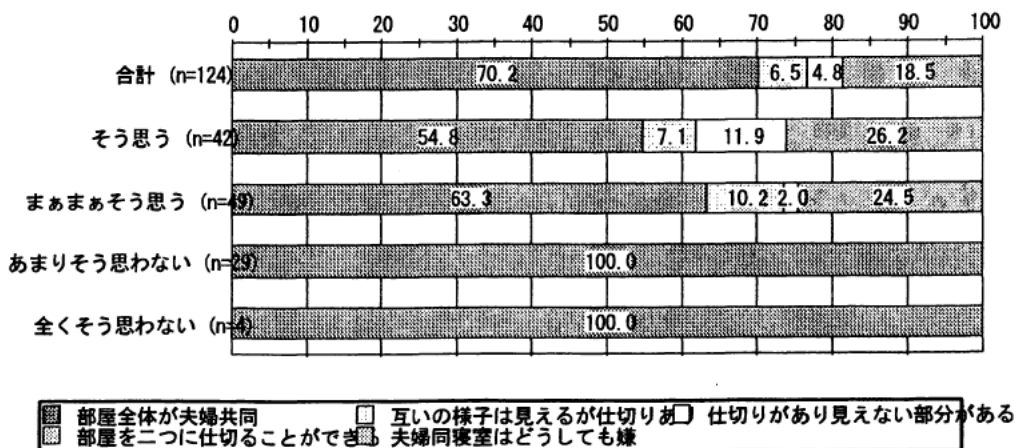


図34 プライバシーの必要性和同室寝室の理想(妻)<同室就寝夫婦>

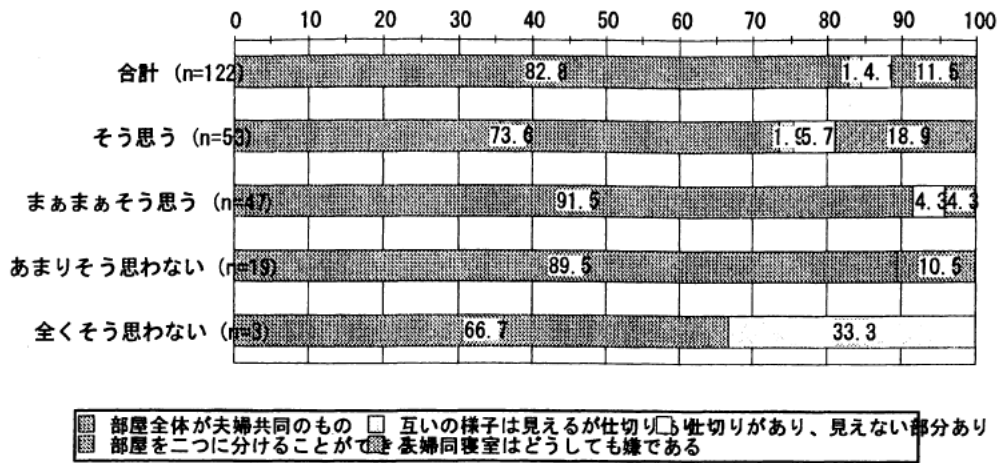


図35 プライバシーの必要性和同寝室の理想(夫) <同室就寝夫婦>

(2) 夫婦別寝室の理想の形態

夫婦別室の場合の理想はどのような形態かについても調査した。「部屋が隣り合い、出入り自由」「部屋が隣り合い、出入りに許可が必要」「部屋が離れ、出入り自由」「部屋が離れ、出入りに許可が必要」「夫婦別寝室はどうしても嫌」の選択肢を用意した。

妻、夫ともに「部屋が隣り合い、出入り自由」が6割を超え最も多く、次いで「夫婦別寝室はどうしても嫌」が、妻14.2% (17人)、夫15.8% (19人) となった。

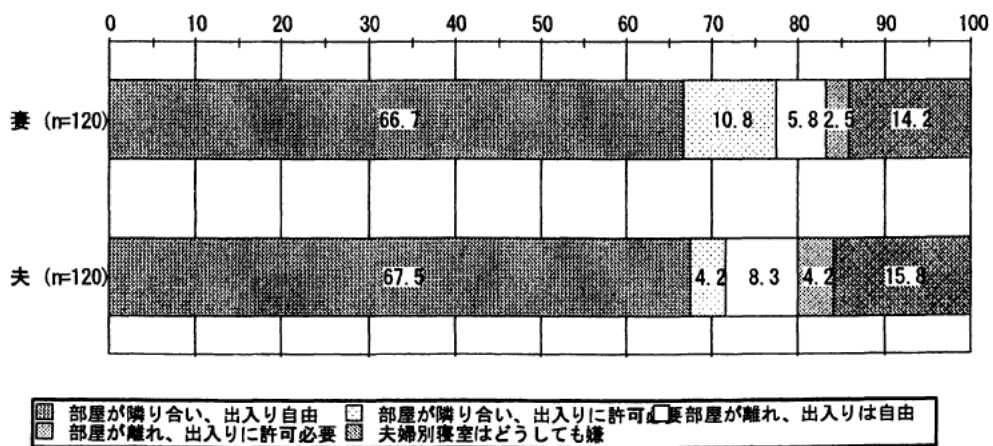


図36 夫婦別寝室の理想の形態<同室就寝夫婦>

妻は20～29歳で「夫婦別寝室はどうしても嫌」の割合が最も高い。30～39歳

は「部屋が隣り合い、出入りが自由」の割合が最も低く、「部屋が隣り合い、出入りに許可が必要」が多くなっている。夫では「夫婦別寝室はどうしても嫌」の割合が最も高いのが30～39歳である。年齢が高くなるに従い、「部屋が隣り合い、出入りが自由」の割合が高くなる。

夫、妻ともに60歳以上の夫と妻は「部屋が隣り合い、出入りは自由」を理想と考える者が多い。この年齢層はお互いの体調や様子を気遣っている世代であり、そのことが影響しているものと思われる。

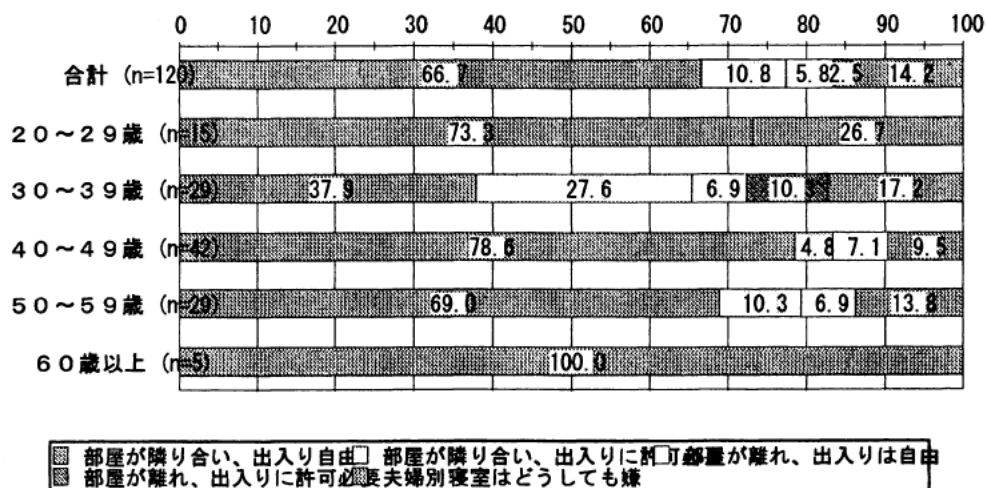


図37 妻の年齢と別寝室の理想<同室就寝夫婦>

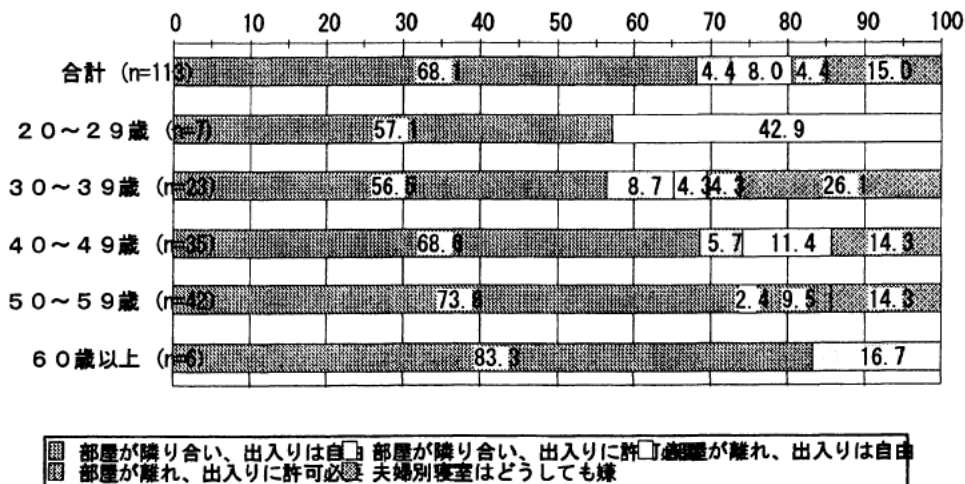


図38 夫の年齢と別寝室の理想<同室就寝夫婦>

夫婦間プライバシーの必要性との関係を見ると、妻・夫ともに互いの寝室を出入りす

るのに許可が必要とするのは、プライバシーの必要性を感じる者に限られ、プライバシー必要性和、自分だけのスペースが要求の強さが関係することがわかる。ただ、プライバシーが必要と考えている者の中にも、夫婦別室を拒否する者があることから、それらが必ずしも別寝室を望んでいるとは言えない。

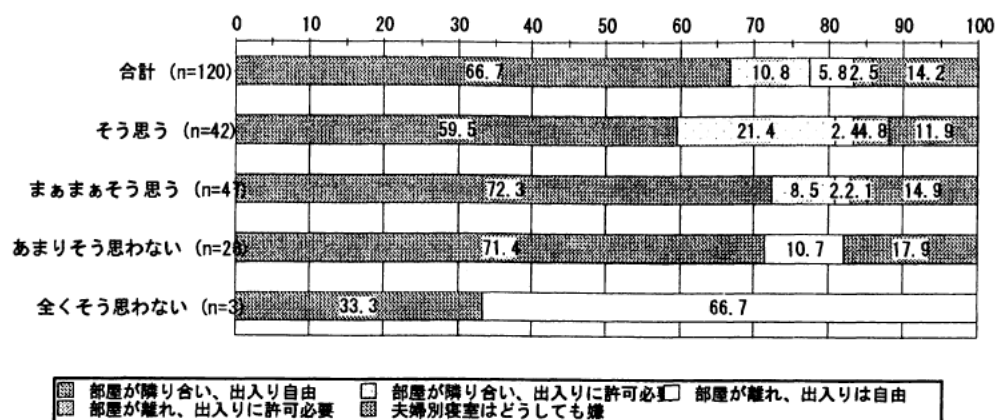


図 3 9 プライバシーの必要性と別寝室の理想 (妻) <同室就寝夫婦>

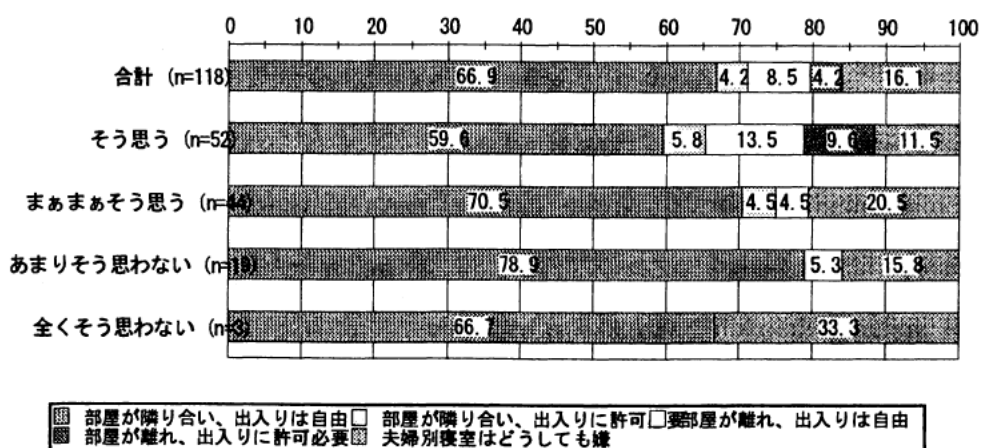


図 4 0 プライバシーの必要性と別寝室の理想 (夫) <同室就寝夫婦>

(3) 今後の夫婦寝室の希望

現在夫婦同室就寝をしている妻、夫ともに、今後も同室を希望する者が圧倒的に多い。しかし、今後は別室を希望する者が、妻 11.8% (14人)、夫 4% (5人) あり、妻のほうが別若干多い。

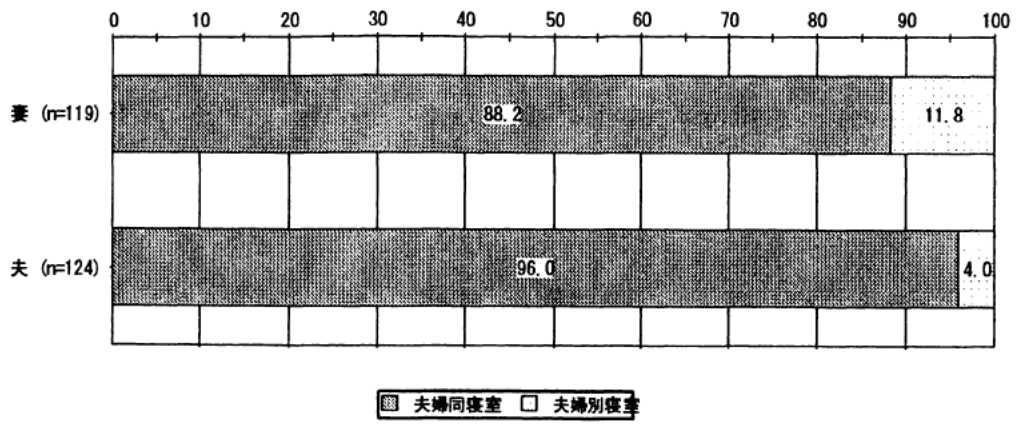


図 4 1 今後の寝室の希望<同室就寝夫婦>

8. 調査対象者の属性〈別室就寝夫婦〉

本調査の分析対象となる318人、159組の夫婦のうち、別々の寝室で就寝している33組の夫婦について検討する。別寝室就寝の夫婦は、調査対象者の20.8%を占める。

(1) 年齢

妻の平均年齢は44.1歳で、同寝室就寝のそれと同じであるが、最も多い年齢層は55～59歳で21.2%（7人）である。夫の平均年齢は45.4歳で、同寝室就寝のそれよりも若干高い。

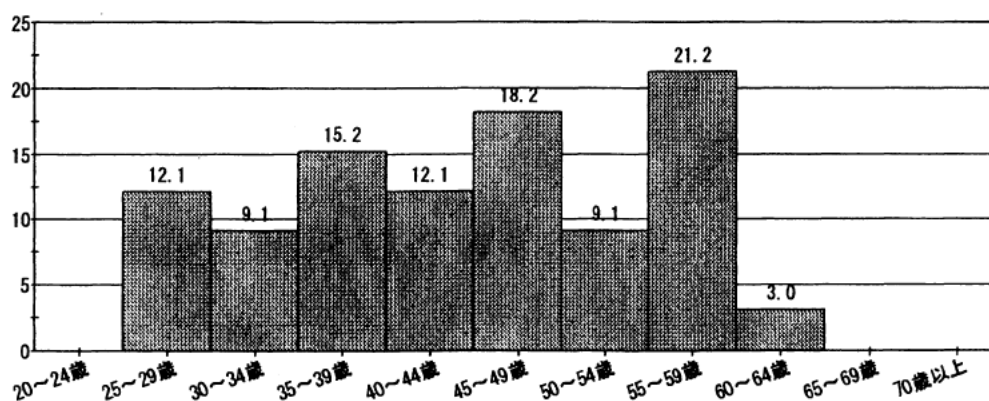


図42 妻の年齢 (n = 33) 〈別室就寝夫婦〉

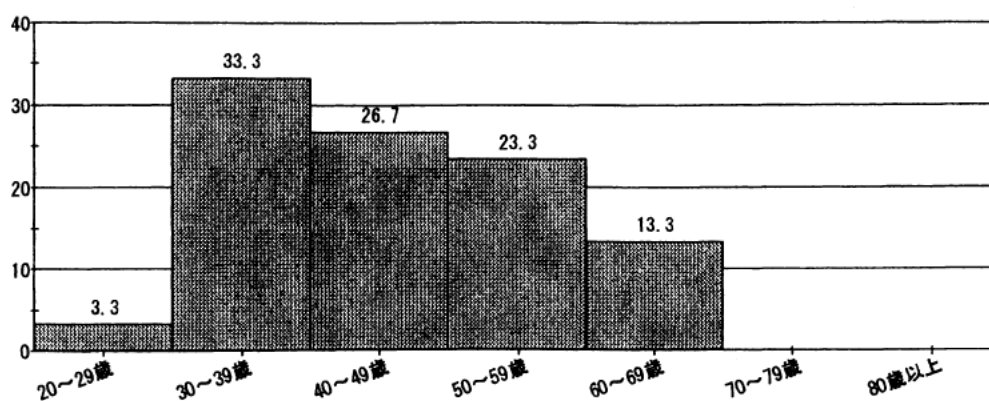


図43 夫の年齢 (n = 30) 〈別室就寝夫婦〉

(2) 職業

妻の職業は「パートタイム」が最も多く42.2%（14人）、次いで「専業主婦」24.2%（8人）である。同室就寝に多かった「専門職・技術職」の割合は少ない。

夫の職業は「会社員」が圧倒的に多く60.6%（20人）を占め、同室就寝と比べ、「管理職」の割合が少ない。

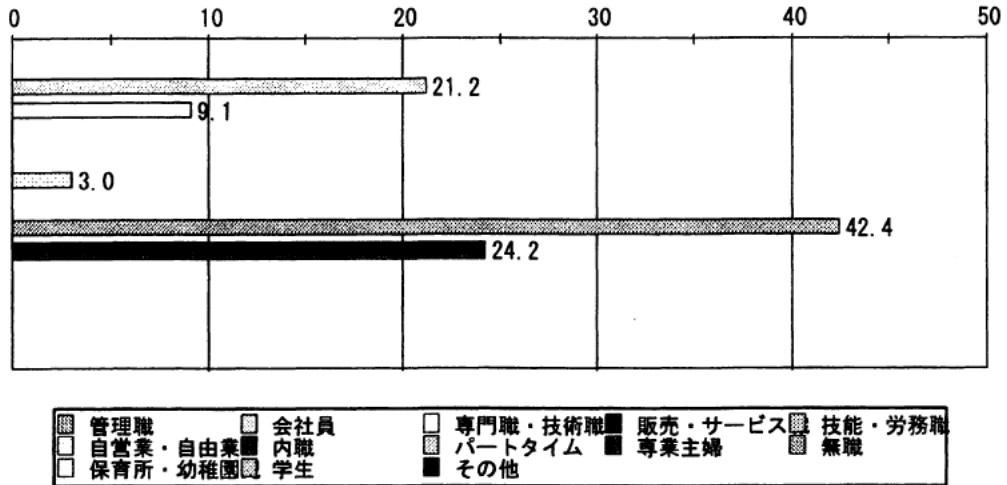


図44 妻の職業 (n = 33) <別室就寝夫婦>

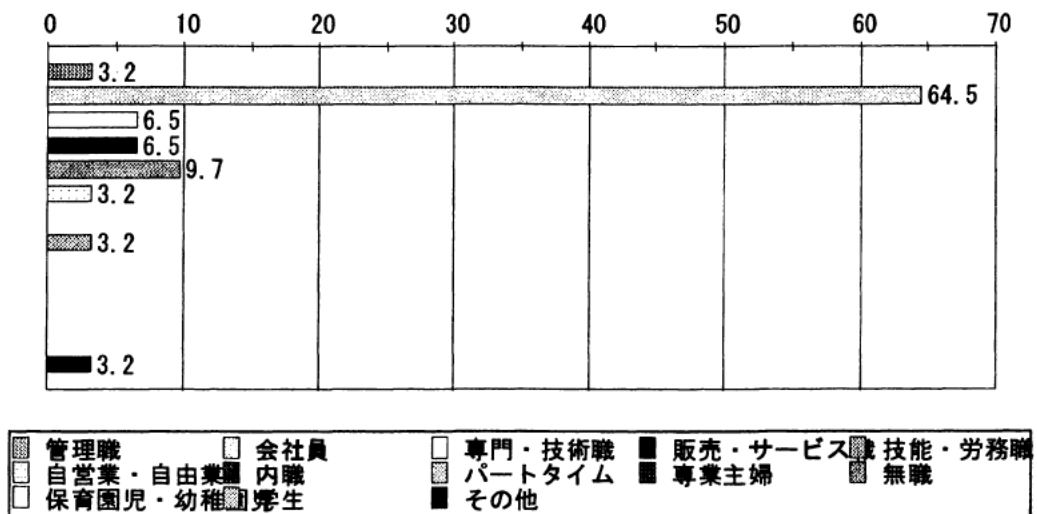


図45 夫の職業 (n = 31) <別室就寝夫婦>

(3) 家族構成

平均同居家族人数は4人、最も多い同居家族人数も4人で46.9%（15世帯）である。同室就寝世帯ではあった7人以上はない。

同居子ども数は2人が圧倒的に多く59.4%（19世帯）、同室就寝世帯ではあった同居子ども数が三人、四人以上の世帯はない。子どもと同居していない世帯は18.8%（6世帯）と、同室就寝世帯より少ない。

同居の長子年齢は20～24歳と5～9歳が最も多く26.9%（7世帯）である。同居の末子年齢は0～4歳が最も多く26.9%（7世帯）となり、次いで20～24歳、15～19歳が18.2%（6世帯）となり、同室就寝とほぼ同様である。

父母とはどちらとも同居していない夫婦が最も多く68.8%（22世帯）である。孫と同居しているのは3%（1世帯）である。

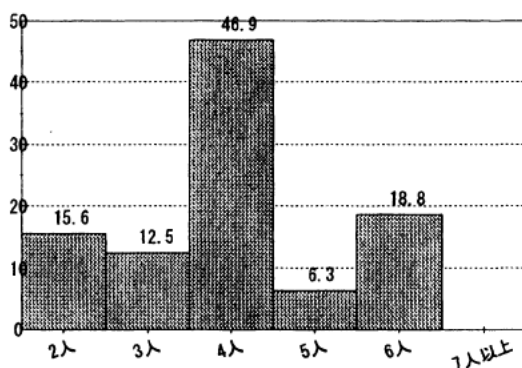


図46 同居家族人数<別室就寝夫婦>

(n = 32)

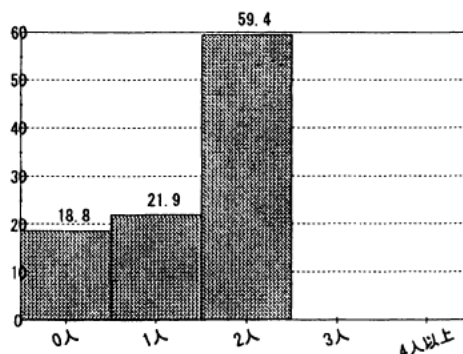


図47 同居子ども数<別室就寝夫婦>

(n = 32)

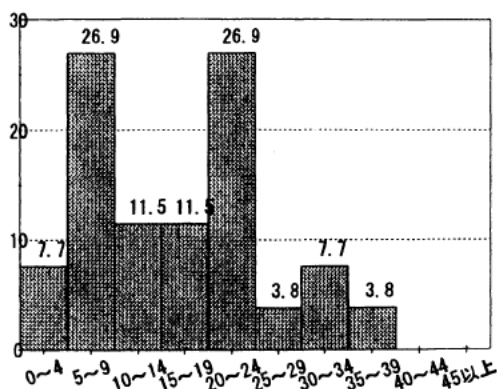


図48 同居の長子年齢<別室就寝夫婦>

(n = 26)

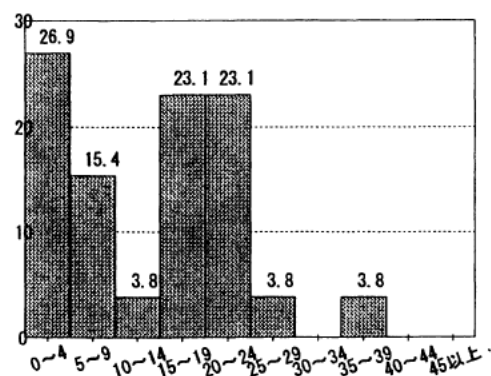


図49 同居の末子年齢<別室就寝夫婦>

(n = 26)

(4) 住宅形態および延べ床面積

独立住宅居住世帯が圧倒的に多く93.9%(31世帯)で、同室就寝夫婦世帯よりやや多い。

延べ床面積は、40～59坪が一番多く33.3%(10世帯)を占める。

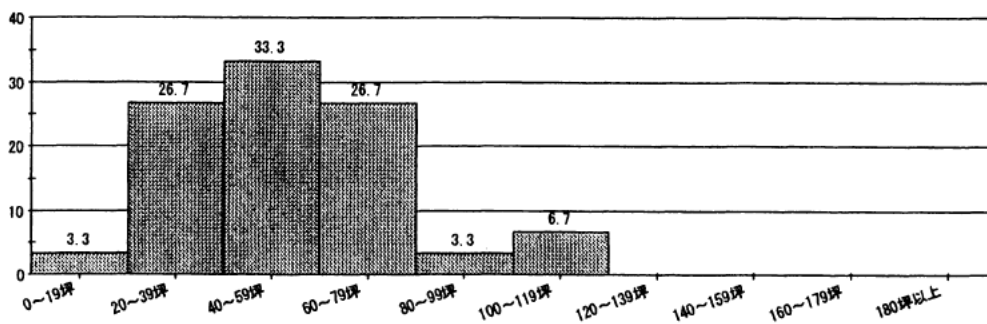


図50 延べ床面積 (n=30) <別室就寝夫婦>

9. 寝室の実態および意識<別室就寝夫婦>

(1) 個室

別室就寝は各々別の個室を持つ場合と、夫婦寝室にいずれか一方が就寝し、他方が共同の部屋など他の部屋を使用する場合などさまざまな形態が考えられる。妻・夫それぞれの個室の有無をみると、個室を持つ妻は57.6% (19人)、個室を持つ夫は72.7% (24人) となった。同室就寝夫婦は、妻の個室が7.4%、夫の個室が24.2%であることを考えれば、別室就寝夫婦は就寝だけでなく、個室として確立しやすい。

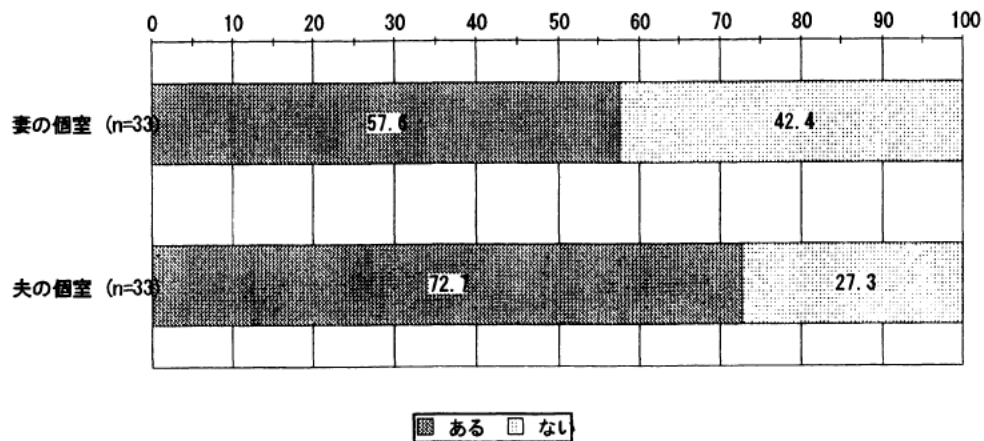


図51 個室の有無<別室就寝夫婦>

別就寝をしていて妻の個室がないと回答する場合は、子どもと就寝していることが多い。

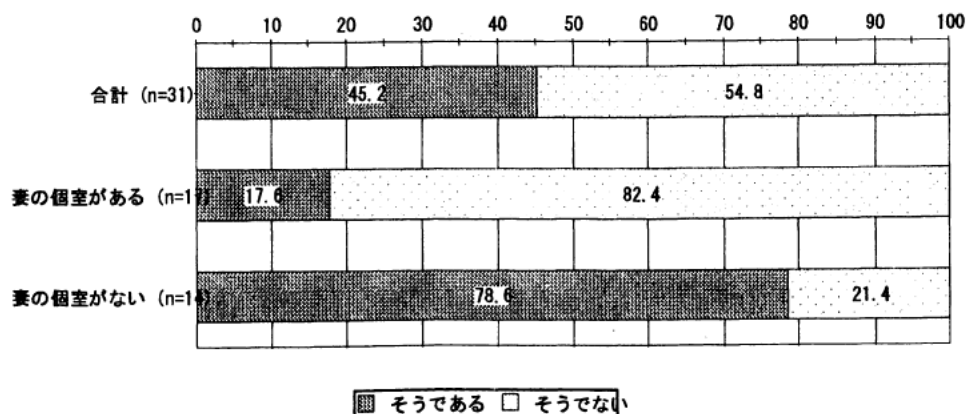


図52 妻の個室の有無と子どもと就寝しているか

子ども部屋の有無については、あるのは72.7% (24世帯)、ないのは15.

2%（5世帯）、いないのは12.1%（4世帯）で、同室就寝とほぼ同じ結果となった。

（2）平日自宅で過ごす時間

平日自宅で過ごす時間については、妻の20～24時間自宅で過ごす割合が別室就寝の方がやや低く、12時間未満が多いなど、同室就寝と比較し、全体に自宅で過ごす時間が少ない。

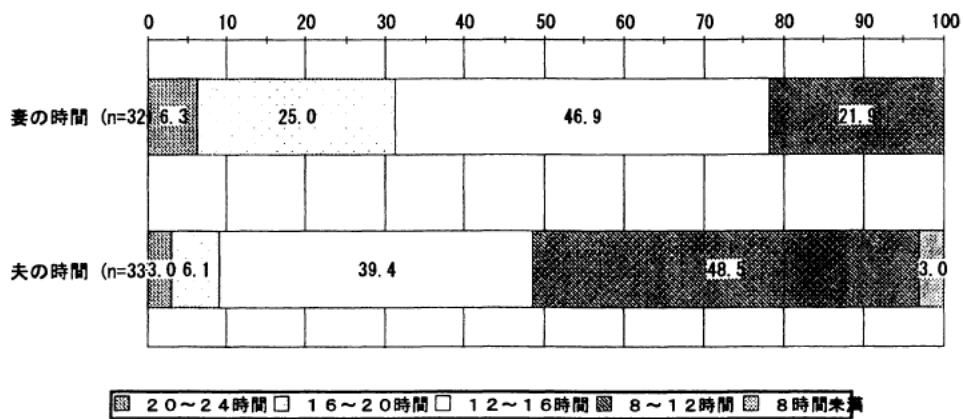


図53 平日自宅で過ごす時間<別室就寝夫婦>

（3）大切にしたい時間

別室就寝33世帯中子どものいる世帯は29世帯である。

子どもを持つ夫婦にとって「大切にしたい時間」は、妻・夫ともに「家族みんなの時間」が最も多く、妻50.0%、夫62.1%を占める。特徴的であるのが、「夫婦の時間」を大切に回答する者が、妻、夫ともに同室就寝の子どもを持つ夫婦より10ポイント以上少なく、妻・夫ともに1割となった。また、同室就寝の妻と比較し別室就寝の妻は「子どもとの時間」を大切に回答する者が35.7%（10人）と多い。同室就寝の妻では15%以上あった「一人の時間」を大切にすると回答しているが、別室就寝の妻はわずかに3.6%である。夫は同室就寝の夫と同程度であった。妻は個室がない場合は一人の時間を努力して獲得しようとしているのに対し、別就寝の妻は個室で一人の時間は常時確保されているため、むしろ家族との時間を大切に思っているであろう。

平日自宅で過ごす時間との関係を見ると、妻は24～12時間自宅で過ごす者で、

「一人で過ごす時間」と回答した者がいない。自宅で過ごす時間が短い夫は、同室就寝に比べ「夫婦で過ごす時間」「家族みんなで過ごす時間」が多い。別室就寝の夫は同室就寝の夫に比べ、家族で過ごす時間を大切に思っていることがわかる。

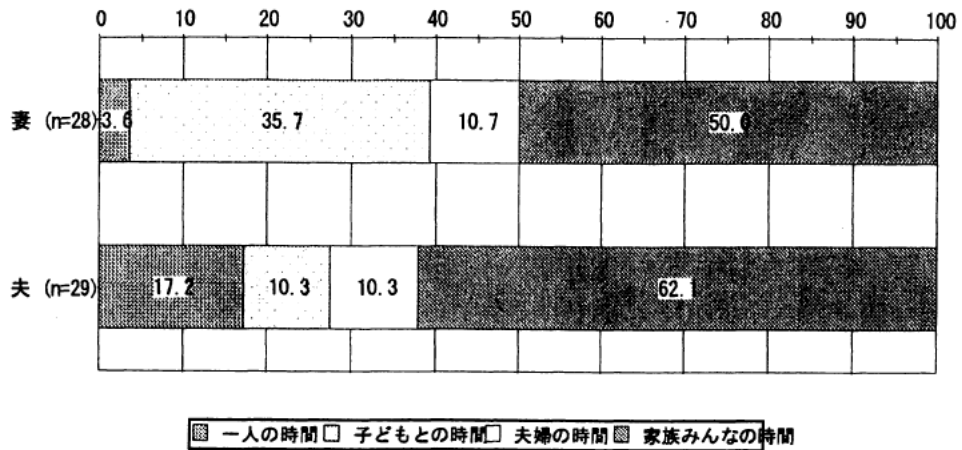


図5 4 子どもを持つ夫婦の大切にしたい時間<別室就寝夫婦>

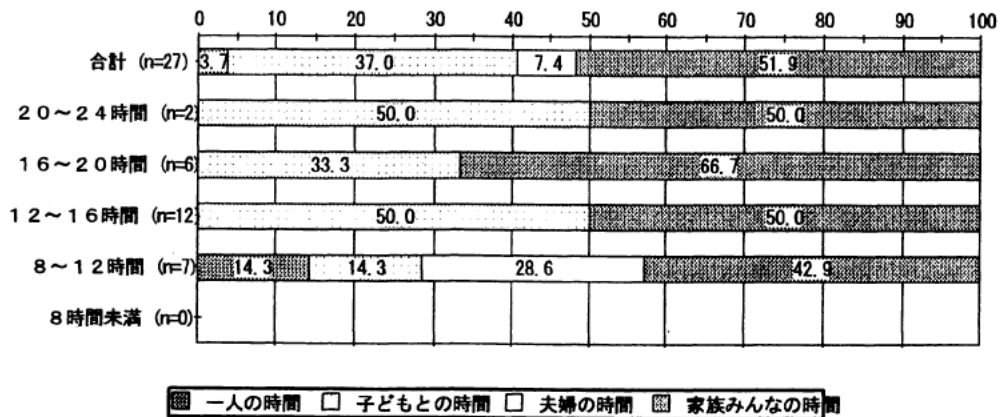


図5 5 妻の自宅で過ごす時間と大切な時間<別室就寝夫婦>

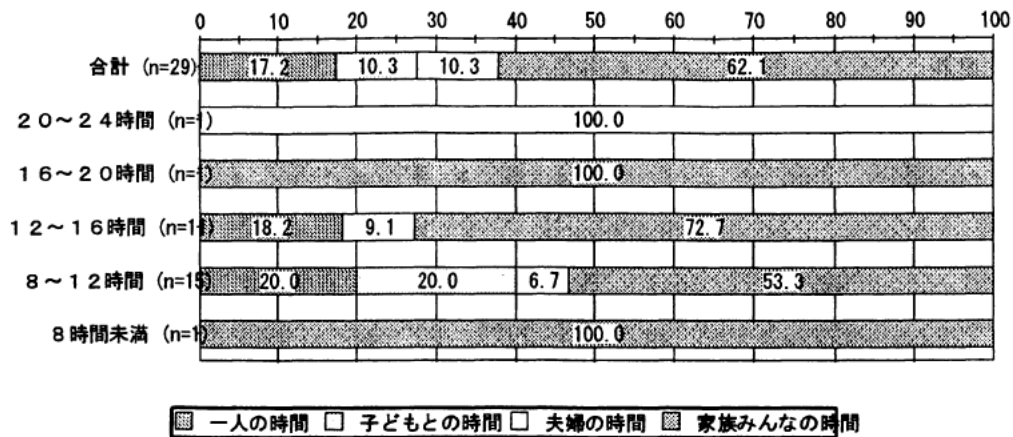


図56 夫の自宅で過ごす時間と大切な時間<別室就寝夫婦>

(4) 家事は女性の仕事か

家事を男性よりも女性がするのは当然と思っているのかについては、同室就寝に比べ妻・夫ともに「当然ではない」との回答が若干多く、妻は57.6% (19人) と半数以上が「当然ではない」と感じている。

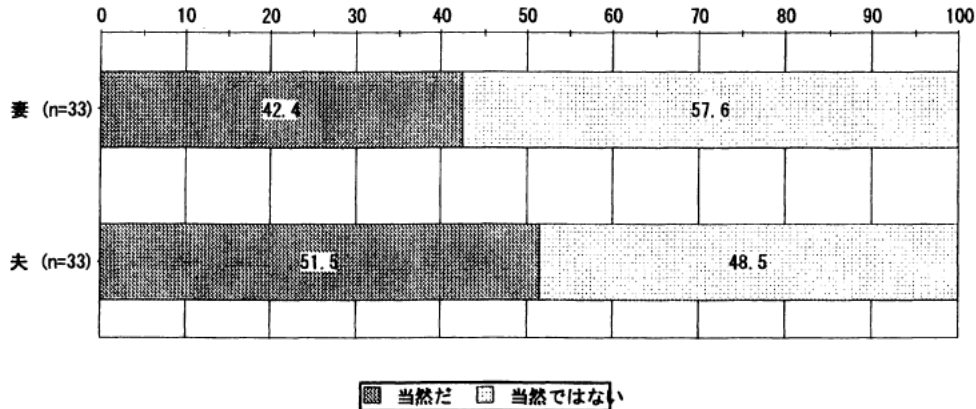


図57 女性が男性より家事をするのは当然だと思うか<別室就寝夫婦>

(5) プライバシーの必要性

夫婦間プライバシーの必要性については、「そう思う」が妻51.5% (17人) と半数を超え、夫でも39.4% (13人) となり、同室就寝よりも多い。同室就寝の場合は夫の方がプライバシーを必要とする傾向が見られたが、別室就寝では逆に妻の方がプライバシーを必要とする傾向が見られる。別室就寝の夫婦は同室就寝の夫婦よりもプ

プライバシーに対する意識が高く、必要としていることがわかり、特に妻にその傾向が見られることがわかる。

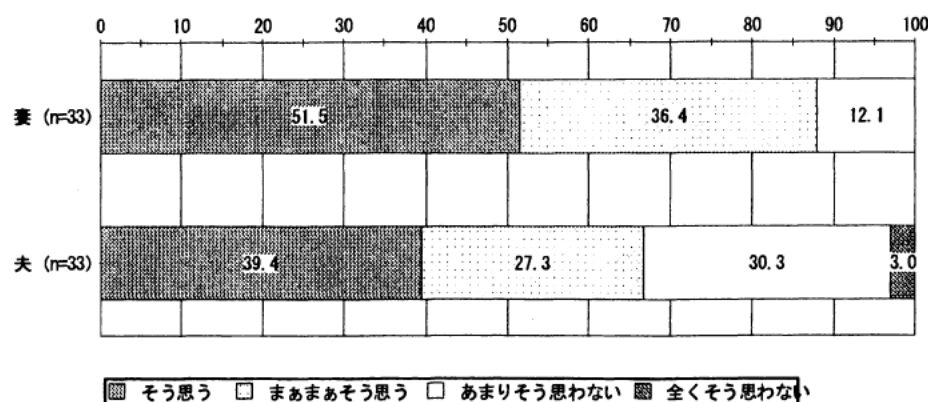


図58 夫婦間のプライバシーの必要性<別室就寝夫婦>

(6) 別就寝にした理由

夫婦別就寝にした理由について、次のような理由を列挙し、あてはまるものを選択させた。

- 「ご主人（奥様）と生活時間が違い、気を使わないようにするため」
- 「お互い一人で好きなことをする時間も大切にするため」
- 「ご夫婦お互いのいびきやねごと、ねぞうを気にしないため」
- 「寝る時の環境（光、温度、音など）がご夫婦で違うから」
- 「寝付くまでの時間を一人で過ごしたいから」
- 「お子様が成長して家を出て、部屋が空いたから」
- 「自分は同寝室が良いが、ご主人（奥様）が別寝室を希望したから」
- 「夫婦仲が変化したから」
- 「お子様の授乳、夜泣きのため」
- 「その他」

最も理由として挙げられたのは、「気を使わないため」で45.5%、次いで「いびきやねぞうなど気にしないため」39.4%、「一人の時間を大切にするため」36.4%、「寝る環境が違うから」30.3%で、これらが主な理由である。お互いが自分の時間と空間を大事にし、また就寝環境を自分本位に整えるためで、自分は納得していない場合や夫婦仲の変化などはほとんど理由として挙げられなかった。

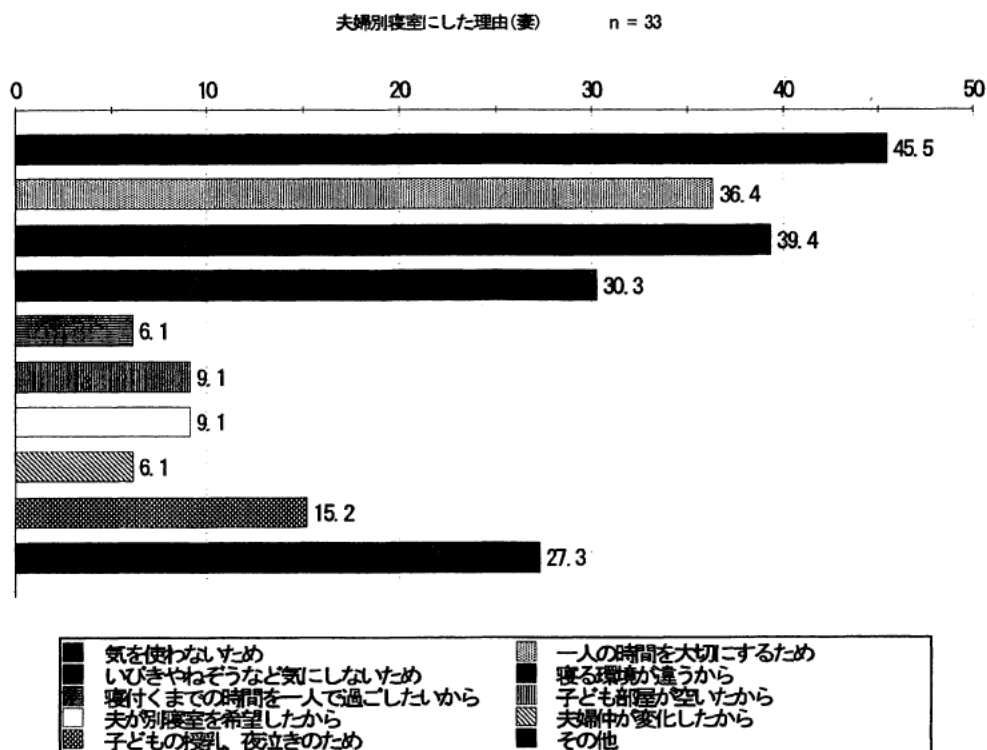


図 5 9 別就寝理由<別室就寝夫婦>

(7) 別寝室に対する意識

夫婦別寝室であることに対し、以下に示す 14 項目の意見に同意するかを調査した。

「ご主人（奥様）に気を使うことなく、自分の生活時間に合わせて生活できる」

「自分の仕事や趣味を一人でできる空間があることが良い」

「ご主人（奥様）のものまで管理しなくていいのが楽だ」

「かえって掃除などの管理をする部屋が増えた」

「自分のコーディネートした部屋が持てて楽しい」

「夫婦だという実感がない」

「ご主人（奥様）のことが嫌いというわけではない」

「夫婦別々に寝ていることをあまり人に知られたくない」

「子どもに悪影響を与えてしまう」

「自分の寝室とご主人（奥様）の寝室、どちらが快適か比べてしまう」

「夫婦間の会話が少ないことが不満だ」

「夫婦間のスキンシップがとりにくいのが不満だ」

「育児を押し付けられた気がする」

「孤独を感じる」

「その他」

妻・夫ともに「お互いのことが嫌いなわけではない」の同意率は高く、妻90.9%、夫96.7%あり、夫婦関係が破綻して別室就寝しているわけではないと回答している。妻も夫も「自分の生活に合わせて生活できる」「仕事や趣味を一人でできて良い」と回答する割合が高く、相手に気を使わずに過ごす時間ができることを評価している。

「夫婦別寝室であることを知られたくない」と回答した者は、妻で12.1%(4人)、夫13.8%(4人)と少数である。「女性は男性よりも家事をするのが当然か」の質問との関係を見ると、妻では知られたくないと回答した全員が女性の家事を「当然だ」と思い、夫では知られたくないと回答した4人中3人が「当然だ」と思っている。このことから、社会規範に縛られる傾向がある者は、「夫婦は同じ寝室で寝るべき」という規範を気にし、他人にその規範から外れていることを知られたくないと感じているのではないか。

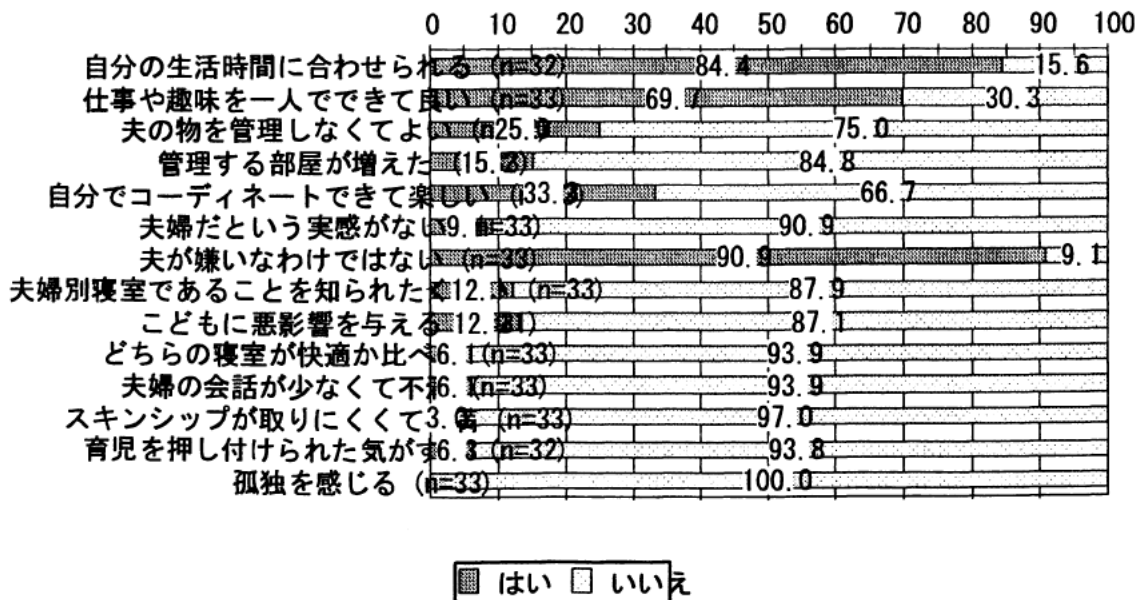


図60 別寝室で感じること(妻)〈別室就寝夫婦〉

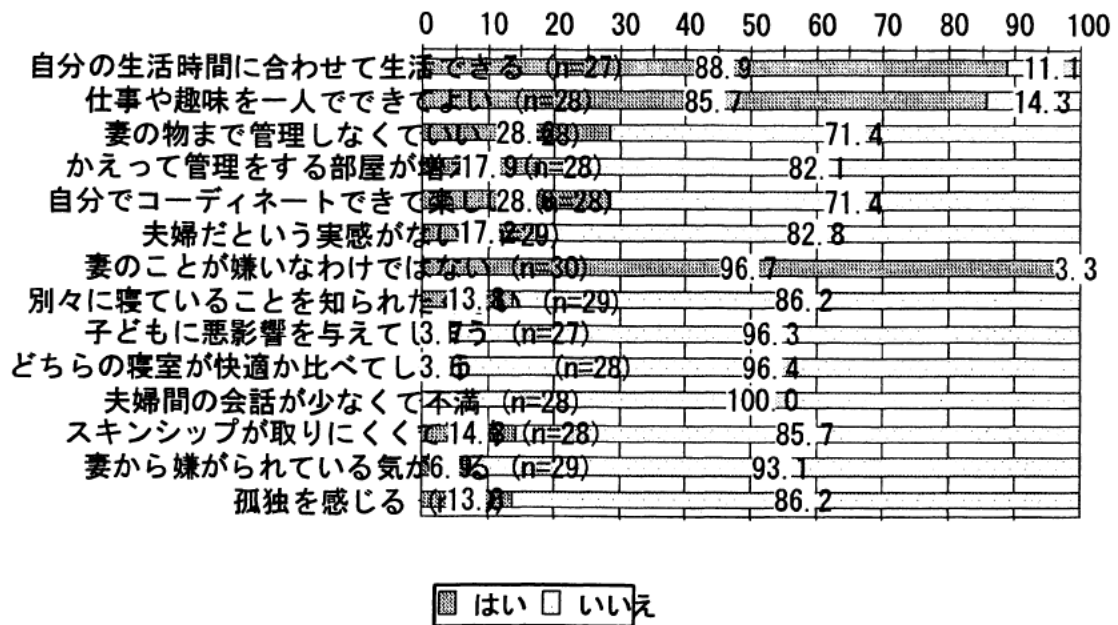


図 6 1 別寝室で感じること (夫) <別室就寝夫婦>

(8) 別寝室の満足度

「仕事や趣味を一人でできてよい」と回答した妻の方が、「いいえ」と比較し、別就寝について「大変満足」と回答する割合が高い。「夫の物を管理しなくて良い」「自分でコーディネートできて楽しい」の回答についても同様のことがいえる。つまり、別就寝は、自分ひとりで空間を自由に使えることや、夫の物の管理などの家事負担、自分の好みの部屋作りができることに満足しているといえる。

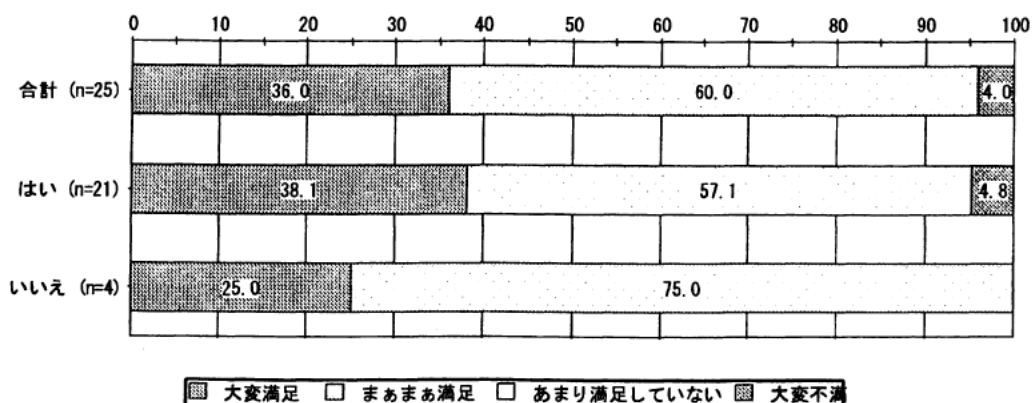


図 6 2 仕事や趣味を一人でできて良い×満足度 (妻) <別室就寝夫婦>

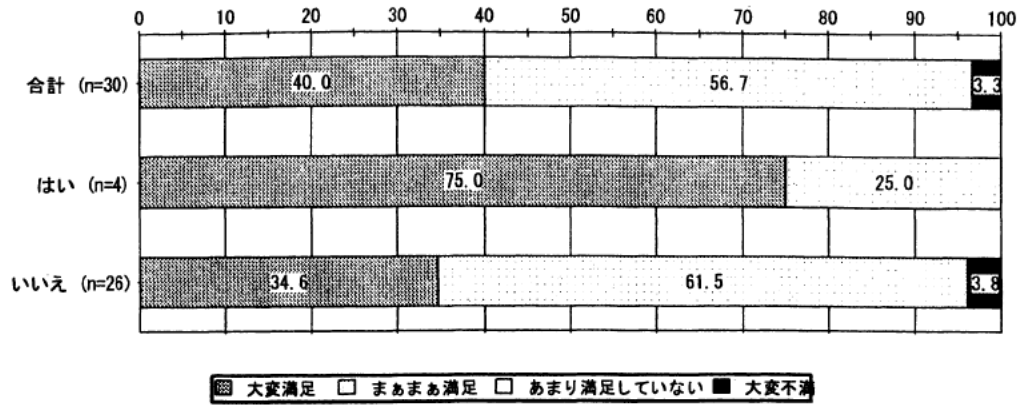


図 6 3 管理する部屋が増えた×満足度 (妻) <別室就寝夫婦>

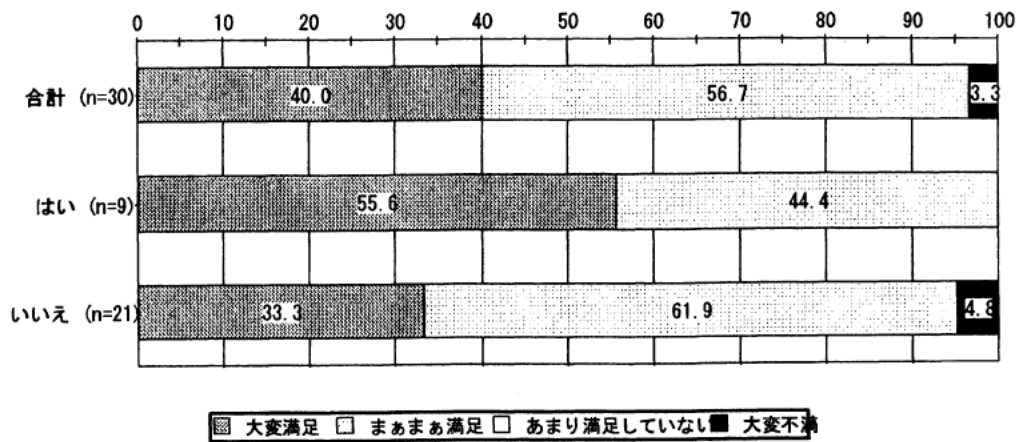


図 6 4 自分でコーディネートできて楽しい×満足度 (妻) <別室就寝夫婦>

10. 今後の夫婦寝室の行方

(1) 個室の使用目的

もし自分の個室を持てるとしたら何をしたいのか、個室を既に持っている者には何をしているのかを調査した。「一人になりたい」「仕事や趣味を集中してやる」など8つの選択肢の中から当てはまるもの全てを選ぶ方法とした。

妻、夫ともに「仕事や趣味を集中してやる」が最も多く、妻61.5%（91人）、夫72.2%（109人）となった。次いで妻と夫ともに「1人になりたい」で、妻37.8%（56人）、夫32.5%（49人）である。妻の選択肢の中に「主婦としての役割から解放されたい」という選択肢を入れたところ、23%（34人）から回答が得られた。その他には「気楽に過ごしたい」「妻を招待する」「静かに読書をする」などである。「趣味や特技を活かして教室を開く」「自宅ショップを開く」などの希望はいずれも非常に少ないことがわかった。

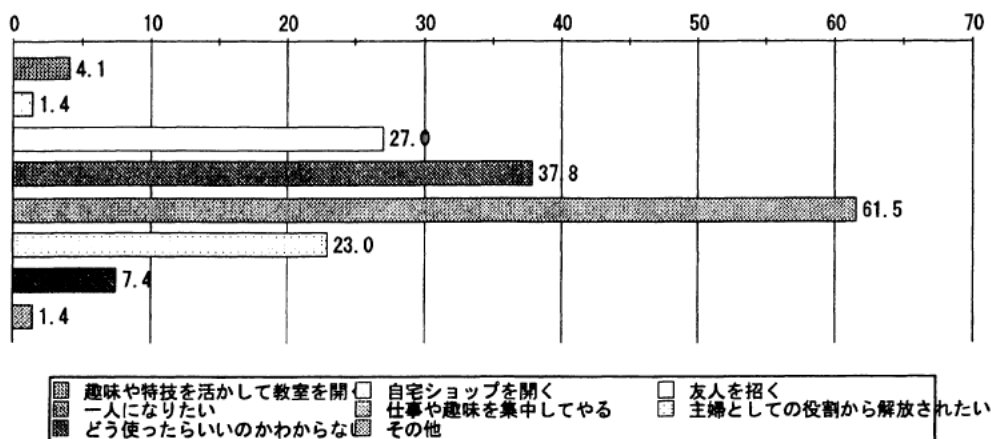


図64 妻の個室の使用目的（仮定）（n=148）（複数回答可）

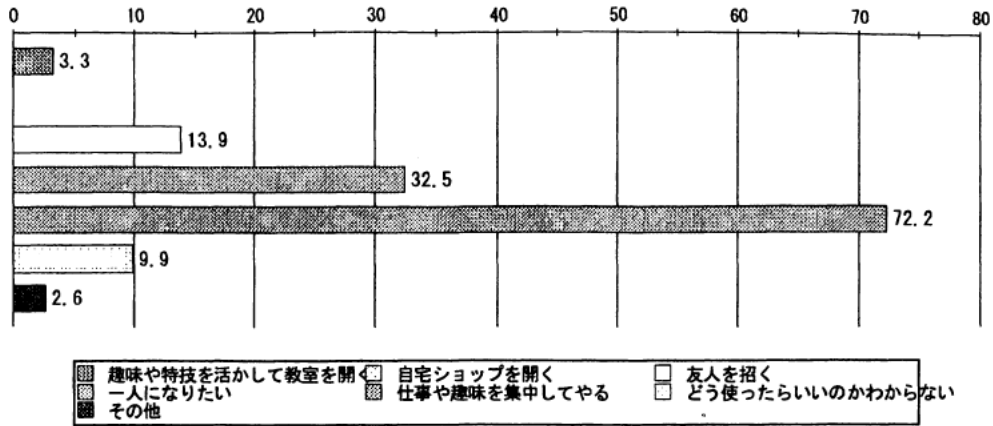


図 6 5 夫の個室の使用目的 (仮定) (n = 1 5 1) (複数回答可)

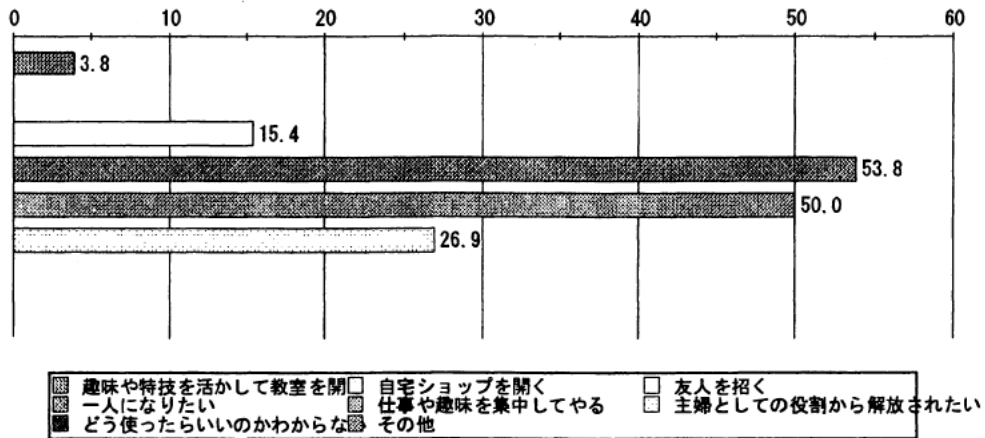


図 6 6 個室を持つ妻の個室の使用目的 (n = 2 6) (複数回答可)

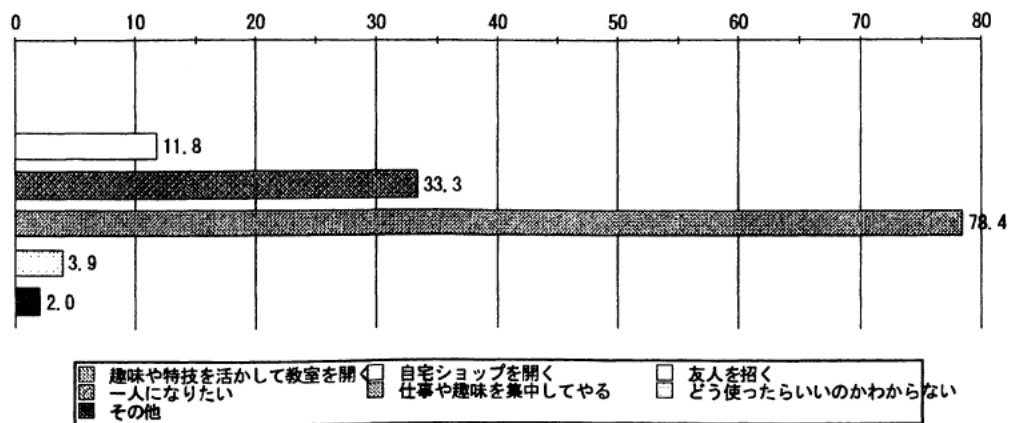


図 6 7 個室を持つ夫の個室の使用目的 (n = 5 1) (複数回答可)

(2) 夫婦寝室と個室のあり方

夫婦寝室と個室のあり方について、「夫婦の寝室があればお互いの個室は必要ない(以下、夫婦寝室のみ)」「夫婦の寝室も必要だし、お互いの個室も必要だ(以下、夫婦寝室と個室)」「お互いの個室があれば夫婦の寝室は必要ない(以下、個室のみ)」の中から一つ選択させた。

妻・夫ともに「夫婦寝室と個室」とした者が最も多く、妻52% (78人)、夫66.7% (102人)である。次いで「夫婦寝室のみ」が妻32% (48人)、夫28.8% (44人)となった。夫婦寝室は必要だと感じている者が全体の8割以上を占めるものの、夫婦寝室だけでは満足しない者が半数以上おり、夫婦寝室とともにお互いの個室も必要と感じている者が多いことがわかる。

妻の「個室のみ」が夫よりも多く、夫よりも妻の方が別室就寝を望む傾向がみられる。

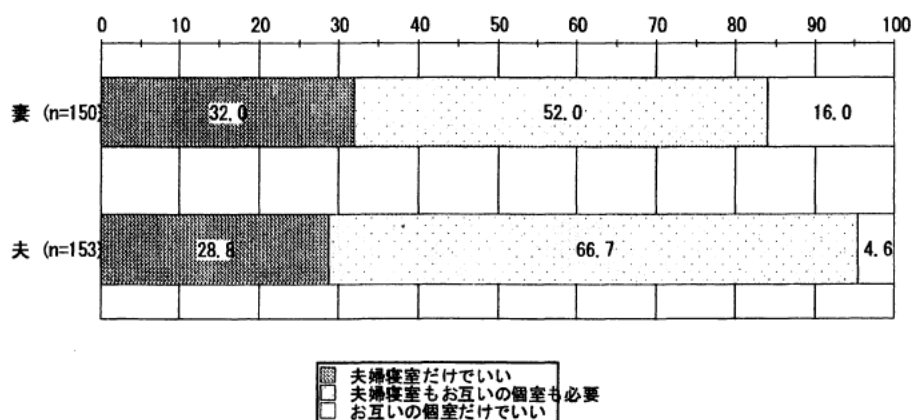


図68 夫婦寝室と個室のあり方

妻は20～29歳の若年齢層で「夫婦寝室のみ」が6割を占め、どの年齢層よりも高い。夫は年齢が高くなるに従い「夫婦寝室のみ」と回答する割合が減り、「個室のみ」が多くなる。

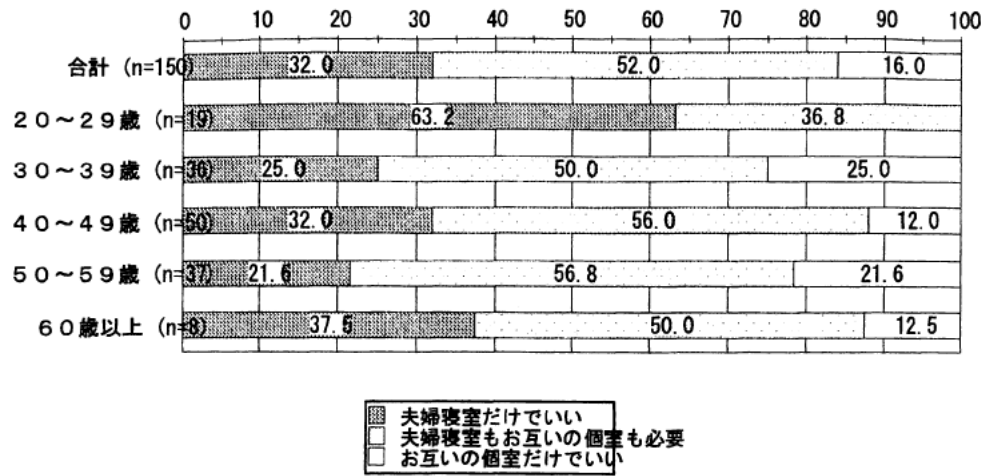


図 6 9 妻の年齢と夫婦寝室と個室のあり方

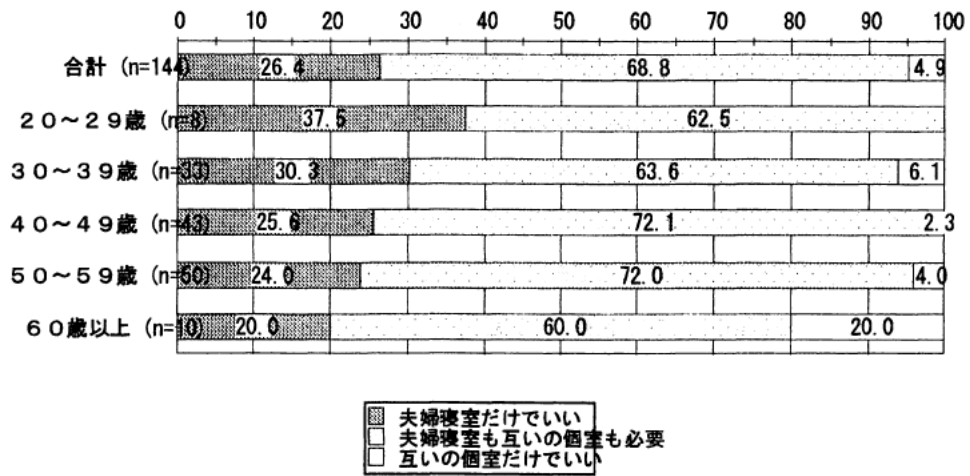


図 7 0 夫の年齢と夫婦寝室と個室のあり方との関係

結

高齢者、子ども、女性の視点から、中心市街地居住を検討した。

「Ⅰ. 高齢者とコミュニティバス」においては、高齢者の日常的な外出の手段として、金沢市のふらっとバスの評価について述べた。元気な高齢者の外出頻度は高く、特に買い物、余暇活動目的の外出が多い。主に徒歩やバスの利用が多く、高齢者にとってバスは日常的に利用されている。ふらっとバスの認知度や評価は高い。車体などのハード面はもとより、低料金や運転手の人柄や対応の良さに大きな満足が得られている。このように評価が高く、外出の利便性が高まることから、運行ルートの拡充を望んでいる。最も不満が表れたのはバス待ち環境である。今後高齢者に利用しやすい環境の整備が求められよう。

「Ⅱ. 子どもの外遊び環境」では、子どもが日常的に自動車交通やおとなによる危険にさらされている現状が明らかになった。自転車や歩行空間、公園内のみならず公園周辺においても、歩道の整備や自動車の規制などにより守られることが必要である。また、公園の死角となる場所はホームレスなどの居場所や高校生などのたまり場となりがちで、子どもにとっては不安な場所となり、外遊びを阻害している。このような不安感のない公園は、特に小さい子どもたちには人気があり、今後の公園・遊び場づくりに活かせるだろう。今後中心市街地では、ファーストフード店、コンビニ、ファッションや雑貨の店舗など、子どもが望む商店の増加は叶えられるだろう。しかし一方で自然や動物と触れ合えるような遊び場も望んでいる者も多く、子どもの望ましい発達を考え、身近な場所でのびのびと過ごせる環境を造っていくべきだろう。

「Ⅲ. 既婚女性の求める住宅平面構成」は、今後の都市住宅平面計画への基礎的研究である。さまざまな場面で個人化がすすむ中、夫婦の就寝形態には夫婦寝室におさまらない現状があることがわかった。妻はかなりの割合で個室要求を潜在的に持っている。また、就寝環境の個人化志向から、夫婦別就寝希望も見られる。今後ただちに夫婦別就寝に移行するとは考えられないが、定住できる質を備えた住宅の計画には、夫婦寝室にそれぞれの個室を持つパターンなど、多様な選択肢をつくることも考えられる。調査実施上のミスで調査対象者が中心市街地居住者を特定できなかったこともあり、今後は都市居住者と郊外居住者との意識や志向の相違などを調査検討する必要があるだろう。